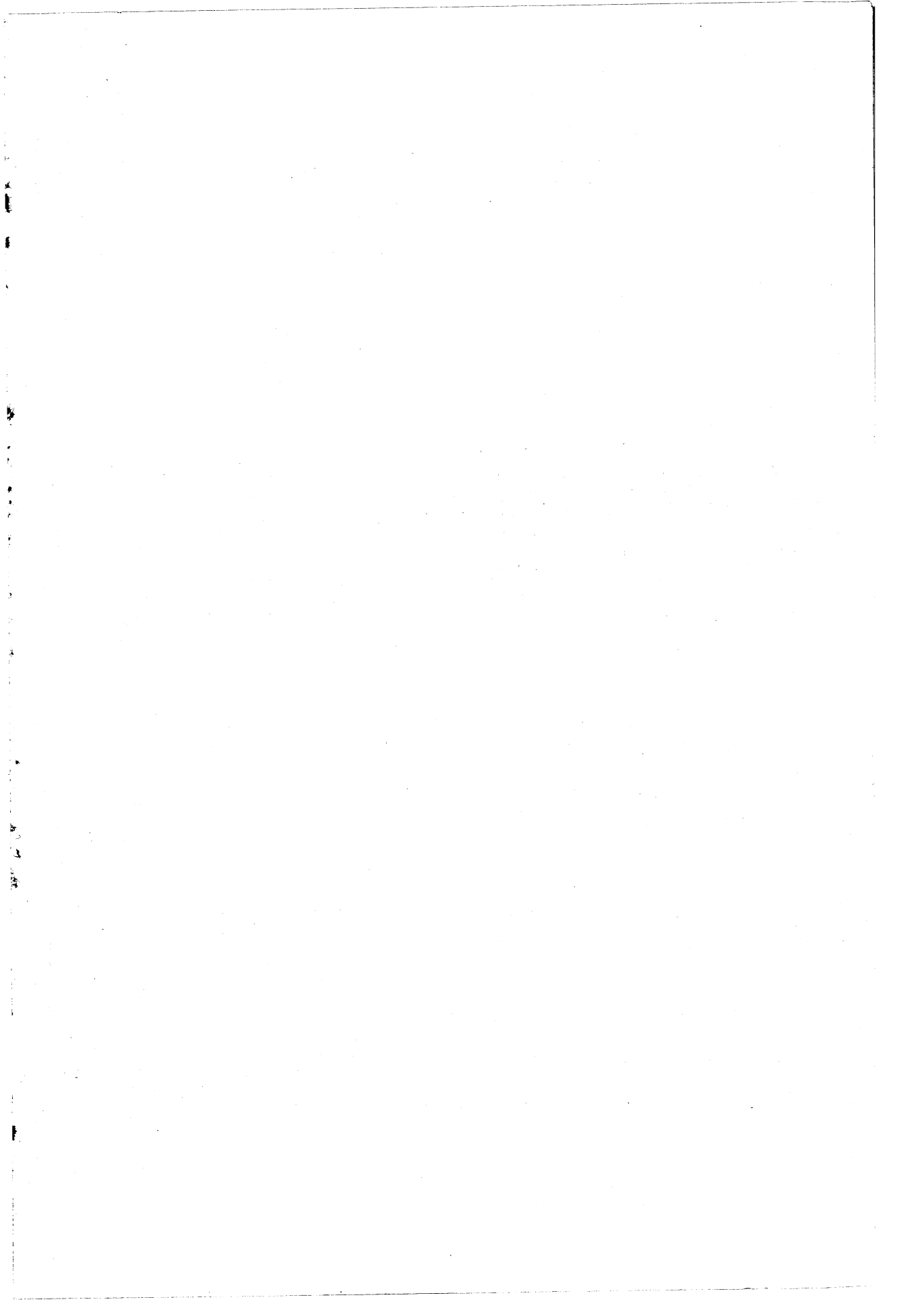


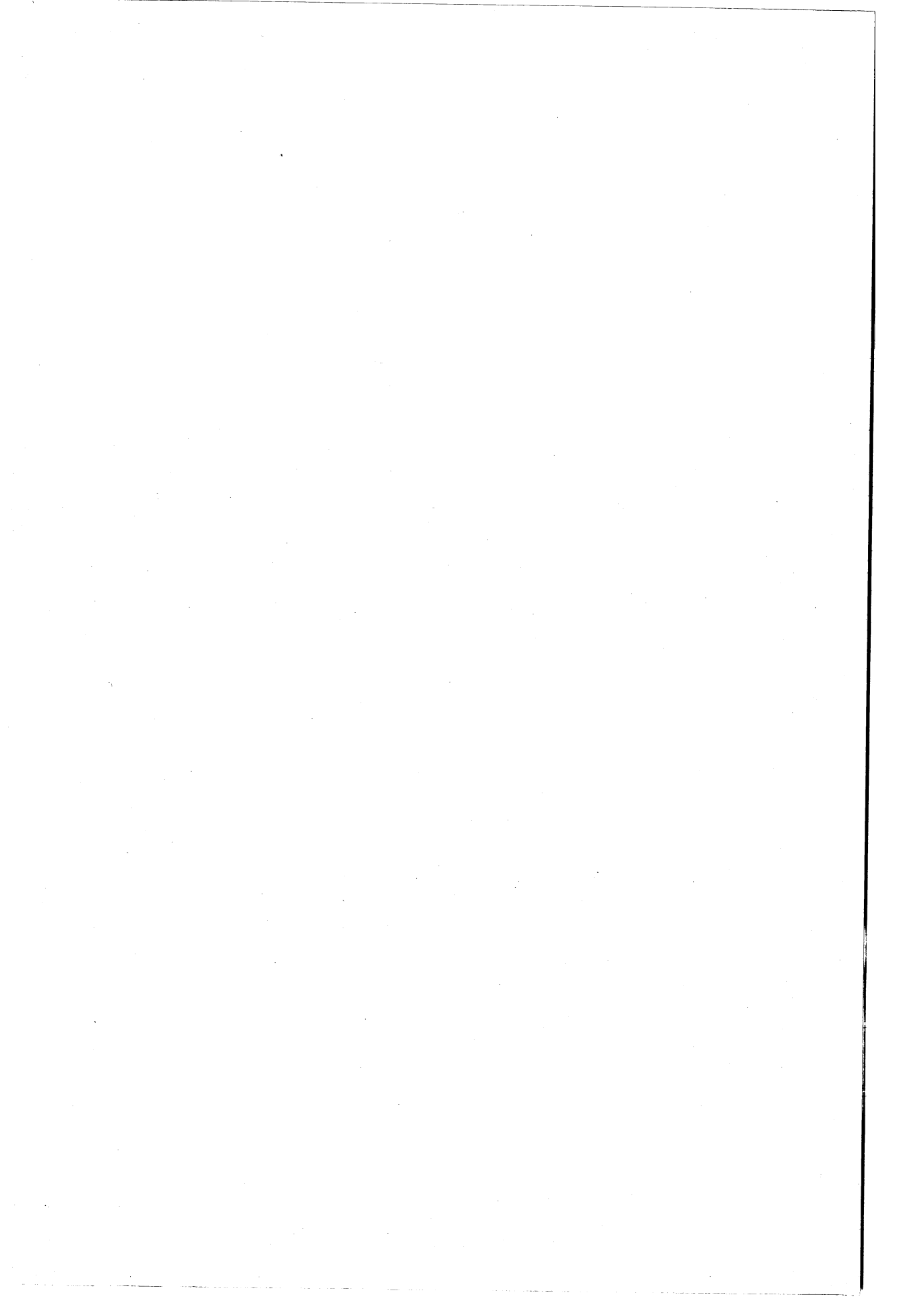
時報

X

1 9 6 4

甲南山岳部・甲南山岳会





時 報

KONAN ALPINE CLUB

No. X

1964

甲南大学山岳部・甲南高校山岳部

甲 南 山 岳 会

＝リ－ダ－所感＝

大学山岳部と海外遠征について	鈴木	功	2
63年度 リーダー会 反省	井本	洋	3

＝報 告＝

I. 春山合宿 烏帽子岳・白馬岳間縦走			7
偵察行 1. 五月合宿における偵察行	菅	義弘	9
2. 夏山合宿における偵察行	菅	義弘	10
3. 烏帽子岳より七倉岳まで	井本	洋	11
合宿日誌	水渡清夫		13
春山合宿サポート隊について	柏敏明		25
春山合宿 装備 反省	横山	洋	26
春山合宿 食糧 反省	鈴木	功	27
合宿後記	水渡清夫		28
II. 冬山合宿 北鎌尾根・横尾々根			30
北鎌尾根日誌	柏敏明		33
横尾々根日誌	鈴木	功	40
横尾々根雪洞ビバークから槍アタック	鈴木	功	42
合宿後記	井本	洋	42
III. 夏山合宿 東大谷			44
63年度夏山合宿について	井本	洋	44
前劔西尾根	菅義弘		48
劔岳東大谷 G ₁ ・G ₂ ・G ₃ 連続登攀	伊丹徳行		48
西劔西壁	菅義弘		53
駒草ルンゼ	横山	洋	54
東大谷パーティの反省	菅義弘		56
IV. 柳又谷 遊行			58
黒薙川(柳又谷)遊行	神前正博		60

次

＝ 研 究 ＝

ヒマラヤにおける食糧	塩 路 晃二郎	66
800m 最後の峰	沢 敏 明	74

＝ 紀 行 ＝

カルカッタ・カトマンズ「調査報告」	エクスペディション委員会	81
日 誌	85 五月合宿に於ける鹿島槍荒沢奥壁	94
荒沢北壁	柏 敏明 96 荒沢奥壁南壁から南壁Bフェイス	塩崎将美 97
北アルプスUターン縦走	八 島 修一郎	99
東アルプス紀行	田 辺 潤	101

＝ 山 岳 寮 ＝

甲南大学について思う事	菅 巖 弘	113
登山家の道は	神 前 正 博	115
山登りについて思う事	柏 敏 明	117

高校山岳部合宿報告

高校山岳部リーダーとして	南 里 章 二	120
夏山合宿	佐野方則 121 冬山合宿	山本千秋 123
春山合宿	山本千秋	124

女子部経過報告	沢 田 立 子	125
---------	---------	-----

女子部合宿報告	夏合宿 127 乗鞍スキー合宿 29 磐山合宿	131
---------	-------------------------	-----

五月合宿行動表（鹿島槍岳東面）		133
-----------------	--	-----

夏山合宿 アタック 一覧表		134
---------------	--	-----

秋山合宿（穂高岳）行動表		135
--------------	--	-----

六甲近辺山行記録		136
----------	--	-----

編集後記		137
------	--	-----

山岳部員住所録		138
---------	--	-----

リ-ター-所感

大学山岳部と海外遠征について

法三 鈴木 功

我部にも海外遠征への道が開けて来た現在、私の含しい部員生活の中で大学山岳部と海外遠征について、私個人の意見を述べたいと思います。

大学山岳部は毎年新人を迎え、4年生を社会に送り出し、入れかわり立ちかわり部員は変動しているのである。その結果、部員数も部員の質も千差万別年々変化している中で海外遠征というものを考えるならば、部が最も充実している時期に出すべきことは言うまでもない。しかし、日本アルプスや東北の山等の国内の山と違って、計画を立て準備すれば誰れでもすぐ行けるものではない。出すに当って先の見通しが必要となり、行く時期が大切である。その為、新人の時に海外遠征への情熱を燃やし合宿や山行、そして部室生活に於て訓練を積み重ね、上級部員になった時に海外遠征へ行くべきだろう。

メンバーに關しては、O、Bだけを構成するより記念事業の一環として行くならば、現役が一名か二名もしくは主体になって行くべきである。メンバーに送られるのは良き登山者と同時に立派な社会人でなければならぬ。海外遠征を行う以上、国際的に評価されるので対外的にも優秀なメンバーを構成されるべきだろう。

現役を主体に、もしくは変えてメンバーを構成し遠征隊を出す場合、いろいろな準備をしなければならない。その為、時間的にも多くの労力を必要となる。しかし、一方現役の合宿というものも、おろそかにはできない。そこで問題が生じてくるのだ。遠征に参加する現役はいろいろな面をエキスパートでなければならない。その為、主力メンバーが抜けて合宿を行なわなければならない場合、どうしても無理が生じてくる。そこで残留部員の合宿も力に応じた充実した合宿を行うべきだろう。

大学山岳部には4年間の短い部員生活に於て、自分達がその期間学び鍛え経験してきた事を後輩に伝え残さなければならない宿命がある。こうした中から遠征隊を組織し出すという事はなみたいいては出来ない。本心からやつて

やるという者が生れて来、又全員が協力があつて初めてその目的は達成されるのである。

登山者への道は果てしなく長い。海外遠征を行うのも、その一過程に過ぎない。我々はもつと広く世の中をみつめ経験を積むべきだろう。

私の抱負と致しよしくは、部員数の減少で頭を痛めている現在、たとえ、4年部員が海外遠征に参加しても、合宿自身は直接影響をきたさないが、海外遠征を送り出すにあたって装備、食糧はもちろんの事、その他の仕事も現役におおいがぶさつて来る。そこで現役の合宿や海外遠征の準備に追われて満足に双方とも出歩かないかも知れない。しかし、我々は多忙になればなる程、ファイトを燃やして諸問題に打ち込み、準備を進め、現役の合宿も海外遠征も両立させ充実した合宿を行ない、又立派な海外遠征隊を送り出さうと誓う。

63年度リーダー会反省

井本 洋

1年生の時は家庭の事情でという理由でなるべく山行をさばろうと試み、2年生になると死ぬかも知る岩に登つたといきこみ、3、4年生は鉛のぶとくいつも氷渡だと誰かが教えくれた。あつというまに山岳部員とし十分の自覚のないまま3年生になり、前年度リーダー会よりチーフリーダーになる様にいわれ、深く考えることなくリーダーをひきうけてしまった。63年度リーダー会は井本以下10名の多くをもつて構成された。そして結果的には遭難という最悪の事態を生ずることなく、次の学年にバトンをわたしたが、我々の意図する事の半分も行なえず失敗に終わった。ここからその反省を行い、後輩諸君の役に立てばと考える。

数ある失敗の中でのオノオノのものは、新入部員勧誘。新入部員教育に失敗したことである。組織における人的要素の重要性を無視し、一時はオノオノもいた新入部員を、何の手も打たず去るがよおによかし、現在では実働部員が2名になつてしまつたことは、将来の部活動を考えく見た場合どうしようもない、大きな失敗を犯したと考える。我々は「登山活動は自発的行爲で

あり、他人に強制されるものではない。やる気のある者だけ小人数集り、山へ行くのが一番良い。」と考えていたし、事実そうであると確信する。実際登山活動は2名、いや1人の人間がいれば充分であろう。しかし我々はやはり組織的登山を行うべきである。大学山岳部の活動が大学教育の一環として行なわれている所より明らかである。63年度の新入部員はスポーツとレジャーを混同した者が多く、1日トレーニングしてやめくしもう者も多かった最近の学生気質として適当にスポーツもやり、適当に勉強にはげもうとする傾向にある様に思われる。その1つがフレンチフォーゲルやスポーツ愛好会であり、その2が自動車やゴルフではないだろうか。これらのものはレジャーであり、スポーツではない。そしてより鋭尖的なものである。スポーツはもつときびしいものである。この様な時代には特に山岳部は部員減少という事態をまねくのは当然かもしれない。いずれにしても部員獲得に失敗した。新入部員教育についてその目的は山で事故があつた時等にぞなえ、あらゆる判断力を高めるため、山岳部員としての意識や責任感を高める。スポーツとしての登山を正しく理解させること。リーダーシップやメンバーシップを育成する。山岳や部を愛する精神を涵養する事等があげられる。我々はこれ等のことを意識して新入部員教育にあたつたが、彼等を見るに十分の成果があつていないことは、リーダーの指導力欠如によるためであろうか。

次に部室生活の失敗である。前記の新入部員教育の不成功もこのことに起因する。また、計画立案までの重要な過程がこの部室において行なわれるのは勿論である。我々の学年はこの部室生活の失敗に加え10名の多くをもつて構成されたため、リーダー会内での相互理解不完全になり、計画運営時に不都合を生じた。短時間その部室に行つただけで、そのクラスの充実度がわかるのではないだろうか。64年度のリーダー会に於ても、どうも部室生活は上手に行われていないようである。「話をしたい者だけがやったらよい。」という傍聴者的な体態をとることはもつてのほかである。話の塵がないということは思想をもたない。つまり山について何も考へてないと判断されくもしかたがない。どんな事をも良い、山の話をもつと部室をする必要があるただだまつて、顔を見合すだけでは、恋人同志ならいざしらず、まったくナンセンスである。僕もいろいろ努めたが、元来の無口で成功しなかつた。この部室の雰囲気はリーダーの器人を反映してか、まったく昏闇であつた。

計画運営にあたつての失敗、計画立案までは、先輩の助言もあり、計画それ自体あまり問題はなかつたと思う。だがいざ実施にうつす段になるとアジが出はじめる。計画運営にあたつてまあ大切なことは、我々の目的は何かと

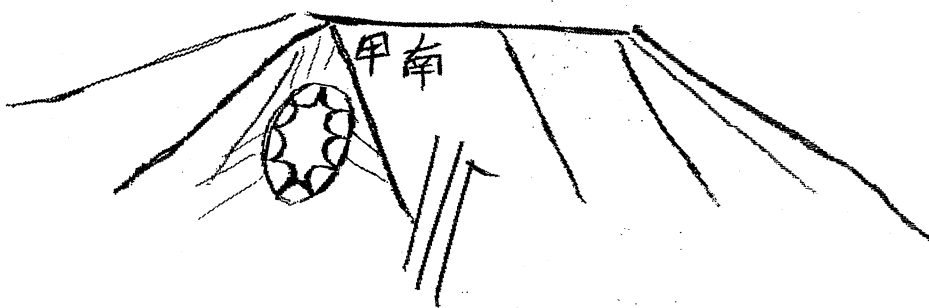
云うことを部員各自に理解させることである。これも部室生活の失敗が大きく影響している。リーター会は計画運営のことに気をとられすぎ、部室生活を無視あるいは軽視しがちである。1年のうち山を $\frac{1}{2}$ を過ぎとしても多は皆部室の生活である。リーター会は山行の成否は部室生活の成否にかかっていることを十分認識する必要がある。

スリッパ事故の多かったこと、5月のロックガーデンのスリッパに始まり3月の白馬岳火燭溪まで大小あわせると十指を満たす。スリッパ事故の原因をさぐるに、入るの例外を除き、すべて登攀者の不注意によるものである。死に至るかも知れないこのような事故が絶えしたことは山をせくみていた、つまり山のおそろしさを全然理解していなかったということである。部員は登山と云う特異なスポーツを十分理解し、ノンアリシメントの伝統をいつまでも守りつづけて下さい。

いずれにしても我々の学年もよくやった。冬の北鯉尾根、あの頂上で友と肩を組み部歌を歌った時の感激、春の紺野を途中病人がふたにもかわらず目的達成し、下山した友との再会、あの時の感激は生涯忘れ得ぬものであろう。しかしこれらのことはるる年度リーター会独自でやれたものではない。山のたのしさを教えてくれた先輩、共にはげましかった後輩諸君の力があつて始めて達成できたのです。

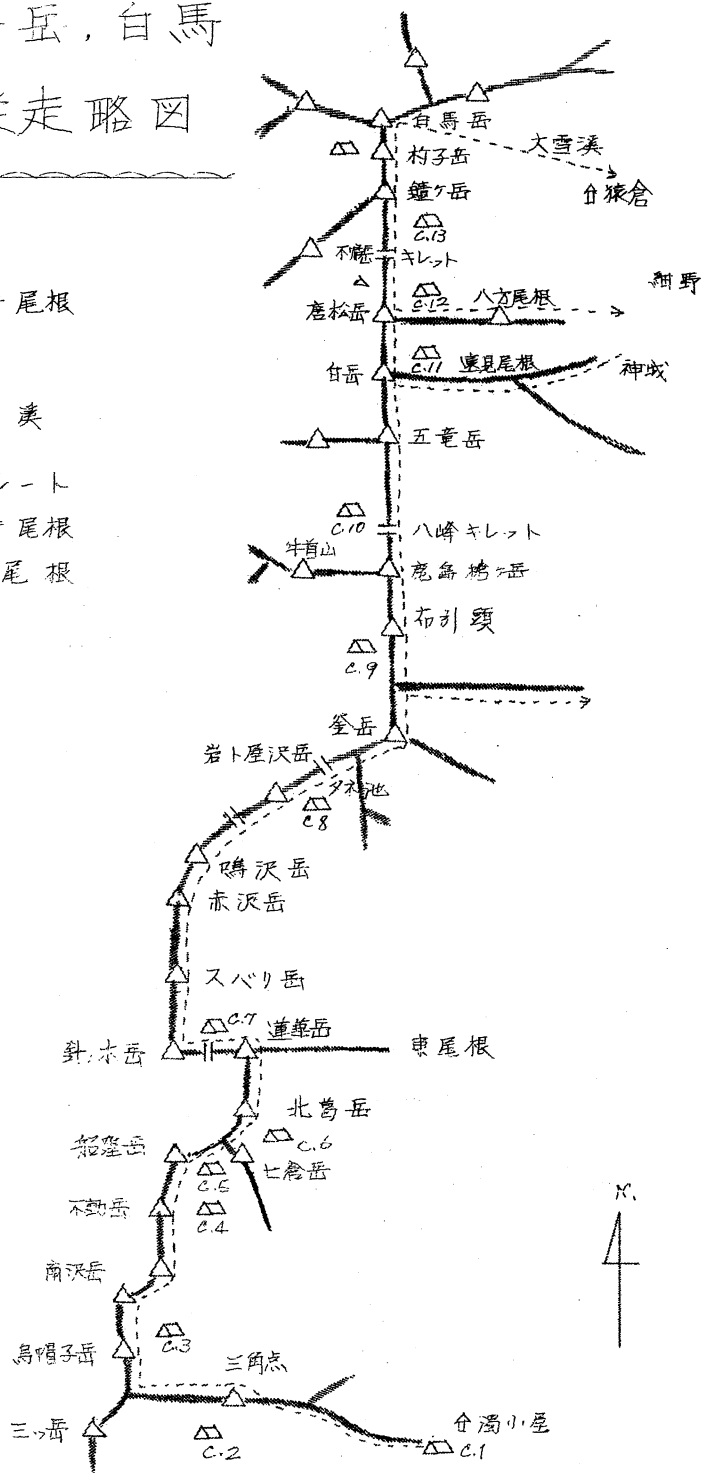
最後に甲南大学山岳部のかぎりない発展を願いつつ。

Berg Heil



鳥帽子岳，白馬 岳間縦走略図

- ・アプローチ
ブナタテ尾根
- ・下山路
大雪溪
- ・サポート・ルート
ブナタテ尾根
遠見尾根



—— 報 告 I ——

—— 春 山 合 宿 ——

鳥 帽 子 岳 ・ 白 馬 岳 間

—— 縦 走 ——

期 間 1964年3月3日 ～ 3月31日

メンバー C.L. 井本 洋 (理3)

縦走隊 C.L. 水渡 清夫 (哲3) ん、伊丹 徳行 (法3)
L. 袖前 正博 (文3) S.L. 菅 美弘 (経3)
鈴木 功 (法2) 横山 洋 (法2)

サポート隊 遠見尾根 C.L. 柏 敏明 (経3)

ブナタテ尾根 C.L. 竹中 統一 (経3)

ん、村上与利一 (学4) ん、塩路晃二郎 (学3)
塩崎 将美 (経2) 上本 武夫 (法1)
沢田 洋介 (理1) 渡川 純吉 (学1)
国分 玄昭 (高3)

女子 沢田 立子 (理3) 井上 智恵子 (文3)

三井 紘子 (理2) 徳永 善子 (文2)

なお井永は(3月/6日) 沢田洋は(3月/8日)に
入山。

村上は(3月/7日) 塩路は(3月/5日) 竹中は
(3月/5日)にそれぞれ下山した。

＝はじめに＝

毎年夏山合宿等において、北アルプスをはじめ日本の山々を縦走してきた我々の間には、それ等の結果として積雪期の北アルプスを長期間にわたって縦走してみたいという希望が最近強く意識されて来ていた。無雪期の縦走を繰り返し、その力を貯えてまた我々として、積雪期の縦走を計画するのは自然な成行きだった。前年度あたりから2、3のプランがみんなから語られるようになってきていた。ある者は北アルプス全山縦走を、またある者は白馬岳—西穂高岳間を、また白馬岳—三俣蓮華岳—鉤岳間の北アルプスヒターンをと言うように、しかもかなりの現実性をもった話として語っていたのだった。

リーダーシップを受け継いだとき、今年の活動方針の一つとして部員数も増し、充実して来た現在、精神的にも肉体的にも強く、チームワークのとれたものとしなければならぬことを我々に課せられた課題として認識したのであった。積雪期の北アルプスの縦走を行う事を通じて、その目的も十分に成しとけ得るとし、第一回目の部員総会で春山は白馬岳から西穂高岳の間を縦走することを目標にして、計画を進めると発表したのである。

このような長期間の縦走は、甲角として得意とするタイプの合宿ではないので、一年間を通じて、精神的、肉体的な準備が縦走の研究と同時に大きな課題となったのは当然のことだった。その年度の総決算ともいべき春山合宿の計画目標を、第一回目の部員総会で発表したのもそのためだったのである。このような長期間の縦走は、部員各々が十分な自覚を持ち、自発的な努力の積みかさね無しには、非常に困難であると考えたからであつた。春山の目標を定め、一年間を通じての準備、研究でその意欲を高め、総合的な力を春山合宿においマクフライマックスにもつて行くよう勤めたのであった。

我々の間の意欲は十分であつたのだが、具体的に計画を練り、研究が進むにつれ、もっとルートを知る必要性が痛感され、五月、夏山に継いで / 1 月

にも偵察隊を出しルートの把握に勤めた。五月は上管、伊丹、横山の三名で残雪期の鹿島槍ヶ岳からハッ峠キレット、不帰キレット、天狗の大降りを経て白馬鍾岳に至る縦走を行ない、二つのキレットを中心に偵察をした。夏山合宿の後半には、上水渡、菅、井上の三名で、白馬―西穂高を縦走し、小屋の状況、エスケープルート等金山縦走をする場合の偵察を行なった。五月、夏山の偵察の結果と、半年をすぎた部員の實力等を検討した結果、白馬―西穂高を縦走するには数ヶ所の食糧、装備のデポを用いるか、あるいは、三ヶ所以上にサポート隊を入れることが必要であると考えられた。我々はデポを使用せず縦走すると言う考えが出された。また縦走隊をサポートするにしても、二隊以上は無理である、とされた。以上の事情により、計画の縮小を考えねばならなくなったが、この現状に対する認識が食い違い、連日はげしい討論が夜遅くまで部屋で行なわれた。そして秋山近くになって最終的な計画が決定したのであった。

計画を練りなおす過程において、針ノ木から白馬間が考えられたが、船窪岳前後の樹林帯を含む鳥帽子岳から針ノ木岳の稜線をぜひ入れたいという意見が出された。この樹林帯は当然困難の予想される所であり、我々の部においても未知の要素が多く、他の計画を縮小してでもぜひ踏破しようと意欲を燃やしたのであった。11月に、上井本、水渡の2名でその樹林帯を中心とした偵察を行い「行ける」との確信をもって春山にのぞんだのである。サポート隊は、入山時にブナタテ尾根、その後遠見屋根より荷上げ、ルート工作等のサポートを行く。そしてサポートの準備が出来た後、五竜岳東面の岩場を研究してタックしようとした。

なお女子は、遠見小屋をB.H.にシマスキー合宿を行うこととした。

(水渡清夫、記)

『偵察行』

I. 五月合宿における偵察行

菅 義 弘

本年度の春山に於いて、我々は白馬岳から穂高岳までの縦走を計画していたので、その手始めとして5月に不帰のキレットを偵察する事にした。メンバーはリーダー菅(経済4年) 伊丹(法3年) 横山(法2年)の3人があつた。コースは鹿島槍ヶ岳より白馬鍾ヶ岳までとし、期間は1週間(実際は4月29日から5月4日までの6日間) 行動は1日鹿島槍ヶ岳から

キレット小屋まで。ここで2日間吹雪のため沈滞。4日目五竜岳を経て唐松小屋。5日目不帰のキレットを経て天狗小屋。6日目鍾温泉を経て南段へ下る。以上の如くである。

残雪期と云えど我々にとっては雪の縦走は初めての経験であったので慎重を期した。

我々は春山合宿に大きな計画を立てたのであるが、一番気になっていたのは、8貫あるいはそれ以上の荷物を背つて2つのキレットを通過出来るかどうかと云う事であった。最初のポイントである八峰キレットを通過した感想は、「えらい所やなあー」「鉄筋コンクリートの橋でも掛けてもらわな通れんで……」といった我々の会話を聞いていたゞければ、お分かりになると思います。しかしそれは最初の感じであつて深く考えてみるに、このキレット通過で問題になるのは、鹿島槍ヶ岳南峰からキレット最低部へ下る際の黒部側へのスリップと、最低部の雪面のトラバースだけで、要は重量だけの問題であると思われた。我々の実力からすれば8貫を越えれば危険度が増し、下降は不可能かと思われたがしかし8貫弱であれば下降は十分可能であると考えられた。次に不帰のキレットであるが、問題になったのはⅡ峰だけで一般にⅡ峰A、B、C峰と呼ばれている。C峰は雪が付いても40mのフィックスザイルがあれば十分下ることが出来る。しかしB峰は懸垂で直接ユルへ下ることは出来ず、信州の雪面をトラバースしなければならないので、雪の状態が悪ければダブルボックカが必要と思われた。最後に天狗の登りであるが、予想外に短時間に登れスリップにさえ注意すれば取り立てて云うことはなかった。以上の如く我々は十分の可能性を得て偵察の目的を終ることができた。

2. 夏山合宿における偵察行

菅 義 弘

夏山合宿後半に於いて、再度の春山合宿の為の偵察縦走を行なった。メンバーはリーダー水渡(経管3年) 菅(経消3年) 井上(経管2年)の3人により期間を15日間とし、白馬岳蘆華温泉より穂高までとした。途中各小屋で小屋の埋没状態、雪庇の出所、デボの可否を丹念に聞いて回った。各小屋の主人は全山縦走をやるのであるからと頼むとデボを許し、親切に雪の状態等を教えてくれた。我々はたゞ、たゞ 積雪期、白馬-穂高全山縦走の夢(後に小さくなった)を胸に抱いて、勇躍15日間の期間を10日間で西穂高まで下ってしまった。

この偵察の一つの課題は、エスケープルートを確認してくることであった。八方尾根、隠見尾根、赤岩尾根、釜岳の南尾根、重華岳の東尾根はわかったが、釜岳から針の木岳までの岩小屋沢、新越来越、赤見沢から減生している小尾根はガスのため、見付けることができなかった。

もう一つの課題は針の木以南のルートの確認は完全に出来たとは云いにくかった。何度通っても七倉岳、舟産岳、不動岳の樹林帯のルートは頭にはつきり入らない。まず針の木以南第一番目は重華岳の北葛側の大きな登りで、春にもさうとうしごかれる所と思われた。コルへ下る最後が岩壁で鎖と鉄梯子が掛って居り、春になればどうなる事やらと思われた。資料には雪が着かないと記されてあるので、それを信じる他はない。次に七倉岳であるがこれもコルからの取付が難かしく、またナイフリッジになっているので積雪期にはダブルボツカは決定的であると思われた。また其の次に来る船産岳から不動岳までの樹林帯には出れば赤旗をつけたい所だった。この偵察で二度もここを通ることになるが、5月合宿に偵察した2つのキレットに比べまみてもかえって針の木以南の方が時間をくうのではないかと思われた。しかし、長期間の縦走であるから、じっくり腰を落ちつけばこの難所も十分突破できるものと思われた。

3. 鳥帽子岳より七倉岳まで

井 本 洋

メンバー 井本・水渡

11月19日 ちくまにて離阪

11月20日 松本のホームであわただしくソバを食べ、電車に飛び乗る。車中で京大の人たちと出合った。北鎌尾根へ行くとのこと。大町から葛温泉までバスにゆられ、葛温泉についたのが9時30分ごろであった。ひんやりとした空気がすがすがしい。ここから瀧まで約2時間歩かねばならぬ。東京電力のおじさんに軌道車に乗せてもらいたいと、まいねいにたのむがことわられる。高瀬川を左あるいは右に見て、線路上をとんとん歩く。途中で雨が降り出す。不動庵をすぎ濁小屋についたのは11時20分、ここで昼食。小屋の人に冬・春の雪の状態等聞くが要領をえない。昼食後小屋より30分ばかり瀧沢を登り、ここマテントを張る。

11月21日 急登で名高しフナタテ尾根へのとりつき口、沢が左にまがる手前で、そこここに赤布や、指導標が立っている。フナの茂った、展望のきかない尾根でザブザブに登る。それでも時々木立がまばらになつて、

目の下に荒れた瀝沢を見おろすことが出来る。そして沢音が次第にかすかになつて、やがて 2208m の三角点にでる。この三角点より急に雪がママくる。ここからさらにもう一息急な登りを克服すると、ハイマツが見えはじめまもなく鳥帽子小屋についた。小屋にはたき火が置いてあり、快適な寝床を提供してくれる。

11月22日 鳥帽子小屋より幅広い稜線を、雪のしまった稜線を進む。この日の眺望は最高である。だが太陽が高く登り始めると、しまっていた雪もくさり、ぼろぼろともぐり出す。夏道をそれると大変苦しい。ラッセルは、ほとんど水渡がやってくれた。南沢岳をすぎるあたり、2人とも完全にばててしまった。少なくとも我々の甲南の山岳部には、ガンバリヤであると思うが、この2人が鳥帽子より南沢岳までマハテルとは。春の縦走の第一の問題点はどれも体力と云うことらしい。それでも我々は不動岳までガンバッタ。そして、雪も降りはじめたので不動岳を少し行った樹林帯の中でテントを張る。

11月23日 一晩中雪が降ったらしい。今も降っている。ガスっている。でも我々は出発とする。不動岳をすぎると右手はガレタ不動沢が切れ落ち、左手は樹林帯の深いラッセルを登られるので我々は稜線通しに進む。夏道を進むとラッセルはかなり急である。3291m のピークをすぎると部分的に針金やハツゴが出てくる。重い荷を担いだ場合はギールを使用する必要がある。また針ノ木谷もかなり急に落ちこんでいるので注意を要する。このピークは不動岳より緩く、物凄い崩壊壁の奥にそびえ船窪岳より全立派なものである。黒部側のセラビソの密林と対蹠的である。春季には稜線におそろしい落穴をしかける雪庇が、奇妙な形の崩壊壁の上に大きく張り出すであろう。黒部側をまき樹立ちおおわれた船窪岳につく。船窪岳より針ノ木谷と不動沢のゴルヘの下りは急で、雪も深く難行した。またしばらくすると岩が多少でてくる。春季に於いてはサイルを必要とする。ゴルより船窪小屋まで本当に苦しい登りであった。今日は船窪小屋に宿る。

11月24日 エスケープルートとしてマークしていた七倉岳北尾根を下ることにする。小屋より斜上方にトラバースすると良い。船窪、特に北鎌尾根が美しい。やがて船も見えなくなり、雪も少なくなり、ついには完全に消える。しかし春は豪雪がつもるだろう。この長い長い尾根に閉口した。何時間かかったろう。やっと七倉沢に出、軌道の上に立った時はほっとした。湯温泉に出、大阪へといそいだ。

合宿日誌(縦走隊)

水渡清夫

3月2日 先登隊3名(村上、柏、堀路)出発

3月3日 本隊10名出発

3月4日 (曇り)

マイフルバスで大町から葛温泉へ。雪は少なく4ピッチで濁小屋へ着いた。荷物の整理の後、取付点のFIX工作を兼ねてブナタテ尾根へのデポをしに行く。横山、浪川はローソクを取りに大町へもどった。尾根は予想通りラッセルに苦しめられそうだし、一度に登ることはむずかしそうだ。

3月5日 (曇り→晴れ)

(小屋6:10-三角点/2:30-鳥帽子小屋/4:45-三角点)
(テント地)15:00

うす曇りの中を7名で出発。堀崎は横山、浪川の到着の後、我々のあとを追う。サポート隊のおかげでラッセルも大したことなく、昼頃三角点に着けた。この頃にはガスはなくなり、稜線がまぶしく輝いている。昨日のデポを回収するため2名下り、他の者で三角点にテントを建てた。竹中、堀崎、上本、浪川の4名はブナタテ尾根のサポートを完了して、これより遠見尾根からサポートするため下山にむかった。サポートありがとう。入山二日目にしてここまで進めた。他の4名は鳥帽子小屋へ荷上げをしておかう。

管はダブルホッカの時、左足首をネンガしたらしい。夕陽が表銀座の稜線を染め、明日の天気を約束してくれているようだ。

3月6日 (快晴、西風)

(三角点7:40-エボシ岳下/2:30-南沢岳寺前テント設営/3:10-南沢岳頂上デポ/5:40-帰幕/16:30)

三角点より小屋までは雪も割合じしまっている。2時間程で登れた。小屋から鳥帽子岳は信州側の雪田をトラバース、雪は深く、全装束をかついでいるので非常に苦しい。左上の稜線に1メートル程度の雪庇がつかまって気湿の上昇による崩落の危険がある。そのため信州側に見えるまばらな樹林帯にルートをとった。南沢岳を越えるつもりだったが疲労がはげしく今日はこれまでに。南沢岳の手前、信州側にテントを設営。荷の重い今は一度にかついで行くのは口スが大きい。ダブルホッカを戻って進む方が衆に行けそうだ。横山をテントキーパーにして他の者で南沢岳の上へ荷上げ

を行う。

3月7日 曇りー雪

(出発7:15ー不動岳テント設営13:00ーデポ15:45ー帰着)
16:15

3時起床。視界悪く今にも雪が降り出しそうな状態だ。朝の天気図をとり、今日はなんとか持ちそうなので出発することにする。昨日のデポを回収して南沢岳と不動岳間のコル下る。コルにデポⅠをして不動岳の頂上にむかう。このコルの前後には、雪底が信州側へデコボコに残り出しており危険だ。不動岳の頂上にテント設営後すぐデポⅠの回収に向かい、その荷物を不動岳から船窪の方へ下った樹林帯の中にデポⅡをする。

3月8日 (風雪、氷激)

3月9日 (雪)

(出発11:05ーデポⅡーテント設営14:15)

3時に起きてみると外は風雪。とにかく食事をして天気待ちとし、9時の天気図をとってから出発ときめた。風は強いが樹林帯に入るとわからなくなかった。雪は非常に深い。大崩壊側の雪底と樹林帯の接する所にルートを取ったが、ガスが濃く、危険を感じたので柵の中へ入って行った。ギョシリとつまった樹林帯の中マルートは思うにまかせず、猛烈なラッセルのためもがくばかりであまり進まない。不動岳から100m程下った前でテントを設営。

3月10日 (快晴、無風)

(出発7:05ーテント地(服窪岳手前)17:10)

昨日回収せずにきたデポⅡを4名で取りに行き、他2名はルートワークとラッセルをしに出発。デポ回収は衆に出来る。先発した2名によるラッセルのため、2人と合流するまでは快調に進めた。

しかし229/10の地点を通過するあたりから状態が非常に悪くなり、全装備を担いで雪との格闘が始まった。快晴無風の上天気が、気温を上げ皮肉にもますます雪の状態を悪くし、進むのが不可能かと思われるところが出てくる。雪は表面がフラスしており、その下には小さなモミノ木がうすめられている。連発的に雪を踏み抜き、胸までスッポリと落ち込む。ワカンをつけているとよけいに煩わしく、穴からぬけ出せない。

予想はしていたが、まったくの悪戦苦闘でやっと頂上近くまで進んだ。今日はこれで時間切れだ。雪の斜面をならしてテントサイトを処理やり作った。

3月11日 (雪)

(出発9:30 - 帰幕13:15)

朝の天気図は低気圧の接近を示している。テントは移動させないことにして、様子を見ることにする。今日は泥濘食(1日2食)にしよう。

9時の天気図をとってから、ルート工作と荷のデボをしに出発。先登したルート工作の2名は、濃いガスと右側の雪底のため輪座頂上からの下り口を誤り、針ノ木谷へ派生している尾根を下ってしまった。皆大分下ってからそれに気づき、ガスの間から針ノ木の西稜が出て来てびっくり。頂上からの下り口をたしかめ、赤旗をつけて確認してテントにもどった。

3月12日 (晴れ - 曇り)

(出発8:10 - 最低のコル9:50 - ギャップ・テント設置15:10 - fix 工作 - 帰幕8:20)

頂上より急な斜面を下り、木が出ている前から管、水痕で40m F I X。最低のコルへ下る。コルで早くもエッセン。昨日2食だったのスタミナが足りないようだ。コルからナイフリッジとなり、雪底スレスレの所をびくびくしながら進まなければならない。伊丹、管がF I X工作をしながら進む。

コルから2つ目のピークと次のピークとのあいだのギャップを下る前で二年生の一名がスリップをした。ギャップへ下り切った前で釘金にアイゼンをひっかけ、F I Xザイルをはなし転倒、スリップ。針ノ木谷の方へ、100m程流された。幸い左手首を少し痛めただけで悪事だった。本人もショックを受けたらしいが、目前でそれを目撃した我々も心臓が凍りつきそうな思いをさせられた。

時間は早い、このギャップにテントを設営することにし、神前、管の2名は先のルート工作を行った。

予想以上にこのあたりは手強い。全装備をかついで行動するのはまだ無理が多い。明日はダブルボッカを行った方が良さそうだ。

3月13日 (晴れ - 曇り - 雪)

(出発6:30 - 輪座小屋12:55 - 此處のコル - 18:10)

昨日のルート工作のため調子よくデボに行ける。輪座小屋の方へ少し登ったところへデボエ、すぐテントへ引き返し、残りの荷物を荷ってデボエを通りすぎ小屋へつく(小屋は完全にうずまって雪の斜面となっている。)ここより管、鈴木はこれより先のルート工作。神前、横山は小屋から七倉の頂上へダブルボッカ。伊丹、水痕はデボのEの回収。七倉岳の頂上にル

ート工作隊の荷物を第Ⅱのデポにして、4名は北麓のコルへむかう。この頃雪が降り出しどんどんと天候悪化。固くクラストした上に新雪がつもりそこをトラバース気味に下って行くため、かなり危険な状態になって来ていた。小さなスリッパをする着が出たので稜線上に第Ⅱのデポ。先に行っているルート工作隊を呼びもどし、伊丹、菅、鈴木の3名でデポⅡを回収にむかう。

コルのテントへ入ったのは19時30分頃の暗闇になってしまった。

3月/4日 (風雪激し、氷澱)

3月/5日 (地吹雪、氷澱)

水窪、鈴木の2名、デポⅡを回収。

3月/6日 (地吹雪、氷澱)

3月/7日 (地吹雪、氷澱)

3月/8日 (曇り 時々雪)

(出発7:35 — 蘆華・北麓のコル10:55 — 蘆華岳11:25)
(— 針ノ木小屋12:25)

長い氷澱のためテントの内張が凍りつき、三倍くらい大きくなって担ぎにくい。出発のときはテントを小さくたたまなければならないのでいつも非常に時間を食う。積雪期に縦走する場合、テントが常に小さくたためると行動がもっとスムーズになるだろう。

あの苦しいラッセルはもう無い。北麓の登りも大したことはなく、蘆華のコルへつく。

黒々と目の前に立ちはだかっている蘆華の登りも、見かけ程ではない。フサリは出ており、夏道と同じルートで景に登れて行く。

ガスに視界はとさされ、全々が灰色だ。地肌の出たこの登りもたゞ苦しいのみ。頂上で黒山岳会の方達といっしょになり、小屋へ入る。

予想以上に困難な樹林帯のラッセルと長かった氷澱のため食糧が不足し前進することがむずかしくなっていたが、黒会の方から米とガソリンを分けていただいた急先の見直しがあった。

3月/9日 (快晴)

(出発6:35 — 針ノ木岳9:05 — 赤沢岳12:35 — 鳴沢岳)
(13:35 — 岩小屋沢岳15:55 — 種池小屋16:15)

久し振りの快晴だ。針ノ木から赤沢、鳴沢、岩小屋沢と今日行く稜線が湧いて美しい。種池小屋まで行けるだろうか。みんなはその気十分でハッキリしている。

針の木の登りはひざぐらいのラッセルが頂上まで続く。2ピッチで頂上に立った。

北尾根、樫、富士、南アルプス、白馬、花巻、釧路 ----- そのむこうに見える青いものは日本海か。スバラシイながめだ。

我々の目ざす白馬岳が小さく見えている。「遠いなあ、あんなとこまで行かなあかんのんかあ」と誰かが言っている。

頂上から針の木のクラストした急な斜面を下る。スバリ岳の登りでは一ヶ所岩にキスリングがつかえて苦しかったが、それ以後は夏道も出ており象に行ける。黒四ダムの水は白く氷結しているらしい。まわりの山の色と美しいコントラストをなしている。

横山は体の調子が悪いらしく苦しそうだ。荷を抜き軽くするか良くない。

新越乗越の深い雪も、トレースがある。岩小屋沢岳の長い長い登りと、下りマ、神前、水渡はグロッキー。16時15分、ようやく小屋へ着いた。

この天気は今日ままで、明日はくずれそうだ。

3月20日 (風雪、泥濘)

横山は肝臓が悪化し、一日中寝たきりだった。食べたものを少し吐く。22時ごろ肝臓が痛み出す。(たるじょうな、ハレたような痛さであると云う。) 肝臓の病気を経験した菅の意見に従い、刺激物等(タバコ、塩、コショウ、脂肪)をさけ、安静にするようにする。

3月21日 (風雪、泥濘)

横山の状態は良くなっていない。体温は36度ある。便秘にもなっている。夕食後少し吐き、19時30分ごろもう一度吐いた。彼は体の節々がバラバラになったみたいや云々という。このまま行動を続けるか黄だんになるかもしれない。横山を下山させることにし、その対策を話し合う。

3月22日 (地吹雪一時晴れ、風強し)

樫池小屋出発 13:30 - 冷小屋 15:40

朝8時ごろ、猛烈な風をついて出発。しばらく行くうちがスリ出し、風は強さを増し、歩行が困難になってきたので小屋へもどる。

昼すぎ風が少しおさまったので出発。

冷小屋の近くで少しもぐったが、それ以外は固くクラストしている。鈴木は台風の始めから元気だったが、益々調子が悪いらしく誰も彼のペースにはついて行けない。

横山を下山させるため、次のように計画を変えることにした。明日横山を菅、神前、鈴木の名がサポートして下山。すぐ医者に見せ、薬を

そつて大阪へ帰す。神前、鈴木は下川氏宅で泊る。管は24日横山をとどけた後、その日の夜行『ちくま』で大阪を発つ。25日神前達と合流して遠見尾根を登り、26日か27日に本隊と合流して縦走をつづける。伊丹水渡の2名はビバークの用意をしてキレット小屋へ向い、小屋で待っているサポート隊と合流する。以上のように定めた。ビバークの用意だけで2名でキレット小屋へ向うのは2名で、又、3名でマモラント等の装備、食糧をかついでハ峰キレットを越えることが危険であると考えたからである。

3月23日 (曇り-雪-風雪)

出発7:00-キレット小屋15:15

白岳での再会を約し赤岩屋根を下るパーティとわかれる。不測の事態とは云え皆こころよく下山のサポートを引受けまくれた。かならず縦走は流れてみせるぞと心にちかつかつて我々も出発。

鹿島槍の頂上まで夏道直りに行き、南槍で一休み。雪が降り出した。南槍をしばらく下るうちに雪は風を伴ない、まともに顔へ吹きつけ出した。天候はどんどん悪化している。夏の縦走路から北槍へのわかれ道のところまでミールートがわからなくなってしまった。行きつもどりつするがわからない。少しアセリが来たはじめたころ、雪洞に入っておられた立命大の方から『休んで行きませんか』と声がかかった。喜んで御好意に従う。おいしいものを御馳走になり、我々のエッセンも食って一息ついた。

(13時頃)再び出発。天候は前と同じだ。それらしい前を進んで行くうちに伊丹の目の良さが偉力を発揮した。ガスと顔へ吹きつける雪とで視界は悪いのだがその中からルートを的確に見つけ出して行く。

問題のキレットへ来た。悪いのはギャップの切れ切れにまわり込む前とコルから再び稜線上へもどる前だった。ここからアングাইレンシマ水渡トップで通算、雪底が倒れ込んで来そうで不気味だ。稜線へもどつてからも状態は悪い。バランスの良し伊丹がトップで下つて行く。目出度い氷の兜のようになってしまった。痛烈だ。小屋が見えた。コールをかける。井本臨崎、浪川の出むかえを受けてキレット小屋へころがり込んだ。予定の期限が迫っているのに縦走隊が来ないので心配していたとのこと。正輪望のラッセル派こうてなあ』正横山が-----』と積る語をする。

横山と管は大阪へ、神前と鈴木は下川氏宅へと予定の行動をとった。

3月24日 (晴れ)

出発8:00-白岳ラント池13:20

大休夏道直りで雪もほとんどないため状態に行ける。このあたりまで来

ると人も多く、数パーティーと行きちがった。

五竜岳の手前で白岳から我々の安否を気付かづ来た根、上本の2名と出合った。『ヨクヤツタ』と2人から握手せめ。気持もゆるんでゆっくりと白岳のテントへ向った。井本、塩崎は菅達を廻えにスバラシイ？テクニクを取使して遠見屋根をスキーで下つて行つた。さすがにここは食糧事情が良く以前には考えられなかったことが次々起つた。もちを食べた、ハムも、リンゴも食べた。-----。

明日は泥だらけ。

3月25日 (雪、泥濘)

3月26日 (晴れ-快晴-吹雪)

出発7:30-帰幕14:30

伊丹にテントキーパーを頼み、柏、水渡、上本、沢田、浪川の5名、遠見のデポを回収し、菅達をむかえるために出発。野田がたつにつれて快晴になって行つた。五竜の岩場が見える。G4なんか大したもんだ。しかし白岳沢は台宿の始めから不安定であふなくて並ぶけならしい。残念だ。右を向くと真正面にカフネ里が見える。真青な空をバックに北壁が白く輝いている。美しい。球形ルンゼを雪崩が断え間なく落ちている。

井本、塩崎にサポートされて神前、菅、鈴木、の3名が登って来た。何となく様子が違う。

『あッ、ヒゲをそりやがったな!』

縦走のメンバーはテントに入り、サポート隊は大きな雪洞を掘ってそこに入った。

3月27日 (雪、泥濘)

今日、状態が良ければG4を下タックするはずだったがためだ。一日中激しく雪が降った。五竜の岩場は望みが黒くなった。午後これからの予定を話し合う。

サポート隊は明日から撤退の態勢に入り、予定通り八方屋根をスキーを使用して下ることになった。又、メンバーの一人減った縦走隊に塩崎が加わることになった。

3月28日 (曇り)

出発9:30-唐松小屋3:00

再び態勢を建てなおし、今日は唐松の小屋を目ざして出発。縦走隊とサポート隊合わせ21名の大部隊になった。積雪の雪は吹き飛ばされて夏道通り歩け。クラストした雪面も他人のアイゼンで踏み砕かれている。

面白くもない。

しかし一年部員が3名おり一足やさしそうなこの残雪も気をゆるめずは大変なことになりそうだ。沢田はアイゼンがは外れたり、色々と危険なので井本は沢田につきっきりになっていた。

大黒岳までの登りは少々いやな所があり、キスリングをおろして50m程FIX工作をしなければならない。

頂上の最後のFIXをすきると小屋までガラガラ下りてすぐに着いた。

3月29日（曇り-雪）

出発7:30-不帰山峰6:30-最低コル13:00-天狗髯13:50-天狗岳15:00。

今日は第3の問題点、不帰のキレットを通らなければならない。井本と柏はキレットのFIX工作をするため先発、約30分おくらせて我々も出発した。天候は良くないが、今日一日はもつたろうと予想しての出発だ。小屋から鹿松岳までの登りは夏道に沿って行ける。山峰まで楽に進めることができた。山峰で少し休んだ後出発、いよいよこれからだ。今まで昇進していた天候は徐々に悪化して来るようだ。風がそろそろ強くなりだした。山峰から山峰まではすぐ近くに見え、小ピークをトラバースする夏道の少しいやなところだった。山峰に立つと山峰の下に井本たちが見えコールをかわす。山峰はC、B、A、と三つの岩峰に分けられる。C峰は60mぐらいの岩峰でルートは信州側を取った。サポート隊のFIX工作によりC峰の頂上から100m程カイルを張りめぐらしてあった。一人ずつ下るがFIXのおかげでスピーディにこなせた。C峰の下で井本、柏といっしょに昼食。正気いつてカンバツてこいよと激励を受けて彼達とわかれた。B峰は比較的小さなピークで残雪上を行き、行き止まった所で15m程懸垂してA、B峰間のコルへ降り立った。A峰はコルからハング気味の岩の信州側を30m程FIXガイルを張って岩におさえられながらトラバース。ピナクルの所から太い鎖が出ている。鎖、鉄バシゴを手掛かりに下って行くが急な斜面は固くクラストして非常にむずかしい。やっとの思いでコルに降り立つ事が出来た。頭上のドス黒い雲は我々が降りると同じように降りて来て頭をおさえつけられているような感じだ。今にあれの中に呑み込まれるにちがいない。しかし大丈夫、ここまでくれば今日の前はイタダキだ。

山峰はトコトコツと歩いて最低のコルに着いた。そして不気味な黒い雲はどうとう我々を呑み込んで、黒節側から雪が横なぐりに吹きつけ出した。

天狗の大降りも登るとなると大した辛はなく、3ピッケで登り切った。雪はいよいよ激しくトップを歩いている鈴木の姿がボンヤリと見える程度だ。すぐ右側は天狗沢へスッパリと切れ込んでいるはずなのに雪面が凝っているようにしか見えない。天狗の小屋をさがすが見えるはずもなく、うっかりすると雪底を踏み抜きかねない。やむなく天狗岳の信州側にテントサイトを作った。はげしかった風雪も夜になるとおさまり、いつのまにかきれいな月が^{コウコウ}煌々とさえてわたっている。あたりは青い光に照らされ幻想的な美しさだ。下を見ると縄野のともしびがキラキラとまたたいている。合宿も終りに近づいたんだなあ、もうすぐあの町へ降りて行けるのか。

スズメをうつと月の光にキラキラと光って狐をえがいた。

3月30日 (快晴)

出発 7:30 - 白馬頂上 14:10

移動性高気圧がゲンゲン張り出して来て快晴となった。気持のよい朝日をあびてテントはかわいてしまった。心配ぐことはないでえ、ゆっくりやろうやとといった調子で出発。

春風がそよそよと吹いて来てうれしくなってきた。腰凝漫歩とはこのことだ。しばらく行くと突然、白馬岳が優美な姿を現わした。神前はさかんにシャッターを切りまくっている。3ピッケで白馬の手前のコルへ着いた。あ、もう白馬は手の届く所にある。しかしそこに腰を下ろした我々はエアーマットを出し、ホエーブスをつけ、紅茶を珈琲してウマイ物を喰いポカンと白馬を見ていた。昼寝をしている奴もいる。誰も急いで駆け出さうとしない。いい気持だ。

計画では梅池の方へ下ることになっていたが、大雪渓を下ろうと云う意見が出された。雪の状態が良く、おちついている。朝早く下ってしまえば雪崩の危険はまず無い。雪崩の危険のため大雪渓をやめて梅池のルートを計画したのだが、この状態ではそれにこだわらなくても良いだろう。この状態が続くなら明日早朝に大雪渓を下ることに決定。

コルの小屋に荷物置いて、思い思いのスタイルで頂上へ向った。なんとなく足が重い。ついに頂上に立った。おたやかな斜面が終わって切れ落ちている所。そこが我々の目指して来た最後のピークだ。正ゴウロンカソユカ強い握手を交わしてその感激を味わった。剱岳に向い^{ミドリ}慕情、次いで節歌---春風をいっぱい吸い込んで-----。

穂高、槍、化嶺----- 南アルプス、富士山----- 目の前に妙高----- ぐらっとまわって白山、あっ 棒平だ。すばらしい天気だ。何でも見える。

気持ちの良い満足感に満たされて小屋へ下って行った。

3月31日 (状書)

出発4:05-麓倉8:15-細野(白樺荘14:30)

午前7時半起床。月が出ている。塩崎と鈴木の作ってくれた朝食を食って、準備をし、さあ出発だ。皆何んともなく気分がいい感じだ。サン・フラストした雪面がかなり急な角度で下っている。不愉快なブレイカブル・フラストだ。だんだん降りるスピードがぐーんと降りて行った。そのフラストが太く雪面を踏みぬき、勢いあまって前へ飛び出しスリップ。正スリップの聲にふりむいた。セカンドにぶち当たり投げ出されスリップ。ラストはすぐストップピングをして止まった。セカンドも必死にストップピングをするが、勢いがついてそのまますべって行った。一瞬の出来事だ。雪面をすべって行く音がしばらく薄暗がりの中から聞え、止った。幸い顔を打ったぐらいで大した事はないようだ。

夜が明け出した。ほとんど平らになったブレイカブルな雪面に手こすりながら行くうちに空は茜色^{アカネ}に変り、そして我々の前にも朝日がさし込んできた。

麓倉小屋の前の月だまりに暖をどっかと落ち着けた我々は朝食の第二回戦を始めた。残ったウマイものを全部出して。

日ごしは酸くまったく春になったことを示している。顔がヒリヒリしそうな感じだ。

何もかも終わった。心おきなく手足が伸ばせる。正もう一刻になって歩くのなんかやめようや。3時ごろまでに細野へ着いたらええねんから、我々は心広く解放感を感じながら細野へ向った。

白樺荘で井本と船が我々を待っていてくれた。正良くやった。御月出とわ。正長かった登山合宿もこれで終了した。

(水渡清夫、記)



春山合宿サポート隊行動 表

	大阪	神威(大町)	遠見小屋(濁)	地藏岳(三角点)	中遠見
3月2日	3 (先登) → 下川宅				
3月3日 ①	3 スキー場 デボ 4 (鳥帽子サポート) (大町)				
3月4日 ②	3 デボ 4 (鳥帽子サポート) (濁)				
3月5日 ③	3 デボ 4 (鳥帽子サポート) (三角点)				
3月6日 ④	3 デボ 4 (鳥帽子隊遠見隊と合流)				
3月7日 ⑤	7 → Camp in				
3月8日 ⑥	デボ回収 5 2 デボ				
	地藏岳	大遠見	白岳	唐松岳	
3月9日 ⑦	7 デボ				
3月10日 ⑧	泥 (スキー練習)				
3月11日 ⑨	7 → Camp in				
3月12日 ⑩	2 デボ 5 遠見小屋へデボ回収				
	地藏岳	大遠見	白岳	(ハネ) (キレット)	唐松岳
3月13日	7				
3月14日	7 泥				
3月15日	(隠野・竹中) 2 下山 5				
3月16日	5 泥				
3月17日	(村上) 2 下山 4 4 デボ回収 2 (比奈)				

	地蔵岳	大蔵見	白岳	(ハレット峰)	唐松岳
3月18日 ⊕ ⊗			2 → デボ回収		
				3 ← 風のためキレット小屋へ行けず	
3月19日 ○			2 → デボ回収(女子部員と会う)		
		1 → 沢田(男)			
3月20日 ⊗ ⊗				3 →	
3月21日 ⊗				• 3 泥	
3月22日 ⊕				• 3 泥	
3月23日 ⊗ ⊗				• 3 泥	
3月24日 ○				5 ← (本隊2, サポート隊3)	
	神城へ				
3月25日			2 ← (鹿島槍ヶ岳から下山した本隊サポートの急)		
				• 6 泥	
3月26日			5 → (雪洞にぬる)		
			5 → (蔵見小屋より、下山本隊、サポート隊)		
3月27日				• 11 泥	
3月28日			(本隊、サポート隊)	11 →	
3月29日			(不、帰キ、レット fix)	2 ←	
			(1年生)	3 • 泥	
			(本隊、白馬へ)	6 →	
3月30日			(八方尾根より下山、解散)	5 →	
(補 註)					
○サポート参加者					
4年 村上 与					
3年 柏 (ノ) 井本					
堀 藤 町中					
2年 堀 崎					
1年 上本 沢田 浪川					

春山サポート隊について

柏 敏 明

今年度の春山合宿は、後立山の縦走という形で実施された。春山合宿の目的、本隊の行動等は既に述べられているので、ここではサポート隊について述べてみたい。

元来、サポートすると云う事は、本隊の行動を支援すると云う箇の力である。サポート隊の目的は本隊が成りすることによって達成されるのである。単調で地味なボツカの連続はサポート隊あつたの本隊という自負、本隊の行動はサポート隊の動き如何に掛っていると云うサポートの重要性を本当に理解してこそ耐えられるものであり、又サポートする喜びが得られるのである。

我々は鳥帽子岳—白馬岳の間に、多くのサポートルートを考えてが、結局残線までに本隊の体力が消耗されることを恐れ、フナ立尾根に1本送り、縦走中最も困難と思われる鹿鹿谷キレットに白岳遠見尾根を経るサポート隊を入れることにした。食糧は1週間分を白岳の頂上に集結することにした。この2ヶ所のサポートで我々は本隊が充分に縦走成し得るものと考えたのである。我々はこの上に隊員構成、日数的に見て本隊をサポートした後にも相当の余力が残ると考え、サポート隊にもアタック目標を準備したのである。先ず第一は五竜岳東面の岩であつた。ここは遠見尾根上から最もアタックしやすく、甲冑にとつても未知の所で非常に興味強く感ぜられた。第二は新人峠頂の雪上技術の強化を目指し白岳—唐松の縦走を行う計画である。白岳—唐松間は技術的に見て、一年の通過可能であり、縦走の楽しさを少しでも味わうことが出来ると考えたからである。

この2つの計画はサポート隊の任務を果たして後余力があれば行つと云う但し書がついていたのは云うまでもない。

以上の計画に従つてサポート隊の行動は開始されたのである。行動の詳細は別項の行動表を参照されたい。

サポート隊の行動の結論を一言で述べるならば、想像外の悪天候に見舞われ、本隊のサポートをするだけで精一杯という感じだつた。フナ立尾根、遠見尾根上では少々の吹雪でも動くことができたが、白岳—キレット間は聞きしにまゐる烈風のため予定よりどんどん遅れ、わずかな隔間をつかんでようやくにか本隊が来る前に3名をキレット小屋に送り込めたと云つた状態だつた。こんな有様だつたので、五竜東面の登攀は全く問題にされず、たゞ

テントの入口からガスの切れた時に、うらやましげに眺めるだけに終ってしまった。そのかわり沈澱の間を利用して巨大な雪洞を掘り上げ、雪洞生活を経験した。本隊を収容した後、未だノ過間分のエッセンが残っていたので、五竜の東面を白岳に残ってアタックするか、それとも本隊と行動を共にして唐松まで縦走するか太いに迷ったが、結局沈澱々々でくさっているノ、2 年都冒少しも春山の采しさを味あわせてやろうと唐松まで縦走することにした。幸運にも白岳―唐松間は天候に恵まれ、今までの欲求不満を吹きとはしてくれたのは幸だった。

今合宿は悪天候に終始したが、ノ年、2 年、サポートの意義を理解し、沈澱の連続でくさり勝ちな気持に良く耐えて頑張ってくれた事に感謝している。それにしても悪天候にもめげず、本隊は本当に良くやってくれたと思う。我々サポート隊は五竜東面のアタックこそ出来なかったがあの本隊のファイトに接して教わられた気持でいっぱいである。なお付け加えれば我々はスキーを使用して時間の短縮をはかろうとしたが、山スキーをうまく使いこなすことが出来ず、かえって足手まといになったことは残念である。

最後に、この春山合宿が一步前進して穂高―白岳間の縦走を何時の日にか甲南の手で行なわれんことを期待する。

装備反省

横 山 洋

装備が登山の方法とからんで考察されるのは、言うまでもないが、春山合宿が我部において初めての、長期間縦走のため、最初は少々とまどった感じがなくてもなかった。装備と食糧と同様に、軽いうえに、容積が小さく、丈夫で、取扱いが簡単であることが最も理想的なのであるが、特に軽量化に重点を置いて計画した。個人装備については、最近市販されている防寒具が良くなり、全くそれに類れるので問題はなかった。たゞ行動中風向が、絶えず黒部側から吹きつけるので、顔面の左側に、ひさしのある帽子とか、目出帽をかぶると、どわしめの包苦しくなると云うので、賛沢からナイロンでキルティングしたフードを考えたのであるが、実際に使用してみるとは、出来なかった。次にウィンパーであるが、使用したテントは重量も、強度も他のものに比べると、一番優秀と思われる。しかしこれはどのテントでも共通の悩みであるが、内張り氷りつくと、倍近い重量となり、俺もキスリングの

サイドポケットをはるかにこえてしまうと云う難点があった。もう一度縦走の機会があれば、はたして内張りが保温上絶対にかかすことの出来ないものであるか、また絶対に必要なものなら、ナイロンか他の適当な物で氷りつかない内張を、研究し実験的に使用したいと考えている。テントを建たり、倒したりする時、ペグのとりはずしは仲々めんどうなものである。従来の竹ではその作業に、より困難度を加えているし、容積も大きいという理由から、太い針金を ∞ 型にして使用してみた。風にも強く、輸送にも便利で好評であった。最後に、装備一般であるが、長期の縦走において、下からのサポートはある日数まで、期待することが出来ないのも、確実な計算のうえで、ガソリン等を上げなくてはならず、いわゆるごまかしは全くきかないということをつくづく感じた。

食糧反省

鈴木 功

春山合宿の食糧計画としましては、縦走のためどうしても一番問題となるのは重量であります。特に恵陽子岳へキレット小屋迄の行動、予備、非常食を合わせて25日間のエッセンであり、我々も食糧の軽量化を積雪期に於てやってみましたが、それよりも、より軽くするためには流潑食をエ食としなければならなく本隊のメンバーの認可を得て食糧計画をたてました。流潑食は昼食にしているラッカー類とマッシュポテトの量を多くしたのみでたてました。6人で一斗カンノユケになりノロド $\frac{1}{2}$ 以内におさめることが出来ました。しかし、流潑の日ほどくに口がさびしくなり又除雪をしなければならぬ時がいく度ありました。テントの中でじっとしている段においては別にこの計画には無理がないかも知れませんが、テントの除雪をするには多くの労力を必要とし流潑食の二食は無茶な除雪中に目から星が出たという者も出る始末だった。献立においては出来る限りバラエティーに富まし食欲が湧く様に二日に一度の米を使用し残りは種々のラーメン、ソバを使用し、野菜は乾燥野菜を使い、サポート隊と合流した時のみサポートしてもらった生野菜を食べることとした。又、昼食に於てはレーズンラッカー、バター、ラッカー、ビスケットの3種に分けて食べ易く、人ノケすつナイロンの袋に入れ、チーズ、チョコレート、ヨーカン類を入れ集しみを揃すように努めた。又、カロリーや栄養に関しては今まで通りで行い特に配慮はしなかった。確定的に見てエッセン献立に於ては全員不満なく大いに喜ばれたが、

澱食の二食に関しては今後いくら軽量化をはかるといってもそれは無理と思われる。我々は実際行ってみたが、〆腹が減っては戦が出来ず〆のごとく山もやはり食べるものは食べようとしたものである。

合宿後記

水 渡 清 夫

積雪期の北アルプスを縦走しよう、駆けまわってやろうという我々の計画（当初の計画は白馬一連稜間）からはかなり稚少されたものとはなったが）は、一応やり終える事が出来た。縦走は予想された通り困難な稜線が我々の行手をはばんでいた。それを踏破する事が出来たのは全員の強いチームワークのなさしめたところだと思う。縦走によって特色づけられるこの春山合宿を振り返ってみると、不十分なことも多くあり、充分反省しなければならぬ。

まず、合宿と部員各自の自覚について。毎年中堅部員以下の合宿に対する自覚という事が問題となる。今度の合宿では、皆よく協力して計画を進め、問題とすることは無い。たゞ、その点に於て一つの脆皮をしようとしていた我々ともは満足しがたいものがあつた。これは合宿に対する自覚としてだけでなく、個人の登喜意欲の問題と強い関係があり、合宿主義の問題とあわせ考えなければならぬ。

サポート隊について。サポートに参加した人数は多かったが、合宿全体を通じて参加出来たのは4名だった。他の者も事情の許す限り参加して荷上げを行なったが、天候が悪く、日程の大部分を荷上げにとられてしまった。予定していた五竜東面の岩場の研究も観察にとどまり、直接手にふれることが出来なかった。予想以上に天候が悪かった為とはいえ、一年生三名を含むサポート隊の十分な活躍が出来なかったことが残念だ。

スリッパ事故について。船瀬と、白馬の大雪渓で、スリッパ事故を起した。幸いどちらも無事だったが、今振り返ってみると、やはり山に対する油断があつたと思われる。リーダーはその時々の状態を正確に握り、常に適切な判断を下さなければならない。大雪渓の場合は特に適切さを欠いてゐたと思われ、深く反省している。山の教訓を思い知た方がいいです。澱食について。この縦走に於て腹痛、食糧の重量が重要なポイントとなった。出来るだけ無駄をはぶいたのだが、もっと軽くする必要にせまられ、澱食日は一日二食にして切り抜けようとした。これは我々が指示したのであつて、食糧係の責任ではない。結果は、予想以上のスタミナ不足となり

泥濘が四日間も続いた北葛のコースでは正しきもじいじの一部につきた。行動しない日は二食で行けると考えたのはまちがだった。

最後に、積雪期縦走ということについて。これは、毎日重い荷をかついで歩くだけで苦しいばかりと言う先入観を持っていたが、それは当たらないと思う。今度のようなルートは変化に富み、確実な技術を必要とし、我々を十分に満足させるものがあった。良き岳人の育成、という我々の目的を具体化する一つの良い方法だと思う。しかし、縦走路には小屋が多くあり、場所によってもテントなしで縦走出来るのではないかとさえ思われる状態なので、場所を考えなければならない。そのような事から、我々は後立山の稜線を歩きながら、深く切れ込んだ黒部の峡谷、そのむこうに見える駒岳、これ等と後立山をつなぐことを考えたりした。

苦しく、長い、それだけにやり甲斐のある春山合宿を終えることが出来た。この合宿で得た貴重な体験を今後に生かし、よい良い山行をするようにしたいと思います。



報 告 Ⅱ

冬 山 合 宿

< は じ め に >

余が槍ヶ岳登山をおもい立ちたるは一朝一夕のことにあらず。何か故に然りしか。山高ければなり。山突りで峻しければなり。-----で始まる小島鳥水の槍ヶ岳探険記の書き出しが、一番適切に我々の気持を表わしてくれる。初期の探険的登山から、また事実はどうであろうと早稻田と学習院の北鎌尾根、初登攀争い（ノタノエ年ウエストツカ根本正三ほか八人夫三名と殺生小舎の上部附近から東鎌尾根を乗越し、高瀬川源頭の槍ヶ岳東北面をトラバースして北面から槍ヶ岳に達した。この北面の登路は、いわゆる北鎌尾根上部の槍ヶ岳頂上に至る主稜線より僅か東によったところである。いずれにしても槍ヶ岳の北鎌尾根に足跡をのこしている。）また松清明や加藤文太郎の劇的な最期を抜きにして、北鎌尾根を考へることはできない。また、これらの要索か尚一層北鎌尾根を産れの地としているのである。

最近における甲南の冬山を見るにノタノエ年横尾尾根より槍を登って登山を下る、61年度は明神岳東稜をセミポーラ。62年度は前穂高北尾根をポーラ形式により行い、またツェルトにより前穂、西穂の縦走、4峰新村、北糸ルート登攀。この合宿が成功に終るや、もう我々は次期冬季合宿を北鎌尾根であると結論をくだしたのである。それ程62年北尾根合宿の成功は我々に自信をあたえてくれた。62年6月杓、竹中が頼木、長谷川の先輩と共に北鎌尾根に登ったときの話をもとにし、計画を具体化せんと資料を集め始めたのである。

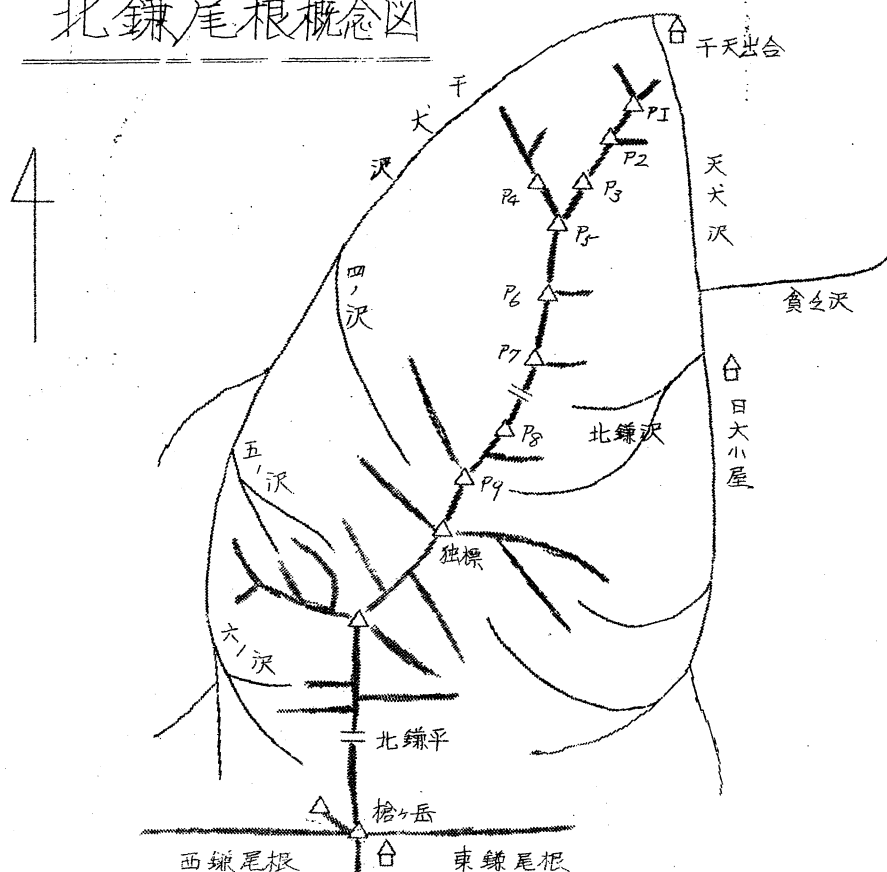
登山者はワンタラーである。このワンタラーとはまた誰も踏んだことの無い尾根を歩き、誰も手をかけたことの無い岩を攀登ることによる喜びを感じるワンタラーであると思う。この意味に於いて、北鎌尾根は決して新しいルートではない。幾多の先輩によって登りつくされた岩尾根である。だが我々の登意欲を十分に満足させる程魅力的な尾根である。夏期に於いては勉強不足であることを認めても、冬季に於けるパイオニアとならんとするだけの技術が我々にはない。まず第一に我々の目的は独断的ではあるが、良きアルピニストにならんこと。その良きアルピニストが初めて良きワンタラーになれるのである。北尾根を終えた我々にとって北鎌尾根は苛負すぎであったにしても、決して簡単なものではなかった。3年間は怒涛の末、次のような計画をたてた。

人員、装備、食料、北鎌尾根の困難度それぞれより総合的に、客観的に判断して北鎌尾根は少数のメンバーにより、ラッシュをかけた方が容易である。また一ヶ所サポートを必要とすることより横尾々根を北鎌隊の下降ルート、サポートルートとして使用すること。以上より、北鎌隊井本以下3名、3年3名、2年1名、横尾隊菅以下8名、4年2名、3年4名、2年2名。尚1年部員は種々の事情により乗鞍岳に於てスキー合宿を行う。失敗に終わった夏山合宿につづく10月の合宿に北鎌尾根を偵察、尾根エユケ市（Peak Ⅱ天狗の腰掛）11月に横尾々根を偵察、デボを行ない慎重を期した。偵察の結果難所と思われるところは、北鎌尾根では、湯俣川左岸硫黄前嶺峰の岩壁のトラバース、PⅡ直下の岩壁、PⅦよりPⅧの間天犬側トラバース、北鎌沢のコルより上半の岩尾根、特に独標、独標は千丈側をまく。また横尾々根ではこのガリー上部、PⅣの登り、横尾の樹の通過である。

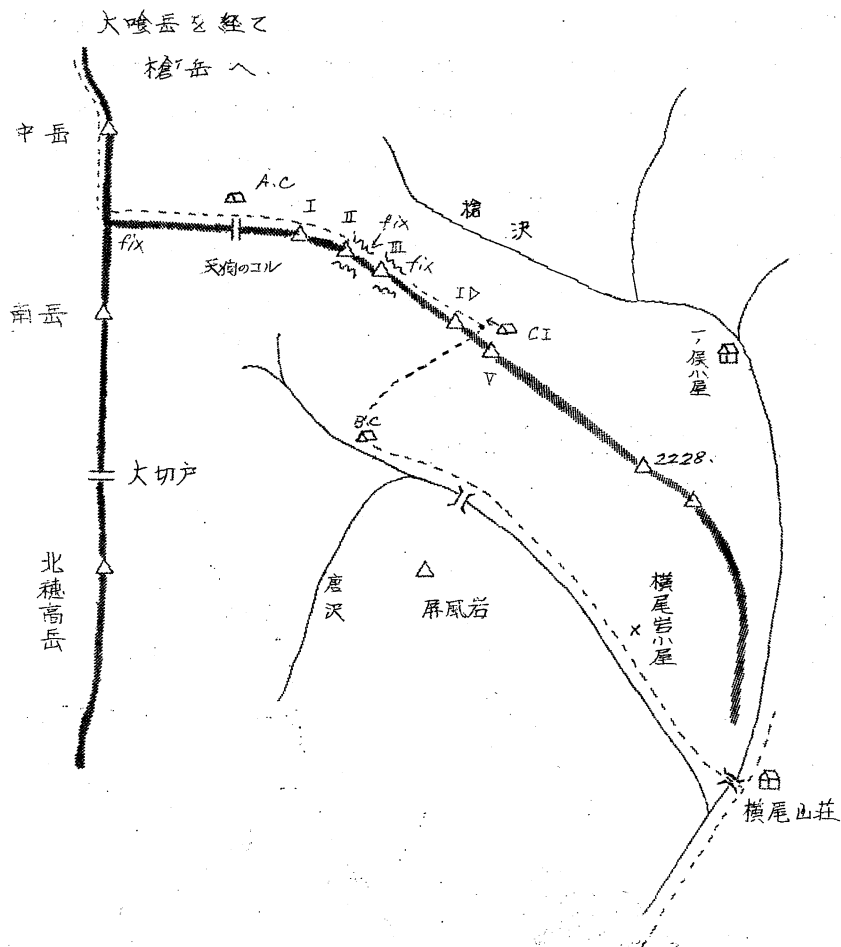
その後数回におよぶ検討会をかさね、絶村の自信のもとに行なった。

（井本 洋 記）

北鎌尾根概念図



横尾々根 概念図



< 期 間 > 1963年12月12日 - 30日

< メンバー > 北嶺隊 C.L.井本 洋 L.水渡 清夫 (B.3)

L.祖 敬明 (E.3) 横山 洋 (J.2)

横尾隊 C.L.菅 義弘 (E.3) L.鶴本 洋 (L.4) L.長谷川 恵一 (B.4)

伊丹 徳行 (J.3) 神前 正博 (L.3) 井上 徹 (B.2)

鈴木 明 (J.2) ハ島 修一郎 (E.2)

北鎌尾根日誌

柏 敏 明

12月13日

多くの人に見送られて、チクマに大阪を後にする。

12月14日 晴

松本駅で機尾尾根隊と、槍ヶ岳での再会を約して別れる。これから2週間、开本、水渡、柏、横山の4人だけで、全マをやっつけていくのである。悪温泉でバスを降りる。山の冷気がぐっと身を引き締めてくれる。いよいよ冬山の第1歩が始まるのだ。各自10貫余の荷を背負って出発する。幸い湯俣まではラッセルもなく、軌道の上を快調に飛ばす。湯俣を過ぎたころから道が白くなり、やや歩き難くなる。途中竜の前で40mのfixを使用して、4時30分、あの今にもつぶれそうな、十天の出合の小屋に着く。小屋の中にテントを張り終るころにはもう真暗になってしまった。

time 葛 09:00 — 湯俣 14:15 — 十天出合 16:30
14:30

12月15日 雪→晴

4時起床。外は吹雪。食事だけ済ませ、天気待ちをする。10時10分ようやく天候が回復したので、テントをたたんですぐ出発する。雪の反射が目痛い。1峰の取付まで、右岸に行く。膝までのラッセル。僕だけがズボラをため込んでアイゼンをつけなかったのでもツルツルすべり屋れをとる。吊橋を渡った所で休憩。1峰の登りは予想していたよりも積雪が少なく約1尺のラッセル。倒木に悲鳴を上げながら、秋の偵察通り登る。岩峰は固定された針金を使用、最後の岩場は、残置fixを利用して腕力に登る。1峰頂上についた時には、アイゼンをつけなかった事がこたえ、相当あごが出た。他の3人は快調、2峰を簡単に越え3峰にテントを張る。このころより風が強くなりだした。

time 十天出合 10:10 — 取付 10:40 — 1峰 13:30
10:50 13:40

— 2峰 14:30 — 3峰 14:45
14:35

12月16日 快晴

今日は全くの快晴、秋晴のようである。空には雲一つ見当らない。この天気から北鎌のコルまで行けると確信する。十峰を天犬側からまき、危なれんせをつめる。粉雪で下が草付のため、足場が定まらず、嫌な所である。

とフラストした雪面が割れ、危うく雪崩にまきこまれそうになる。必死の思いで、この雪面を切りぬけると、もうデボ地点も間近だった。天候はいよいよ悪くなり、風が猛烈に吹き出して来た。デボを回収してすぐテントを立てる。ポールをビッケルで補強し、ブロックを積んで今夜に備える。天気図を取ると低気圧が間近にせまっており相当荒れる気配である。夜は姉の作ってくれたローストサキンを食べる。久しぶりの肉なので1人1本では足りない位だった。

time コル 08:00 — 8 峰 10:50 — 独標基節 13:00
10:55

12月18日 風雪強し

泥濘、昨夜の風の為バンブーが1本折れる。テントがやぶれるかと思う程風は強かった。ス積雪もひどくラッセルする後からみるみる積っていった。1日中、強風が吹き荒れる。

12月19日 風雪

泥濘、昨夜の風も強かった。雪は少なかったが、真夜中に水渡がポールを取ってテントをたおそうかと云い出した程だった。昼間も風のやむ間なし。泥濘も2日目になると少レインゲツになってくる。夜、焼ソバを作る時に使ったラードが悪かったのか、水渡が3回程あげた。

12月20日 快晴

久しぶりに太陽を伺う。テントから出たとき、霧羽、野口、針ノ木方面が金色から桃色に変化する輝きに元氣となる。太陽に照されると気分即にも晴々する。今日は今迄最大のヤマ場である独標越えである。水渡も体の調子をとりもどしファイト萬々である。独標の基節を約80m千丈側にトラバースした所でガイルを出す。篋がトップで、問題の岩のトラバース地点を目指して、60°の雪斜面を登る。雪が昨日までの風でよく締まっているので気持が良い。トラバース地点の手前で横山をヒレイ。横山がつくとすぐトラバースにかかると。扇型ハーケンを1本打ち、ビレイ点を作っておく。雪はあまりついていない。去年の11峰が思い出される。ジリッジリッとメートルを感ぜ、一抱え岩の手前にハーケンをもう1本打つ。下を見ると、千丈沢までスタッと切れ落ちて高度感満点。思わずニヤニヤとしてしまう。岩を掘いて向う側に廻り込む。エンピを担いでいるので、振られないように気を失う。小さなホールドに全体重をかけ腕力で岩を乗り越越し2m四方のテラスに立つ。すぐビレイピンを打ち、フェイスシルを固定する。悪場を越したという安心感からかミジメを確す。テラスのシミに打つ。

横山、氷渡り上がって来ると再びトラバースにかかる。ホールド、スタンスは多くあるのだが岩が混ざっているのが気を配り。約15m行ったところでガイルが足らなくなり、ピレイピンを打ってガイルが上がって来るのを待つ。井本が凍傷にかかり、岩のところで相当苦勞しているらしい。横山が助けに行く。井本が上がって来る。体調が非常に悪いらしい。トラバースを続ける。約15mで終了。たて型ハーケンを打って少しガイルを固定、日陰なので足が痛烈に痛み出す。変って横山がトップに立つ。井本は相当しんどそうである。ガリーをつめて左のリッジに移って登ると頂上だった。風が強かった。ここから眺める大槍はこれで3回目だが、今日の大槍が雄大で荘厳で最も素晴らしい。雪をまとった小槍を従えた姿は太陽に輝き、神々しい感じを与えている。明日はあの頂上だと決意して出発する。稜線伝いに行ったが、この頃より井本が遅れたし、体の不調を訴えたえたしたので、すぐテントを張ることに決める。Camp サイトを探すが名にしおろやせ尾根の急、仲間なく、やっと頂上から直線距離にして300m位の地点に3m 2mの広さを見つけ、整地してどうにかこうにかテントを張る。この時まではずっと井本はツェルトをかぶって休んでいた。テントを張り終るとすぐ井本を寝かす。胸がムカムカするらしい。原因ははっきりしないが、トラバース地点で飲んだ。凍傷の事プレスコールの副作用の可能性もある。しかし一眠りすると楽になったらしく、夕食も普通に食べた。宿務とする。天気図を見ると日本海に低気圧が出て来ているのが気にかかるがあと1日で肩の小屋まで行けると思うとうれしくなってくる。

time 独標基部 08:25 — トラバース地点 10:00

— 独標頂上 12:10 — テント地 14:30
13:10

12月21日 雪、風強し

泥濘、一度テントをたたみかけたが、降雪、風共に強くなり、泥濘となった。今日こそは頂上を踏めると思っていたのに残念である。9時頃から風が強くなり、テントがうなり出す。行動を中止してよかったとしみじみ思った。今日も横尾パーティーと連絡がつかなかった。さぞは飢えている事だろうと思う。こうなるとトランシーバーも無用の長物である。

12月22日 曇、季節風強し

ガスの中テントをたんで1時25分出発。ワンピッケ目頭がクラクラして何が何やら全然解らず、我武者羅に歩く。稜線通し、或いは牛丈側をまいて行く。牛丈側から吹きつける突風のため息も出来ない。雪が顔に当たって、

ものすごく痛い。まるで小石をぶつけられていゝるようだ。目出し帽もカテンがカテンに束る。おかげで頭痛もどこやらへ伝へてしまった。今度は横山が遅れ出す。相変わらず風は強烈、井本右亦亦に紫色のシミが出来、顔面凍傷の徴候があらわれ出す。北鐵平の基部で一まず大休止、昼食をとる。基部の天丈側に極好の Camp サイドがあったので大幸をとってここにテントを張ることにする。このテントサイトは風当りがよいのでじっくりと整地し、万一のためにブロックを積んだ。横山は風邪をひいたらしい。薬を与えてすぐ寝かす。昼食をもう一度食べ直すともうすることがなくなってしまう。皆シュラフに潜り込み、各自、本をよんだり、日記をつけたり思い思いのことをして時を過ごす。4時の気象通報によれば、移動性高気圧が来てきたらしい。明日は晴れそうだ。明日こそは絶対に頂上を踏みたいものだ。今日もトランシーバーで連絡がとれず、横尾パーティーはどうしているのだろうか。

time テント地 08:25 — 北鐵平基部 10:45
12月23日 ガス — 快晴

5時35分の気象解説は移動性高気圧が張り出し冬山において数少ない晴天になるだろうと報じていた。この予報に期待して7時50分出発。霧と強風の中北鐵平、天丈側をまわ。天丈側は淡い秋色。天丈側は薄青色何とも奇妙な黒気味な又美しい景色であった。北鐵平を越したとき、突然眼前のガスが晴れ、檜の槍、朝日に輝いて金色に光る槍の雄姿が我々の前に現われた。とんどんガスは消え去り紺碧の空が変って槍の背景を作りはじめた。小槍も孫槍も大槍も雪帽子をかぶっている。白き神々の座という言葉がぴったりとあてはまる槍の姿だった。槍の基部で荷を下ろし、しばし神秘的な姿を仰ぐ。ガスもすっかり晴れ朗、立山、後立山、遠く富士山も望める。いよいよ本峰の登りにかかる。井本が60mのフックザイルを持ってガリーに取りつく。快調に高度を上げて行く。20mで井本の姿が岩陰に消える。後は雪片が落ちてくるのを見て登っているのだと解るだけである。次で僕がトップに出る。よくクラストした雪壁を登るのは何と寂しい事だろう。アイゼンがキュッキュッと音をたてる。60mのフックザイルが短かく感じられた。頂上までワンピッケの所で休憩、とっておきのサラミを食べる。

苦しかった日々もワンピッケで終わるのだ。下を見下ろすと僕等のラッセルが点々と続いている。北鐵尾根上には僕等以外に人影は見られなかった。2年生でありながら、よく頑張った横山がトップに立つ。嬉しいそう

にキムニーを登って行く。10時45分遂に槍ヶ岳頂上に立った。剣岳の
方に向い福永先輩に対して黙禱する。4人で肩を組み節歌を斉唱するが声
がかすれて歌にならず、感激の一瞬。しかしもう北嶺尾根は僕たちにとっ
て過去のものになった。僕達の前には又新しい目標が始まるのだ。何時の
日にか、あの遠くにキラキラと光る滝谷にも登れる日が来るだろう。滞頂
45分、名残りを惜しみながら頂上を後にする。エビの尾根のはりついた
大槍を夏道通り下る。

12時20分、ピッチで肩につく。早く横尾パーティに会おうと、冬期小
屋に飛び込む。しかし小屋の中は真暗、シーンと静まり返っている。どう
したのだ。伝言を振すかない。横尾パーティはどうしたのだろう。日数を
数えてみるがどうしても槍の肩にきていなければおかしい。嫌な予感が首
の脇を横切る。1時45分突然長谷川、鈴木がサブでやって来た。思わず
走りよって抱きついた。話を聞くと思わぬラッセルに計画が遅れてしまっ
たらしい。とも角よかった。積り積った話が次々と飛び出す。12時30
分長谷川、鈴木パーティは大槍下タックに出発。僕はもう早や夕食の
用意にかかった。夜はローソクを囲み、ささやかなパーティを開いた。粗
末な食事ではあるが幸せが一杯だった。

time 北嶺平基節 07:50 — 大槍基節 09:00
09:10

— 槍頂上 10:45 — 肩ノ小屋 12:20
11:30

12月24日 雲、暴風

強風のため氷渡、日本海に低気圧がへって来たので、2~3日悪化しそ
うである。

このため 昼食をぬいて4人分3日のエッセンを6人4日分のエッセン
に食いのばすことにする。小屋といっても風通しよくテントより寒い。窓
が全部うずまっているので真暗、ローソクの火だけではおびしい。今年は
空襲でクルシマスイブとなった。

12月25日 曇 → 雪 → 一時晴

天気図によると今は寒冷前線が通過するので慎重を期して氷渡する。し
かし前線が通過するのが遅れたためみすみす動ける日を逃がしてしまった
。ローソクを立てまどろみと話して時間をつぶす。今日は正月の料理が
話題になった。水渡が餅の食べ方を一生懸命聞いていた。恵ちゃんも風邪
がひどい。シロミンを飲む。4時の天気図を取ると前線が通過した様子な
ので、明日は晴れると前祝をする。といってもレースンフッカーノム当

マ4枚、アーハラがヘッタ。

ノ2月26日 風雪ひどし

今日こそ晴れると思っていたのに小屋がビュービューうなっている。今日も沈没。エッセンあと3食足らずになる。レーズンクラッカー40枚余り、ソバノ食、天気図を取ると明日も天気は悪そう。食糧統制はいよいよきびしくノクラッカー2枚となる。空腹で死にそう。

ノ2月27日 暴風雨

沈没全くいやになる。朝の天気図によると日本海に寒冷前線が停滞している。外は昨日にも増して荒れている。もう話す事もなく、ローソクも残り少なくなり陋閣の中では気持が滅入るばかり。4時の天気図をとる。揚子江に停滞していた高気圧が20Kmで移動を始め、日本海の前線が消えていた。明日こそはまちがいなく晴れると皆で歓声を上げる。最後のとしておきのソバを食べる。何日ぶりかのまともなエッセン。うまかった。10時の天気図はいよいよ移動性高気圧が日本の方に向ってはり出して来た。3度目の正直絶対晴れると信じる。

ノ2月28日 快晴

5時起床。風は相変わらず強いが、曇天の星である。すぐ食事をし5時35分の天気図を取る。移動性高気圧が日本南岸に近づいて来ている。もうまちがいない。出発の用意をする。久しぶりのパッキング。小屋を掃除して外に飛び出す。急に飛弾側からあおられるような風が吹く。9時20分出発。昨日富士山風速45kmとラジオで聞いていたが、それにまけない風が飛弾側から吹きつける。雪を伴っているのも、ものすごく痛い。キスリングを担いでいてもよろける。息が出来ないので苦しくてたまらない。横山などは10歩位歩いてはハアハアとあえいでいる。時にひどいのは中岳の辺りであった。強風で一気に5歩以上は歩けない。ピツケルにたよって風に耐える。横尾尾根に下る時表層雪崩にやられかける。中40m厚さ2m位、本谷の方に向ってくずれ落ちる。肝を冷やした一瞬。もう悪我道中やつこのことでCⅡに駆け込む。もうクタクタ、バテにバテ、テントには神前、管、八島、井上がいた。感激の握手。話がはずむ。長谷川、井本の凍傷がひどい。悠ちゃんの水オ、井本の右手の小指、鈴木の水足小指共に水疱が出来る。水疱、横山の顔面凍傷にかかる。全然悪傷なのは僕だけ。恐らく国境稜線の風にやられたのだろう。各人湯につけて治療、セルロイドアクロマイシン、アレスコールを施す。

time 有ノ小屋09:20 - 中岳10:30 - CⅡ13:30

12月29日 快晴

3時起床、アタックメンバーの朝食の用意をする。風が強いのでアタックをどうするかめだが、猪局山荘気象を聞いて決行とする。アタック隊を送り出した後、のんびりと朝食を作る。昨日の雪崩の後を振り返ると、昨夜の風で余り分らないが本谷にはものすごいアブリが出て雪崩の大きさを物語っていた。CⅡを撤収し、ナイズを回収しながら下る。横尾の歯がヤバかったが、なんなくCⅠにつく。CⅠで昼食を食べる。赤沢岳南壁が眼前に赤く聳えたっている。余り雪はついていないが登攀意欲をそそる岩壁だ。CⅠよりグリセードいやシリセードでB、Cへ下る。出会につくと静太のテントしかなく、我々のB、Cはどこだと探す。静太の人にきくと1時頃撤収した由、不可解な気持でテントを立てる。何故テントを撤収したのかどうしても解せない。6時頃アタックした連中が帰ってくる。寒じは風も強くなく素晴らしいアタックだったらしい。夜合宿打上げをする。今日で合宿も終りだと思うと様々な思いに駆られる。ラッセルにアゴを出した事、次々と病気で倒れ、これからどうなるのだと悩んだ事、槍の神々しき姿、頂上での歓喜、風雪まじりこめられた小屋での4日間、雪崩れにあった時の驚き等が走馬灯のように思い出される。しかし僕たちは過去を憂するより、未来に望みをたくそう。

もう北嶺尾根は終ったのだ。

time CⅡ(テングのコル) 10:55 - CⅠ(P) 13:00 - B, C 14:50
13.

横尾尾根日誌

鈴木 切

- 12月12日 先発隊菅、井上出発
13日 北嶺、横尾尾根の西パーティ 出発
14日 島々で先発隊2名と合流しチャーターしたトラックに9名乗り込み中の場を越えたが釜トンの出口付近で、車前詰めずついに降ろされる。大正地を左手にながめながら上高地を回り横尾に着いたのは4:00頃だった。冬季小屋をB、Hにして泊る。
15日 菅、長谷川、井上と鈴木の水の4名をサポートし横尾本谷をつめB、C設置、尾根の手前迄ラッセルする。
16日 B、Cの4名C、予定地へデポ。

- B、Hの5名B、Cへボッカし神前テントインする。
- 12月17日 菅、長谷川、井上と鈴木の4名神前のサポートでC1入り
B、Hの4名B、C入りする。
- 18日 偵察の時エッセンをデポしたのをさがすが発見出来ず。
B、Cの5名沈没。
- 19日 神前、鵜木、伊丹とハ島の4人C1ボッカ 森本下山する。
C1の4名デポ捜しやっと発見出来る。
- 20日 長谷川、鈴木の名C2予定地の稜線までナメし菅、井
上はボッカ、B、Cの4名沈没。
- 21日 C1、B、Cとも沈没
- 22日 C1から4名、C2被害にむかうが稜線まで行くことができ
ずユルで雪洞セバークする。
- 23日 ビバーク地点より長谷川、鈴木の名槍アタックする。肩
の小屋にエビ飯尾根のメンバーと合流し肩の小屋に泊る。
菅、井上は稜線へデポを回収しC2被害
- 24日 沈没
- 25日 ”
- 26日 ”
- 27日 ”
- 28日 元気回復するが風強しエビ飯パーティとアタックに行った2
名と横尾タ根を下りC2へ戻る。全員顔面凍傷にかかる。
C1から来た神前、ハ島C2に入る。
- 29日 菅、神前、井上、ハ島の4名槍アタック。残り6名で、
C2C1飯回収しB、Cへ戻るがB、Cなし伊丹、鵜木、B、H
から上高地へ下る。アタックメンバーもB、Cへ帰る。
- 30日 B、Cを徴収し横尾へ出て上高地へ帝国ホテルの前に伊丹、
鵜木と合流し解散する。

横尾尾根雪洞ビュアーから槍アタック

鈴木 功

昨夜は狭く少し傾いた雪洞で長谷川、菅、井上、鈴木の名は今にも天井が落ちてきそうな雪洞の中で寝むれぬ夜を過ごしたのである。

23日朝、雪洞からはいけると昨夜とうってかわって快晴であり、雪煙がスカイラインに美しくあがっているのが印象的だった。長谷川、鈴木の名は第1次アタック隊として槍へアタックをかけることになったのでサブを背負いピッケルを片手に足どりは軽く心はずんでした。国境稜線までは急な所だったが、ラッセルはなし快進に進んだ。稜線に立つとアイゼンは音聲をかなでるがごとく、キシミ、ツアツが気持ちよくくい込んだ。風もあまり強くなく今日は最高のアタック日和だ。中岳の下りにさしかかるとピッケルがともすればささらなく、慎重にならざるは得なかったが、さほどヤバクは感じなかった。槍の肩の小屋につくと偶然、北横尾根のパーティに会い彼等の成功を祝い握手をした。一端、冬季小屋に入り朝食をとってから槍の麓へ登る事にし少し休んだ。

槍にはほとんど雪はついておらず夏のルートと同じに我々は登った。ハシダが出ていてあまりパツとしなかったがとにかくツルハ式で簡単に我々は頂上に着く事が出来た。

合宿後記

井本 洋

23日、強風をついて（その後運動性高気圧につつまれ快晴、煦風となった。）北壁より槍ヶ岳の頂に立った時、感激のあまり友とだきあい *Berg Heil* と叫んだ。肩を組み部歌をうたった。そして我々は滝谷をながめ、いつかあの壁を登りたいと口々に言い合った。自分が中心になり計画し運賃した山行がクライマックスに達したのだ。そのときの感激を一生わすれる事は出来ない。この若い情熱をいつまでも大切にしたい。だがこの合宿をふり返ってみると、決して成功したとはえない。以下その反省である。

計画について。北横尾根を中心に考えすぎ横尾々根が糸物になってしまった事。そのため横尾隊の人たちにはおもしろくない合宿になってしまった。我々の技術と考えた時、北横尾根はやはり小数パーティによる縦走の方が、ボラー形式で行うより、より容易になせる。サポートルートとして、穂沢を

使用することはこのった多数の上級部員の登高意欲を満足させるものではない。かと云って他のルート、東嶺、西嶺尾根は長すぎる。結局横尾尾根は最善ではないが次善の策である。この様な妥協は合宿にはいつもつき合う物であると考え。本質的には雪山を自由に歩き出来る総合的な実力を身につけるだけ、北嶺尾根も横尾尾根も孤立したパーティとして行動することにあった。我々3年會が出来ただけ分散パーティをだそうとしたのは各自の登高意欲をあり、登山家としての成長を期待したためであった。計画立案にあたり4年生に多く教えられるところがあった。

合宿運営について。今回の合宿の原因は計画にあるのではなく、運営にあった。偵察の不完全、デバ地の不適切、考え方判断の幼稚なこと等があげられる。運営にあったのは、瀧水、長谷川西先輩に助けられた。最大の原因は3年會の意思疎通をかけたこと。まとまりがなかったため各テント間のちぐはぐな判断。これはテント間の通信不十分のため尚一層ぼけしいものとなった。63年度は部室での議論討論の低調な年であった。この事より部員教育の失敗、合宿運営面でも多くの弊害となってあらわれた。これはリーダー井本の意人を反映しており井本自身もいろいろつとめたが、どうすることもできなかった。合宿運営にあたり見逃がしてはならないことは2年部員の活躍である。鈴木、横山の2名は十分期待にこたえてくれた。合宿の成功、不成功は2年部員に負う所が多い。このことを2年部員は自覚して今後の山行にはげんでもらいたい。

装備、食料について。上記の通り横山、鈴木西君の活躍によって十分であった。

残念なことは1年部員が横尾隊に加わる事が出来なかったこと。これは武田さんに兼鞍岳で十分訓練してもらいました。2年部員の参加者が少なかったことである。

天候にめぐまれ、また先輩の助言によってどうにか事なく計画を実行する事が出来たことを感謝しつつ Berg Heul

永谷

報告Ⅲ

東大谷

63年度夏山合宿について

井 本 洋

夏山合宿は7月10日から始まった。春の長期縦走にやなえ我々の肉体的精神的残さをほかるため、全員ノブ賞の荷を背負って二股入りをした。(最初大日越をする計画であったが、中止した。)合宿はは前年通り前半(10日より30日)後半(31日より約2週間)にわけた。つまり前半は剣岳において、後半は4つのパーティに分け縦走、溯行を行なった。まず前半の剣岳合宿について説明しよう。合宿参加者のメンバー構成をみると逆三角形のごとく上級部員の参加が多く、剣岳の各岩場々十分こなせるだけの実力があると判断した。多くの上級部員にとって毎年々々同じルートをアタックするだけでは、各自の登高意欲を満足させることは出来ない。既成のルートではあるが、新しいルートを求めようと努めた。それが池、谷であり、東大谷である。計画概要は三股にB.Cを置き三の窓、黒石台のゴルにA.Cを置く。二股のB.Cは一年生のために置き、剣岳の概念把握を目的とする。従来の源次郎尾根、ハツ峰、大窓→小窓のブッシュこきに加え新しく前剣東尾根、マイナーピーク、内蔵ノ助への散歩、三ノ窓尾根にも登り好評であった。またジヤングルムやクレオパトラニードル、本峰南壁等の岩登りもし、グレンドと異ったたのしさを体得させる。三ノ窓は千シネの各ルート、ハツ峰六峰各フェース、池、谷の中央ルンゼ、ドーム壁、中央壁、奥壁の各ルート剣尾根のためのテントである。甲南大学山岳部にとって全く未知の地、東大谷のためのA.Cを黒石台のゴルに置いた。この報告は黒石台のゴルの住民の活動を書いたものである。全員大いに頑張る合宿が終るころにはハークンかたりなくなってしまった程である。

後半の合宿は7月31日に二股を出発して黒薙川御又谷溯行(4名)、剣岳より三候蓮華岳、白馬岳の北アルプスリターン縦走(5名)後立山より西穂縦走(3名)、南アルプス全山縦走(5名)の4パーティにわけこれを行なった。縦走は山の大きさ、概念を一年生に教えるの一番手早い。溯行は前年の黒薙川上廊下より金作谷につづくもので上級生によって行なわれた。(詳細は報告Ⅳ)各パーティの行動は巻末にある山行一覧表をみて下さい。

前半の合宿は悪天と多くの蓮華草害を目撃し、異様な雰囲気の中で行なわれた。また我々甲南パーティも多くスリップし負傷者が続出した。また各部

頁の自覚がなく、研究不足であつたり、出版前の相互理解が完全でなかつたため、種々不都合が生じたことは残念である。この合宿の反省事項は、昔の書いてある東大谷パーティの反省とほぼ同様であるから省略する。

〈期 間〉 前半 7月10日 — 30日

於二股・三ノ窟・黒百合のゴル

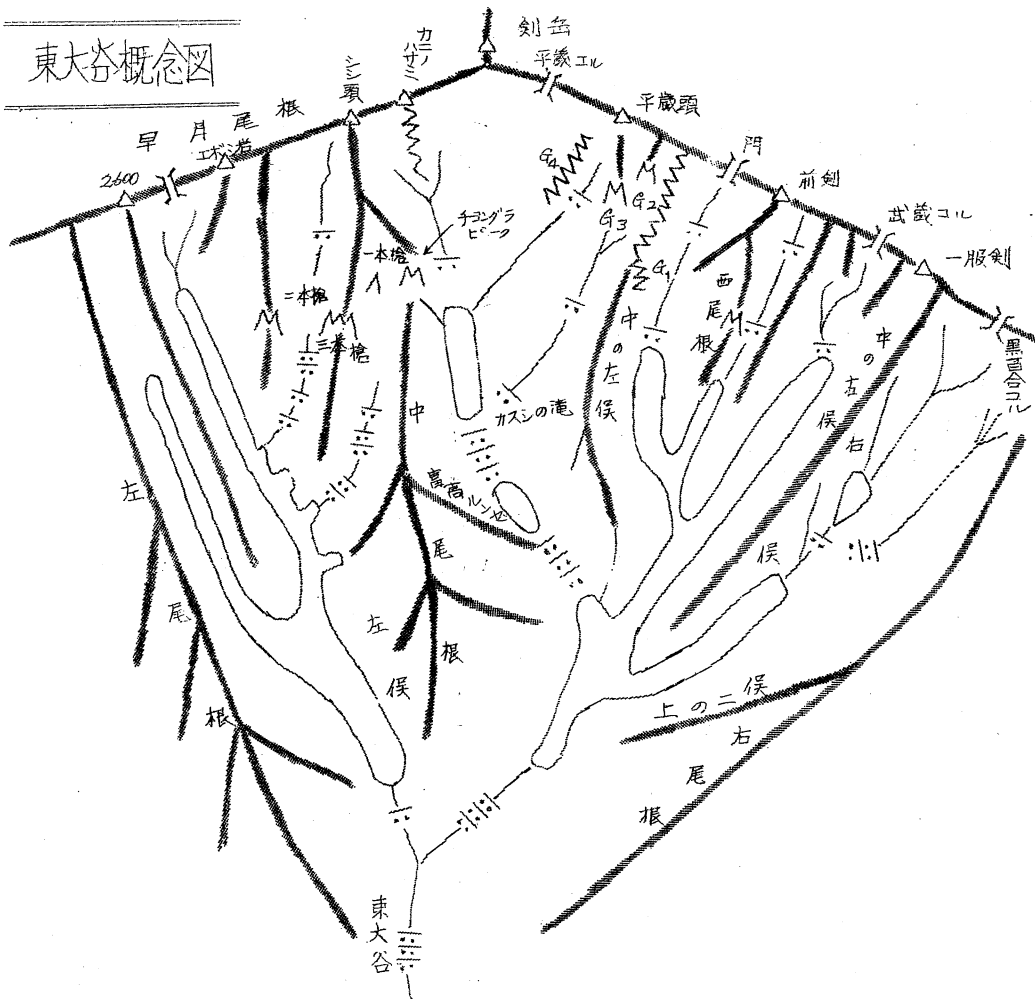
後半 7月31日 — 8月13日

於柳又谷、化アルプスリターン

後立山 → 西穂高、南丁全山

〈参加者〉 4年生 森本、長谷川、村上
3年生 井本、菅、水渡、伊丹、神前、祖、塩路
2年生 井上、高崎、鈴木、横山
1年生 浪川、上本、林、酒井

東大谷概念図



＝ ま え が き ＝

甲南にとって未知なる岩場、東大谷、ここには、未登の岩場もあるというので、菅、伊丹、横山の三名は、山に入る以前から 相当なファイトを燃していた。また予裕があればと云って 立てた。も勝谷の計画は残念ながら実行に及せなかった。

一服剣、前剣、平蔵の頭と続く剣岳の主稜線と早月尾根に向って、数々の尾根とルンゼを持って突き上げている。この東大谷は噂のとうり脆うんな前で、常に天候は悪く、岩は脆く、谷底から吹き上げてくる風は冷たかった。また東面が晴れていてもこの谷だけガスがかかっている場合があり、一日中晴れるという日は少なかった。しかし、ひとたびこの谷がガラリと晴れよると、今まで壮厳とまで云える程大きく、ほんやりとみえていた尾根や谷が、たゞ一度に、ガラガラでかさかさしたものになってしまった。足の下のカレはどんなに気を配っても、カウガラ流れて行くだけで、底なしの壺のように思われた所が、六甲山の六月地獄谷の壺のように小さく思われ、曲りくねって白く反射しながら麓に下っている。白灰川を見ながら予裕を持って下れる谷となった。だから、かえって天候の良くなり時の方が、この谷は味がある様に思われた。我々のテントは剣山荘の池の辺に張った。そこはお花畑で、絶好の我楽多であったがどのアタックにも一服剣、前剣を登らなければならなかったので取付へ行くまでが一苦勞だった。最初のうちは、まるで地獄の底を覗きに行くように怖々、視界のほとんど無い谷間を下った。

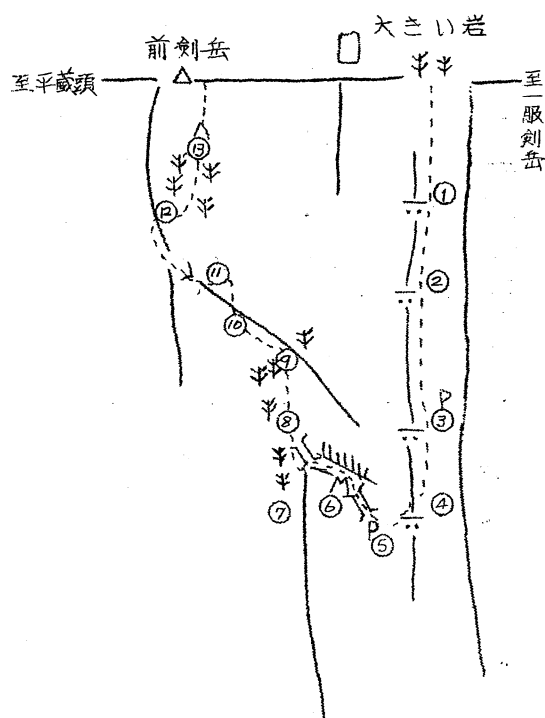
この谷は、よほどしっかり概念を頭に入れておかないと、時々ガスの切目から見える地形から、自分の居る位置とこれから登るルートを取付の確信を持つことは難しく、取付こうと思えば、どこからでも取付けそうであった。取付から上がガスっていて全く見えないことが多く、下った壺の数で見当を付けて取付くより仕方なかった。

我々の登攀対象であった。G₁ G₂ G₃ 前剣西尾根、それから、中尾根のナヨンク3ピーク、一、二、三本槍等を、一服剣や前剣などから見分けるには相当目が慣れて来なければ不可能で、岩が重なって見えるため、最初のうちは全然見分けがつかず、台宿も終りに近づいたころにやっと明らかになった。そして、この谷全体の概念を把握するには、解説書にもあった様に、中尾根のブッシュこきをやるのが一番よく、G₁ G₂ G₃ 西尾根、西壁、三本槍が手にとれる様に見えた。また、谷へ入って来てもこの尾根はガスっていても、大きいためすぐ見分けが付くので、自分の位置を掴むより材料になる。

最初我々は右俣を二俣までくだるために下降路と決めていたが、大工大の直難救助のとき、中の右俣を下る方が、遂に速い事が分り、以後ずっと、中の右俣を下降路に使用した。右俣も左俣も高巻と大きな竜とフレヴァスの連続で、非常に体力と神経を消耗し、一度この谷を下降してから、どのルートを取るにしても、早月尾根を経て帰幕するには、12時間以上の時間がかかった。

それから、最後にこの谷で最も印象深かったのは、中俣本谷から見上げたG₂G₃の頭、駒草ルンゼ取付からの二本槍、三本槍の眺めであったことを付け加えておく。

(管 義弘記)



前剣西尾根

- ① 小さい竜
- ② 〃
- ③ 15mぐらいの竜
- ④ 取付点
- ④~⑤ 広いガラガラ岩の
あるガリーエはフェース
- ⑥ 岩に大きな岩 その間
マビレー
- ⑦ ⑥から見ると半円に切
り取った様なビレー点
- ⑦~⑧ 浮石のトラバース
ハーケン3本ぐらいある。
少々イヤな所
- ⑧~⑨ ブッシュとガレ
- ⑨ ホコホコした岩の間の
ビレー点
- ⑨~⑩ やさしい車付リッジ
- ⑩ 小さなハイ松マビレー
- ⑩~⑪ 浮石のフェース
- ⑪ ビレー点
- ⑪~⑫ 正面のフェースを
登らず左を巻く
- ⑫ ビレー点 ⑫~⑬ ハイ松の斜面
- ⑬ 小岩峰の下の終了点

前剣西尾根

菅 義 弘

7月16日 曇

6時、薄曇りの中を出発。一服剣を経て、前剣の登り、大岩手前から前剣沢へ下降。急なガウ場、崖の3つ目に捨て縄があった。15M懸垂、次の意の左岸を捲き、大きなガリーのみえるところでビレー。オーダー横山、伊丹管、広い浮石のガリー、浮石のテラスを少し上った所の大きな岩の間に残置ハーケンがあり、そこでビレー。次に草付のバレドが稜線までつづいている。稜線を乗り越す手前に残置アイスリーケン有り。そこが2ピッチのビレー点となる。次に稜線を中の左侯側を巻く。浮石と草付が混って危い。残置ハーケン数本、西尾根ジャンクション手前の岩の間に3ピッチのビレー。この辺でガスが出て何にも見えなくなる。左に稜線の草付を20M位たどり4ピッチのビレー。次にホールドの多いフェースが出てくる。浮石と岩がしめっているのが嫌な所。フェースの最後でビレー。左へ少し捲いて登った所でビレー。6ピッチである。次にハイ松の稜線をたどって前剣下の終了点に出る。

〈メンバー〉 L、菅 義弘(E3) 伊丹徳行(J3) 横山 洋(J2)

〈時間記録〉 AC発 6:00 前剣大岩 6:26 前剣沢懸垂の意 7:00
西尾根取付 7:30 終了点 10:30

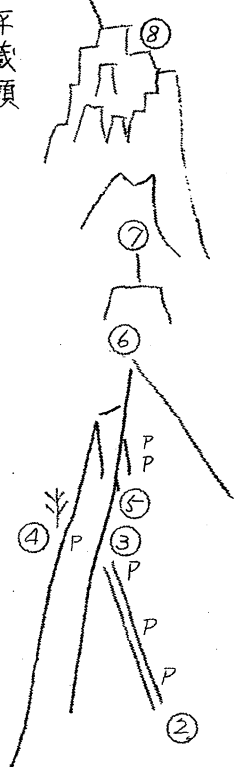
剣岳東大谷G1G2G3連続登攀

伊 丹 徳 行

- ① チョックストンの産
- ② 取付点 4 の盛が見える。
- ②-③ 草付バンド
- ③-④ 浮石の混いたラバース
- ④-⑤ 急な草付
- ⑤ ビレー点
- ⑤-⑥ かぶり気味のフラックナイフリッジ
- ⑥ 岩峰下のハイ松のあるビレー点
- ⑥-⑦ 岩峰をこえやさしいリッジ
- ⑦ ビレー点
- ⑦-⑧ 岩峰、ゴツゴツした岩のリッジ
- ⑧ 終了点

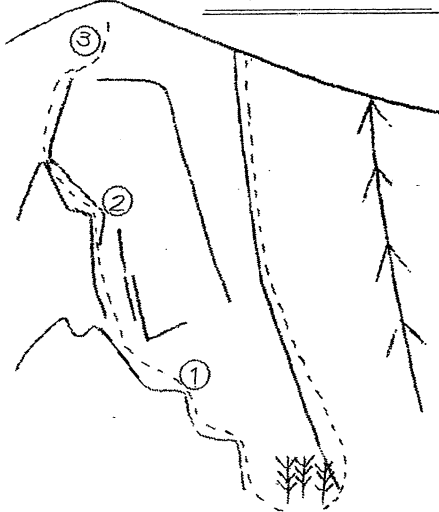
G₁ルート図

平蔵頭



前剣

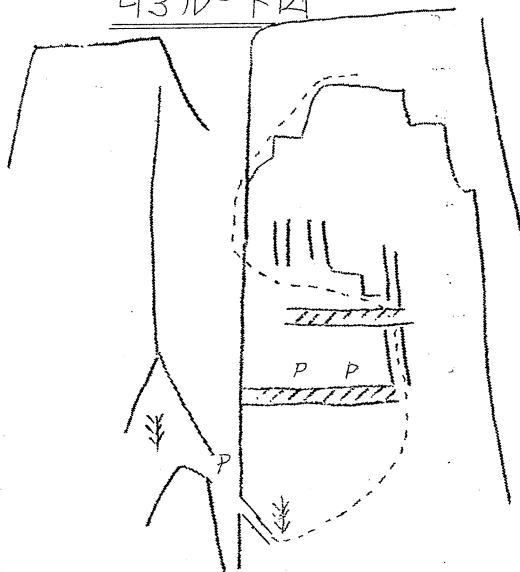
G₂ルート図



- ① 取付点
- ①-② クラック
- ②-③ クラック・バンド

京都府大の時報にG₂と云うのが記されてある。G₂とG₂の区別が明らかでないので、再検討の必要がある。

G₃ルート図



- G₁. ① チョッキストンの滝
- ② 取付点 ④ の松が見える
- ②-③ 草付バンド
- ③-④ 浮石の脆いトラバー2
- ④-⑤ 急な草付
- ⑤ ビレー点
- ⑤-⑥ かぶり気味のクラック ナイフリッジ
- ⑥ 岩峰のハイ松のあるビレー点
- ⑥-⑦ 岩峰をこえやさしいリッジ
- ⑦ ビレー点
- ⑦-⑧ 岩峰がソコソコした岩のリッジ
- ⑧ 終了点

7月19日 曇後晴

一面ガスの中を6:20に剣の頂上区きわめんとする登山者と一隊に一服剣に向う。一服剣には2:30人の人がいる。前剣を越えてoneピッチで門に着く。ルンゼ通しに吹いてくる風は肌寒い。門から取付までは急ながし場なので3人刻んで下るには慎重を要する。3m程のナヨックストーン滝は左側を下る。今日は昨日のようにギリシヨンでないのて岩は乾いていると思っていたが実際に取付けてみると昨日のギリシヨンのために岩は充分濡れている。我々は昨日ガスっていたのでG1への取付をわからなかったがG1への取付はナヨックストーン滝のすこし下のほうである。右側はスラブ、左側はバンドになっている。右側のスラブはク、80度よりもっと急かもしれない。左側のバンドをトップ横山、セコンド伊丹、ラスト菅の順で登る。取付は2.3m程の階段になっており、それから10m程は傾斜のゆるい小石のふりかかっている緩な登りであり、ほうようにして登る。途中にハーゲン2本あり、40mザイル一杯延びた前に馬の轡のようになった前があり、そこでビレーをする。それから階段状(階段状と云っても右、左と足の踏む前まできまっており左右と出したら最後まで違った階段を踏まなくてはならない。)になった草付のバンドが20m、それから10mほどはバンドがなくなり、直松を持ってトラバースしてリッジを左側に廻り込む。廻り込んだところはかりーと右手にすこしかぶり気味のフラックがはしっている。ここにマビレー。フラックの方をハーケン、アブミ一本をたよりに突破す。ガスの切れ目から前剣が我々の上におおいかぶさる様に立っている。リッジ上のピナクルの右を回り、大きな岩の左下でビレー。ハエ松と草付と岩のリッジをたどってG1の頭の下でビレー。頭の下を左に巻き、がう場を登ると頭に出る。G1の最もいやな所と云えば階段状になったバンドからリッジを廻り込んでビレーをする前までの15m余りと考えてよいであろう。しかも常に落石に気をつけなくてはならない。朝飯を食ってから4時間余り経っているので登飯のクラッカーを半分食べることにする。G1の頭は縦走路より5m程上にあるが我々の早い登飯をけげんそうに見て行く。腹持ちも出来たしガスも切れ、天気が良くなりそうだし10時過ぎなのでG2も登る事にする。G2へは平蔵の頭への登りの縦走路から直松を越えてG2 G3の間のがしを下りG2の左手を登きカンバの木の間をトラバースしてG2の下に着く。次第にガスが切れはじめたが下をみると右俣や上の右俣、前を見ると大田連山がよく見るので高度感はある。5Mほど登った前に菅が落石を避るために岩陰に隠れ、我々はさらに5m程登ったすこしハング気味の前にやっと2人のビレー

の出来る場所を得る。G₂もG₁と同様に横山、伊丹、菅の順で登る事にする。G₂は中央からやや左向きにクラックが走っている。ピレー点はクラックの左側にあり登っているあいだはたえず落石になやまされる。ヘルメットを被っているので頭は大丈夫であるが落石がヘルメットに当たる音はいやなものである。クラックの左側を4m程直登しクラックを5m程登るとそろい石がつかみかさなっている。登る前にラストの管に4.5mの余分のガイルをピレー用にとっておくように云って登ったが索の定もろい石にしかたなく足を掛けた時、足の下が石が落ちもう一つ岩が足の上にとまっている。必死になって管に逃げるように云う。足にとまっている石を退けない事には登られず、又手でその石を退ける事は出来ないで管が逃げたのを見届けてから足の石を外すと2.3個の石が谷へ向って落馬行った。そこから東大谷にしては珍らしい硬い岩に出る。1m余り右手にハーケンがあるがそのハーケンを掴むのは一仕事である。このハーケンを掴んで右側に渡り、そのハーケンを握って2m程上のハーケンを強引に掴まなくてはより多くの落石をすることになるであろう。まもなくテラスに着くがそれより上は草付と岩と直松のG₁と同様な所であるので特に書く必要はないであろう。

G₂に他のルートをとるとするならば最初のピレー点からすこしハンク気味になったところからすこし石に捲いて登ることも出来ると思われるが我々は登ってないので断言する事は出来ない。G₂はクラックの左手は岩が軟く右手の岩は硬いと云える。G₂を終って12時過ぎなのでついでと云っては悪いかも知れないがG₃も登る事にする。ガスもほとんどなくなりすこし暑くなり出した。G₄を下りG₄のピナフルコルに下りG₃を見る。しかしG₃の取付は見る事が出来るが、しかしルートはすこしG₂側を向いているのでここからは見る事は出来ない。

コルからG₃とG₄のルンゼを20m程下ると道に出る。道のG₄側の直松にピレー点をもうける。G₃もG₁ G₂同様にトップ横山、セカンド伊丹ラスト菅の順にで登る。道から赤旗の筋人であるハーケンにカラビナを懸してリッジを右側に廻り込む。廻り込むと右上に向かって2.3mの間隔をもってハーケンが打ってある。しかし岩がやわらかいのと所々アイスハーケンを用いてある。岩は全部、信用して持つ事は出来ず、バランスとガラガラ岩にフラットにおく足とハーケンしか信用することは出来ない。30m程で向う側のリッジ手前の直松帯にピレー点を得る。この直松地帯はバンドになっている。そしてこの直松帯を2.3m左に直松帯をトラバースしてクラックを6m登ると第二の直松帯に着く。直松帯をすこし左に行くと直上ルートを見

出す事が出来る。第一の直松帯から100m程の前である。2m直登するとバンドになる。3m程バンドを登るとバンドに覆いかぶさるように岩が突出しておりその前後にハーケンがある。後のハーケンから右に突出した岩の上に登る。登ってからハーケンを打ち、すこしハング気味の2m程の登りになる。そこはもう終了点である。しかしそこにはわずかにきいてある心細いハーケンが一本あるだけである。トップの横山がそのハーケンをもって乗越そうとしたその時ハーケンをぬけてセカンドの頭の上にまともに落ちる。ヘルメットをかぶっていたので太したことはなかったがやはりまともに頭にきたのでは

やりきれない。トップが打ったハーケンがきいてあり、ビレーをしたのでとまったのか、ヘルメットにあたったのでとまったのかわからない。しかし打ったハーケンがきいていたのはたしかだ。やはりG₁ G₂ G₃の連続となったので疲れが出たのであろう。しかしトップを止めた時下を見まわった。足元は1000m程切れていたのである。快晴となった今、スリバネのようになった下にすい込まれそうである。覆いかぶさった前を右に出ずにバンド通しに這うように通過して登攀終了点に立つ。バンドは50m程で20°ほどの傾斜で終了点に達している。終了点から20m程直松帯を登ると縦走路に出る。

<時間記録>

A.C.6:20 — 前朝 7:00 — 門 7:08 — 7:25 — G₁取付 7:45
— 終了 9:50

G₂取付 11:10 — 終了 12:05

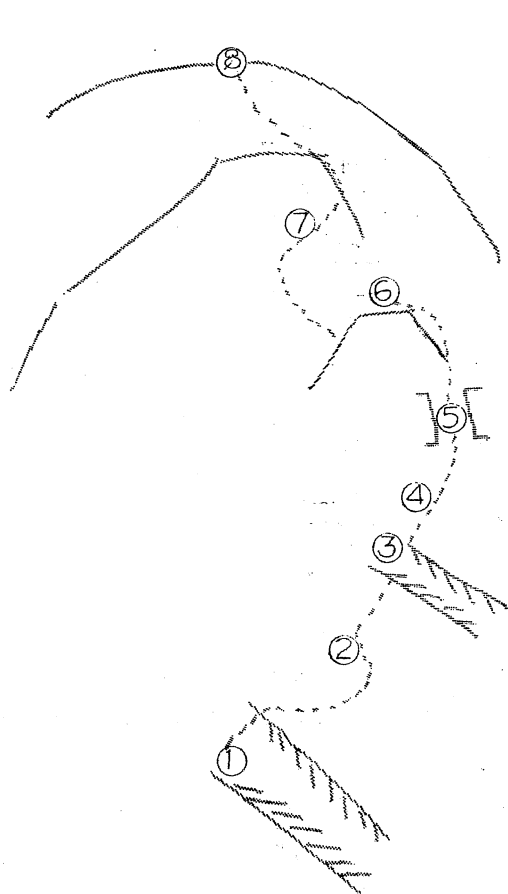
G₃取付 13:35 — 終了 15:40

A.C.着 16:50

最後にG列の総評として岩が非常にもろく、落石に最善の注意をつくさなければならぬ。いつどこから落石がくるかわからないのでヘルメットは絶対必要である。沢に入った時は特に気をつけなくてはならない。第二にG₁が5ピッチ、G₂が2ピッチ G₃が3ピッチという少ピッチであるのにもかかわらず3つの登攀目的をきめて2つ3つの連続登攀をした方が面白いのではないか。第三には非常に高度感があると云うことである。3ルートともスリバネのように千数百米ほど足元から切れているからである。

前剣西壁

菅 義弘



- ① 前剣沢に合っている小さな沢
- ② 草付のフェース
- ③ ガリ-状の草付
- ④ 草付と浮石
- ⑤ 2m位のナムニー
- ⑥ 一枚岩にもたれみかっただナイフリッジ状の岩峰
- ⑦ ハング気味のスラック
- ⑧ 縦走路

＜メンバー＞ L 菅、義弘（E3）

横山 洋（J2）

＜時周記録＞ AC 8:55 前剣大岩 9:20 取付 10:30

1P 11:00 2P 11:20 3P 12:01

4P 12:15 5P 1:10 6P 1:32（登攀終了）

空の状況が悪く、P時迄まで時間待ち。西尾根の時と同様、前剣沢を下る。取付より下り過ぎたので、登り返して、下部なら取付く。上、下二段に分れている壁の下部はハイ松の混った緩傾斜の外傾したフェースで大して悪くない。そのフェースを登り切ると、頭上に、東大谷にしまは、めずらしくすっきりした岩壁が現われる。岩は外傾しているが、全く浮石がなく、フリク

ションがよく効く。上部ピッチはコンティニアス、次に2M程のテムニーを通り、一板岩にもたれかかったナイフリッジ状の岩峰に馬衆りの型でエーテル式に登っているの、ラストがビレー点を通り越してトツアに立つ。ナイフリッジをトラバースして、草付を越えマビレー 幅40~50CMのテラスである。5ピッチ目 ハンタ気味のスラブをバランスでトラバース、高度感満点の所である。このトラバース、少し凸角気見で、下かストーンと切れており、凸角をトラバースした向う側が見えないので、ちょっとためらった。勇気を出して凸角の向う側へ曲り込むと、そこは安定したテラスであった。すぐ目の前の、岩蓋の付いた一枚岩があり、それを直登すると思いがけずも縦走路に出た。

駒草ルンゼ

横山 洋

7月27日

〈メンバー〉 菅、横山、

左侯が早月尾根へと大きく左へ曲る所へ、大きな谷が二つ並行にはいつてきている。その右手の谷が駒草ルンゼである。

先日、我々は右侯より、左侯、早月尾根へと遠足を行っているの、本日のアタックも駒草ルンゼ出合いまでのアプローチで貴重な時間をかせぐことが出来た。

AC6時30分出発、中侯本谷の出合いを時、左侯最下部の滝の高さまで先日は大変な苦勞をしたのであるが、左岸の石置の様な所を、へつる程度で簡単に左侯の雪渓を踏む事が出来る（約50分）。左侯をつめること約40分で駒草ルンゼ出合い（9時30分）。出合いの雪渓の状態は悪く、今にも崩れ落ちそうである。中尾根側の草付斜面より、わずかではあるが水がにじみでている。時間的には少々早い気もするが、多分ここが最後の水場となるだろうと予想してエッセンにする。

取付点から全くの滝である。最初の滝は左上に走りテムニー状で高さ30メートルはある。取付附近の雪渓は大きく崩落したクレバスで滝に近付くのがさへ無理（不可解）の様に思われる。左岸の中尾根をへつり、滝を乗り越す事も考えたが、逆層のスラブで水がしたたり落ちているのでこの方もあきらめる。結局右岸の三本槍尾根を二番目の滝の上部まで高まきしようとのでと。

10時10分、セット終了して出発。約半ピッチコンテニアズマガラ場をつめると、いよいよブツシュコギ。昨日の中尾根の下半と比べると、あまりいやなブツシュでもないが、岩とミックスしているため、ガイルをはずす事も出まらず、めんどうである。ルンゼを見失なわないように注意しながら登ると、どうしてもいやなトラバースを強いられるものであるが、途中丁イゼンでも着けたくなる様な草付のトラバース（11時30分）やガラ場を通過して12時10分、二番目の滝の上部に出る。一服しながら、滝を見下ろしてみようが、雨でも降れば、すごい勢いで流れ落ちるのであろう。ホールド、スタンスは全く見つかからない程つるつるにみがかれている。さもないよ本番だとファイトを燃すが、ルンゼの上方は壱も割合に広く、明るいうちで、多少左へ曲がっている。これでは普通の谷と変らないうちが夜けた感がないではなかったが、コンテニアズマ約20分ガラ場をつめると谷は急に細くなり水分を含み足場がズルズルと壊れるようなゴルジュに出る。（12時30分）、足場に注意しながら来り越すと谷は一段と暗くなりジメジメとしたコソア状の巨大な滝と出会う。正面には人間なら2-3人は入れるような洞穴があり、底から、ポタポタと水が落ちてくる。左手と言えば高さ40メートルはあろうか、一枚岩の磨れぬいた見事な滝が殆んど真直ぐに急登している。上からしたたり落ちる水滴をヘルメットに溜めながら一服する。

萱、洞穴より一段上のテラスでヒレー。横山登攀開始（12時30分）。右方に半身がやっと入る位のナムニーがあるが、水に濡れているため、フリクションあまり効かず苦しい。

ナムニーを約5メートル登るが、セヨックストーンのため正面に出ることを余儀なくされる。ナムニーに半身を入れ、変なバランスでリスをこがすが、ハーケンがまともに入るのではなく窮地に追い込まれる。しかたなく左手のホールドを正面に求める。やっとの思いで指の先だけがかかるようなホールドを見つけ全身のフリクションではい出す。約10メートルはホールド、スタンス極めま小さく泣かされるが途中にしっかりしたピンを一本打ったので、安心感はある。1時40分最上節より一段下のテラスでヒレー。この滝より上節はまるで中尾根側壁がルンゼの上におおいかぶさったようになり、谷壱も急激に狭く傾斜も急になる。滝も二個程出会うが、小さく問題はない。ただ、岩のもろさは、東大谷でも随一であろう。2時10分アレートにより、二分された二股に出る。一つは大きく左へ曲がっている。我々は丁度真中のガッテルに取りつく。最初横山がトップ。崩壊しきった壁を、突破することが出来ず直ぐと代る。人間の身体ぐらいの石が落ちる。小さいのもどんどん落ち

る。つくづく東大谷の岩のもろさを知らさせる。まるで餌の歯のようなリッジをホールド、スタンス 慎重に確かめ約ニピツテ行くと、右手が急に切れ落ちている。右下の谷には、幅の広い数ノメートルもある滝があり、尾根に乗りあげた幸運を話し合う。カラ場をくずしながら、すべり落ちるようにしてこの麓の上に出る（2時50分）。このあたりから、谷もだんだん開けだしガイルの必要もないので一応サブに入れる。カラ場をつめる事約40分。左手に、三本槍と思われる岩峰を見上げるが、その側壁に析れた様な、岩峰が一つ、三本槍にもたれかかっていた。何とも奇妙な光景である。三本槍尾根へ出ようとあせるが、針のような岩峰が無数にあるため、明確なルートはわからず下から見ると、丁度シン頭のように見える中尾根の岩壁に消えている。ルートを適当に、とりなから、どんどんゼツテをあげる。この辺りは、色々なルートがとれるであろう。目の前に、急な砂岩の斜面が現われるが、これら足をすべらしながら登りきると 昨日通って見覚えのある中尾根である。（4時27分） 早月尾根よりは、かつて知った我々の道である。菅、横山とも黙々と歩く。二人とも、この合宿の最大のバリエーションであり、駒草をやるために、苦勞した色々な事や、駒草により、我々の意志を貫いた感激をかみしめていた。

夏山合宿 東大谷パーティーの反省

私達のパーティーの反省として上げられますことは、

- ① リーダーの精神的抱擁力の不足
- ② 事前のサーフトの計画に対する理解の不足
- ③ 通信計画の甘さ
- ④ メンバーの登攀対峙の理解の不足

が上げられます。

上の4つが原因で、ミノ窟、東大谷に立て続けに起ったアフシデントに対して、気がくじけた状態になり、極度に心に動揺を来し、一時登攀停止の状態にまで落込みました。以後、落ちつかざるため、メンバーを二股へ下らせた事も ② が原因であったと共に、リーダーの反判の甘さであったと思っております。この時「逃げた」との誤解がミノ窟パーティーに起った事、これは ③ が原因であったと思っております。

次に、私たちパーティーが起したスリップについて反省してみます。

最初に、スリップが起った時の条件はどうであったか、をみてみます。

- 条件 ① 気象 晴天無風
② 時間 余裕有り
③ 体力 “ ”
④ 困難さ 充分こなし得
⑤ 気力 充実していた

以上の条件でどうしてスリップが起ったかと考えて見ますに、⑤ 以外にはこのスリップの原因を考えられないと思います。

気力の充実、そのような幸に含まれる。頗れ、これで最後だ。等々、安心感の様な物が原因ではなかったか、と考えます。

⑤以下、それに含まれる様な精神状態にある時、リーダーはもち論、メンバー同志であつても、注意を喚起する。「言葉」が必要であつたと思います。トップはトップ、セカンドはセカンド、ラストはラスト、関係ないという様な状態が、一瞬たりとも登攀中に有つてはならない、常に後続の者は先行の者の状態に注意しておかなければならないと思います。これは、私たちの場合だけでなく、他の場合にも言えると思います。

幸い、セカンドのビレー、アイス、ロック2本のハーケン、ナイロンザイルが切れなかったこと等で大幸には到らずにすみましたが、これは僅が良かっただけで、反省すべき事であつたと思っております。

忒奈苦奈に人が死に、私達も三ノ惑も二股のパーティーも、それを目撃したとあつて、ある程度異常な雰囲気の中でこの合宿が行われた事を最後に付け加えておきます。

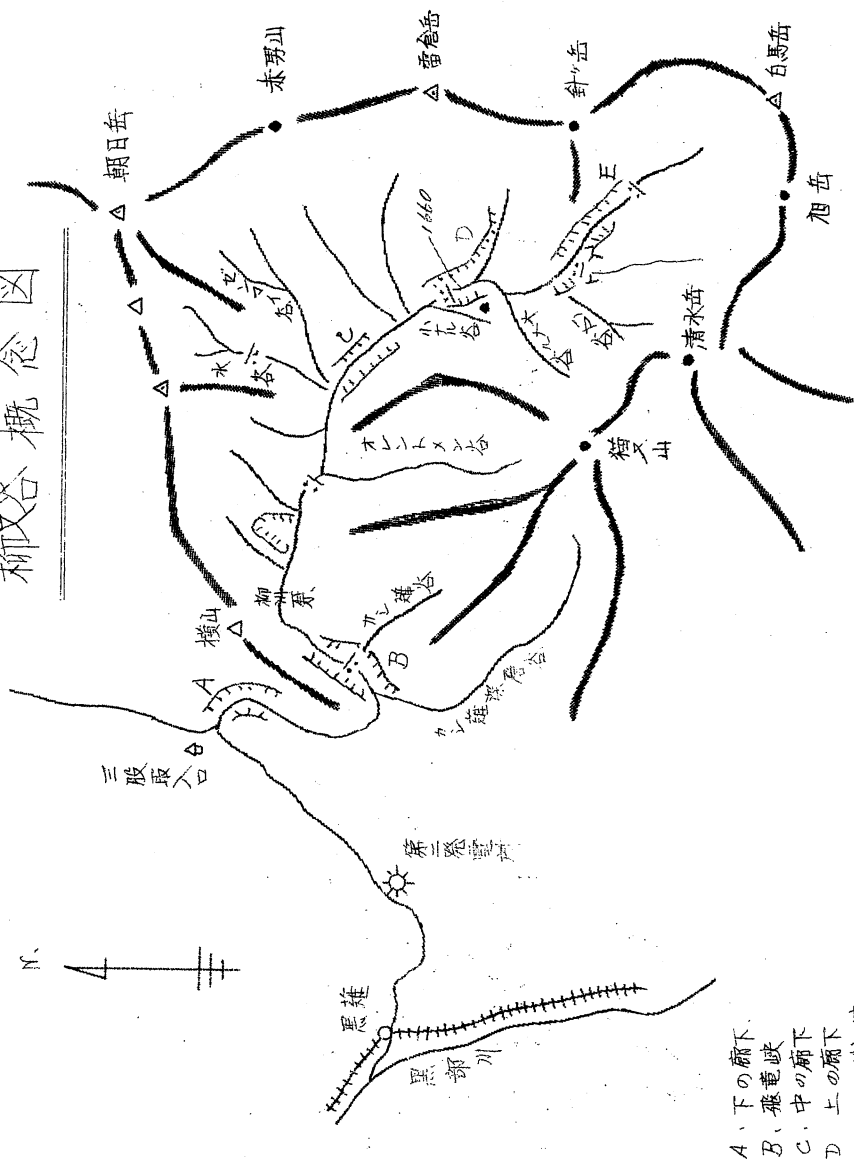
(菅 義 弘 記)



報告Ⅳ — 柳又谷廻行 —

1963年8月1日～13日

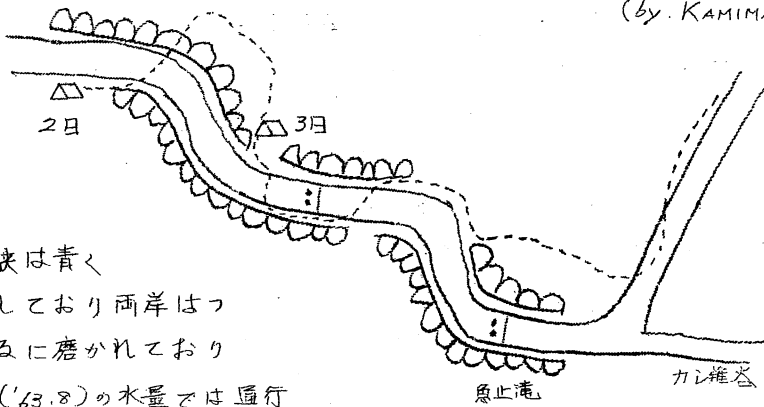
柳又谷概念図



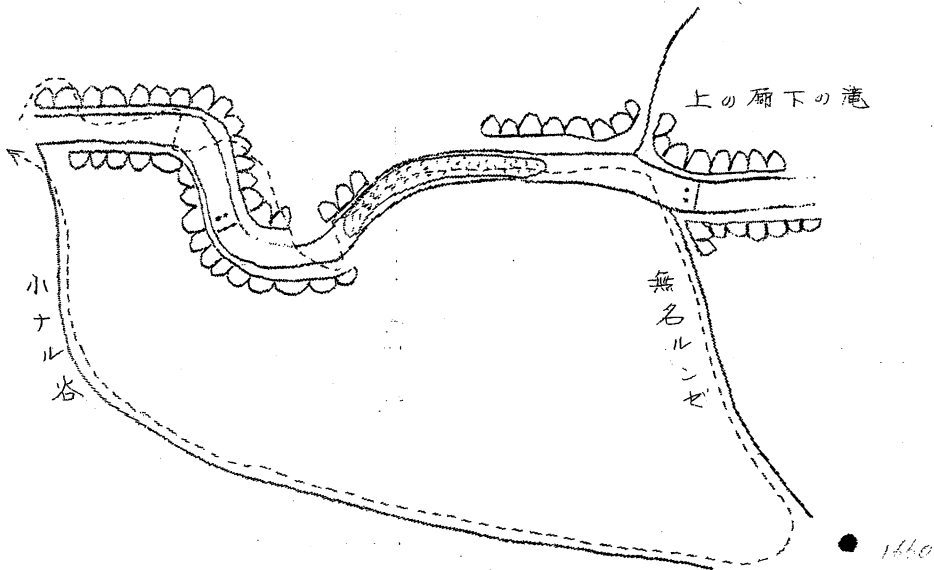
- A. 下の崩下
- B. 飛竜峡
- C. 中の崩下
- D. 上の崩下
- E. クラギキ

＝ 飛竜峡, 概念図 ＝

(by. KAMIMAE.)



飛竜峡は青く
苔むしており両岸はつ
るつるに磨かれており
現在('63.8)の水量では通行
不可能と思われる。



＝ 上の廊下的一部分, 概念図 ＝

(by. KAMIMAE.)

黒薙川 (柳又谷) 溯行

黒部川最大の支流である黒薙川は、全く性質を異にする姉妹川、柳又谷と、北又谷とからなる。前者は白馬岳西方の大カール地帯から、北又谷との出合まで、途中2、3の広洞原をもつのみで、水量も多く、逆落しの観がある豪快なものゝ如き谷である。後者は犬ヶ岳に源を発し途中いくつかの滝で、高度を落とし、その間に美しい澗を形づくる実に優美な趣をもつ谷である。

柳又谷を詳しく説明すると、飛竜峽、下の廊下、中の廊下、上の廊下によって構成されている。我々が溯行計画を立てるにあたって、京大が1960年7月に、飛竜峽、下、上の廊下を逃げ 英師義美氏 上の廊下を逃げている為、我々は完全溯行を目的として、特に飛竜峽、上の廊下はぜひ溯行したいと思った。装備、食糧は全員平均5貫に押え、又去年の溯行パーティの体験から、テントのフライを持たずに行くとか、ナイロンの袋を多く持って行った。

柳又谷 溯行パーティ

〈期 間〉 8月1日～8月3日

〈メンバー〉 L、袖前、正博 森本 全彦 井本 洋
塩崎 将美

前半定着台植は剣岳に於いて、各登攀ルートをアタックし、無事終了。溯行パーティは富山に下り、ガソリン等Cを買う。これからの溯行にそなえ、栄養を取ろうと大食い合戦。富山城公園で野宿、水に浮ぶキスリングの夢を見る。

8月1日 ○

富山発 6:11 — 8:15 宇奈月 11:6 — 黒薙川 11:40 — 第一発電所に 7:00 — 二股 13:15

二股への道は荷車が入るような道で、前クトンネルがあり、ヘッドランプの必要がある。二股には、関西電力の水測所があつて、そこの人の話では、最近溯行パーティはよく来るが、殆んど、2、3日で戻ってくると云う。柳ヶ原に行く返に大きな滝があり、そこは高捲きも出来ないとのことである。大きな滝とは、飛竜峽の辺のことだろうと考えられる。殆んどのパーティが横山峠から柳又谷に入っている理由が察しられ、俄然ファイトを燃す。

8月2日 ○⇒○

二股発 6:10 — 広川原 8:40 — カシ雄深層谷 出合 9:30 — 飛竜峽入口 11:40

二股から5分も行かない内に、渡渉し、これからはS字峡になっており、
重籠6回渡渉。この間3回アングアイレン。水温は0度に近く、日も照らずガ
タガタブルブル。糸蘆谷の出合から川中がせまく、流れが急になってくるの
で渡渉するのがヤバクなってきた。飛竜峡へ丹まで3回渡渉。入口で昼食を
とり、御前、井本で偵察。左岸に渡り50Mほど行くと廊下状になっている
ため、深く、流れが速い。右岸に渡れば行けそうなので渡ろうと思うのだが
例の如くで飛び込むしか方法はないのだが、押し流されセカントに引っぱり
上げてもらう状態だ。しかたがなしに行動はこれまで。行動中に摂った蛙の
バター焼が特別食。

8月3日 ○

今日は谷の長さ、500M程度しか進み得ず。昨日の渡渉の前でかなり時
間を費す。今度は直線に渡らず、流れを利用して泳ぎ移った。昨日よりも今
日。この精神で-----。

右岸に渡ったが、行けそうにみえた所は藪な草付で行けそうにないので、
高捲きとでた。高捲きにするのもいいが、急なルンゼでそこかしこに灌木が
あり、キスリングにひっかかり泣かされた。登子のことも、トラバースする
ことも出来ず、やむなくアングアイレンして下降する。通行してイマヤバイ所
が出来たら高捲きだ。と簡単に考えていただけに-----。川岸に出てから
適当なテントサイトを捜す為に偵察を出す。左岸に渡る為にアングアイレンし
て竜壺を泳がねばならない。この地点から3回渡渉して右岸に出ると、又廊
下状になっており、その中心部には2.3Mの道があり、通行不可能。だが右
岸ぞいに、高捲きをする。前方に、柳河原らしき大きな原を見出した。
偵察の結果、我々が高捲きをした所が飛竜峡の確心部だと推測された。西岸
は青く苔むして現在の水では、通行不可能と判断した。テントサイトは下
降地点にて設営。

8月4日 ○⇒●

テント発6:00 — カシ蘆谷出合7:50 — 柳川原入口8:20 —
大ナギノ0:45 — 昼食11:45 — カゴ谷の手前13:50

テントサイトからすぐに竜壺に飛び込むのだが、日も照らぬ為、決心のつ
きにくいものだ。縦走隊はいい等と馬知をこぼしながら飛び込む。壺は15
Mほどありフィックスレキスリングを渡し、右岸をそのまま10Mほどへっ
り、又ザイルを出して渡渉。この間1時間半。入水したままなので全くこた
えた。昨日の偵察地点まではかかたのに高捲きが出来た。柳川原と思っ
ていたが、本流は大きく、右に流れていたのだから、カシ蘆谷出合と解った。

全く、柳川原をまちがえるほどの広さであった。この辺は全体的に川巾が広く、渡渉も腰ぐらいで、楽しい渡渉すること。6回、柳川原水に着く。柳川原はさすがに広く、テントの張ったあとを見つける。数回の渡渉を重ねてオレントメン谷に着く。この間ガイルなり。皆腐れまきまか、大胆に渡渉する。出合から2回渡渉した右岸に設営。設営すると同時に雨が降ってきたのでテントに入ったのはいいが、フライ無しのため、雨もりがひどい。朝の渡渉前にぬらしたシュラフ。嫌な夜だった。

8月5日 ①

テント発 9:00 — カゴ谷出合 9:25 — 水谷出合 9:45 — ゼンマイ出合 9:50 — 中の廊下のナギ 10:00 — テント着 11:30

昨日の雨と、飛竜峠で偵察なしの行動が悪質なアルバイトとなったことから、中の廊下で振り返えすのを恐れ、偵察日とし、神前、井本、偵察に出た。昨日の雨を懸念したが行動にさほど影響を及ぼさなかった。中の廊下までは昨日の如く、川巾は広く、流れも速いというほどでなく楽な渡渉だ。中の廊下は、谷 体は大きいのだが大きな岩がそこかしこに露出してゐるために川巾はせまくなっているのが喜ばしくのも簡単だと思われた。入口からナギまでユケ所に滝があったが、どちらも左岸を巻くことの出来るものであった。これからこの程度のものだろう。と云う結論を持って帰幕。

8月6日 ①

テント発 6:00 — 赤男谷出合 8:20 — 上の廊下入口 8:35 — 入口から20Mの地点 10:10 — 上の廊下の手前 100M 14:00
ナギ(中の廊下)の所までは、偵察時の時間と、さほど ずれず行動することが出来た。昨日の結論の如く、大したことはなかったのだが、それでも中の廊下と云われている所、廊下の核心に入るにしがじ狭くなって来るのでびくびくしながら進む。廊下に入らなう時間半、前方が急に開け、明るくなったところが、赤男谷の出合だ。前方には、赤男山が雪倉岳と思われるピークが見え、それに連なる稜線がとまも美しい。白馬岳、近し。

出合から上の廊下までは広く明るい。上の廊下、それは全く、廊下と呼ばれるに相応しい。我々を拒絶するが如く、暗く小さな口を開けていた。川巾は2.3Mで流れも速く、水温もかなり低い。とまも長時間入水していることが出来なうだろう。入口から左前方(右岸) 10Mほどのところに岩棚がありそこから偵察を出すことにした。井本が入口から5Mほど下り、右岸にめたり、嫌な草付きをトラバースすること。15Mのその岩棚からガイルを渡しキスリングを滑り上げ、あとは井本に引き上げてもらふ様な槍打で行く。

最近は何、水の中に大きな岩があつて、その上に足をのせるのだが、流れがきつく、足が前に持っていけない。ガイルでひっぱつてもらうのはいいが、足が前に行かないものだから、前にたずれてしまう。そんな状態で30分ほど、水から上がった時には、全身がふるえまどうにもならない。この地点から上の廊下をみても、まさに廊下状になっており、15M迄まで直角に右に折れている様子。この先の偵察を出さねばならないが、まだふるえが止まらないので、井本、樫崎に行つてもらう。いやはや、朔行に入つて6日目、初めて水の硬しさを知る。偵察の報告までは、右岸を15Mほどへつり行くと浅瀬になっており、そこを左岸に渡ると、本流は右に折れて廊下状となつて右岸は草付き、左岸は完全なスラブ、行くとすれば草付きをトラバースするよりしかたがないだろうとのこと。廊下入口の広場で設営するために逆る。キスリングは流し、我々は、右岸の草付きをトラバース。水の中は恐い。

8月7日 ①

上の廊下、偵察、神前、井本、樫崎

廊下入口は右岸の草付きをトラバース。昨日の偵察終了地点まで時間はかからず。水温の低さが特に、気にかかる。左岸のスラブに、取付いたが、5、6Mも行つた所で断念、右岸に渡り、激な草付きをトラバース。フィックしても、キスリングを背ではいけない。トラバース地点からみると、直角に折れているところから、15M行くと滝が現われる。かなり大きなもので、5、6Mはあるだろう。滝からは、直角に折れて流れまあり、その間ずっと、廊下になっており側壁は10Mぐらいすると思われる。さで、トラバースを50Mほどして前方を見ると、かなりの距離にわたつて雪渓が見える。木のピンにして懸垂下降。大断地点から、右岸を50Mほどへつり行くと、さきほどの雪渓に出る。下から見ると、スノーブリッジになっており、雪渓の中央部には、ほんやりと光がもれている。雪渓の下に行くことは出来ないで右岸から雪渓にのり移る。下から見ていただけに、びりりながら500M行くと雪渓は切れまあり、そばの倒木をピンにして下降。ここから5、600Mは浅瀬になっているが、廊下状だ。廊下が少しは切れまいる所が左右から沢が入つて冪れおり、本流は又急に狭くなり、中央に滝があり、完全に通行不可能。この滝は10Mぐらいあり、上の廊下の滝と断定。左岸側は1660のピークの方にルンゼがあつたのでそのルンゼをつめる。ルンゼの切れるあたりからブッシュになり、1660のピークを右にトラバース。予想通り、小ナール谷に出ることが出来、下降。結局、上の廊下の滝まで行つたのだが、それ以上進むことは到底出来ないし、又、水量が多ければ、今日の行程として

も行けなかつたろう。我々にも小ナル谷から、大ナル谷に出て、本流に並
ぬしか方法がなからう。

8月8日 ○
8月9日 ○ } 沈没

天気予報で台風の接近を告げ、沢に入っても雨でも降られてはと云う老婆
で沈没。私々の装をかかれ、2日間とも快晴、快晴のため、今まで食量の湿
っていたのが、むせたり、くさり初め、ラーメン等は「ダンゴ」になってしま
う始末。快晴沈没とは嫌なもので4人の男が向にもせずゴロゴロしてい
るし、互いに遊をするでもなしにしているあのムードは異常だった。

8月10日 ①⇒②⇒③

テント発着：00 — 大ナル谷8：00 — 本流出合9：00 — 40分
偵察 — 発9：40 — リヤ谷出合12：10 — 無名の滝手前12：30
昨日の下降ルートの小ナル谷をつめ、1660のビナフル登り、大ナル谷
に出る。大ナル谷を下降して本流に出ようと思うのだが、本流との出合が
滝となっているため、しかたがなしに左岸のブッシュの中にもぐり込み、ト
ラバースして下降。出合の滝の左岸に丁度、ルンゼが上がっていたのでアン
ガイレンして下降。出合から偵察に出る。夕日のような雪渓があり雪渓す
たいた500M行くと切れており、すぐにお岸に移り、微ながら陽を50Mト
ラバースして又雪渓に移る。この周囲は、全く、大さきと云った感じで、
今までの廊下状等、信じられないぐらいの広さむ。雪渓の上を40分ほど行
くと、左岸にリヤ谷の出合が現われる。リヤ谷はかなり大きな沢で上流で2
つに別れているのが見える。リヤ谷の出合から左に曲ること50M、又右に
曲るとすぐに雪渓が切れると同時に正面に滝が現れる。この滝は上の廊下ほ
ど大きくはないが、軽荷でないといけそうにないだろう。雪渓の切れる所で
井本と偵察に出る。無名の滝、前後は川原が現われ、何とか無気味な感じを
与える。滝から100M行くと、中は狭いがかなり深い沢が左岸に出てくる
。沢の出合をすぎると又雪渓の上にのって500M行くと、前方に美しい
稜線が現われ、白馬岳らしいピークを見て、井本とニッコリと笑う。この滝
の前後がフラグリ峡だと判断して偵察を引き上げる。適当なテントサ
ンドがないようなので雪渓の上に設営。明日は白馬岳だ。

雪渓の下を流れる水音が無気味だ。

8月11日 ○
8月12日 ○ } 沈没

10日の夜から降り出した雨が、2日も降りてジトジトと降る。あと1日

で白馬岳を踏めると云うのだ。

上の廊下での2日間の晴天沈黙が痛い。全く判断の悪さと云うのが、リーダーとして悔まれる2日間であった。テントを雪渓の上に張った為、1日1日と周囲がひくくなって、30cmも下ってしまった。そんな状態であるのでよけいに水音が無気味に感じられ、たまらない。テントはもれてくみし、シュラフから衣服までずぶぬれになってしまい、シュラフの中には水がたまり水の中に居る様だ。同行に来たのだから、水等何んともないと云ってみただけで、つよがりに過ぎない。

8月13日 ○

やっと2日間の雨があがり、符望の晴だ。今日1日白馬へと表に出てみると、雨の為、水量がかなり増しており、10日の偵察時にもこれからの雪渓の厚さが気になっていたのに、キスリングを貫徹して行けるだろうか、心配になってしまった。テントサイドにしてもかなり下ってしまったのだから----- 本流進行を断念。

テイトサイドからリヤ谷出合まで戻りハヤ谷をつめる。前に見たように50分ほど行ったところで左右に別れており、それと同時にがら場となっている所を右へ、右へとルートをとる。清水岳へ上るつもりが右へとルートをとった為、柳又山の頂上につきあがった。頂上付近は人が入らない為か、高山植物が咲き乱れ、同行断念した暗い気持ちをご癒してくれた。本当に素晴らしいところだ。もう一度来よう。

一組、租田谷側を下り、白馬岳への縦走路につき上げるのだが、痛烈なブッシュ帯だ。だが、もつとこは縦走路、ブッシュ帯ぎの手に力が入る。トップが「キジ」を見つけたと思うと、縦走路だ。あと2時間で白馬岳。昼食をして、昼寝、メッケンの声で起される。13日バリの女性の声。鈴の鳴るような声。この声のイメージに合ったかどうかは-----。

白馬岳に向って出発。縦走路とはこんなにも赤きよいものと知らなんだ。白馬岳から柳又谷の上部が見えた時のくやしさ。天候さえよければ-----。

13日目にして同行は終った。完全進行の目的を果すことは出来なかったが、飛竜峠、上の廊下、クラグリ峠と、その一부분ではあるが、知っただけでも我々の喜びは大きい。柳又谷は大体に於いて断念のつかみよい。開るいところだ。

我々4人は進行の与えるべくすべてを満悦したことを確信する。進行万才。

(L.3、神前 正博 記)

＝ 研 究 ＝

ヒマラヤに於ける食糧

塩 路 晃二郎

序

ヒマラヤの様な異常な環境では日本人はより日本的な食事を
欧米人はより欧米風な日頃食べなれてゐるものを欲する様にな
る。日本人の食事には米を欠くことが出来ず欧米と比較して肉
、乳製品・油脂の量が少ない。したがって脂質、蛋白質（特に
動物蛋白）が少なく炭水化物が多く栄養的にアンバランスであ
ると言われている。いくら食べやすくてもこの欠点をそのまま
ヒマラヤ迄持っていく事はない。

我々日本人のヒマラヤ食糧は日本食の最も改善された又登山
食糧の原則に適した進んだものとなければならぬのである。

食糧準備の
原則

食糧計画の原則として次のことが言える。

1. あまり水分を含まず且廃棄物の少ないもの。
2. 長期間の保存を考へて食品の変形変質を防ぐために梱包に
意を用いること。
3. 入山後寒暖の差が激しいので出来るだけ温度の変化の受け
にくい食品をえらぶこと。
4. 軽量のものであること。
5. 嗜好に合ったもので単位重量当りの摂取可能カロリーの大
なること。
6. 調理が簡単で高地では沸点の低下を考慮すること。
7. 消化が容易で且消化に多量の酸素を必要としないこと。
8. 高地で食欲減退を起した時でものを温りやすく和風食を
多く取り入れたもの。

等である。

雪崩期の台
座の食糧計
画を基本と
した。

我々としては初めての海外遠征計画で未知のことが多く食糧計画を立てるにも色々とまごついたが日本の冬山や春山で食べなれている食糧に手を加えて改善したものにするという方針を立てた。

キャラバン食

キャラバン中は出来るだけ現地食を用い内地からは副食と調味料を持っていく程度にした。

途中の部落
で手に入るもの

途中の部落ではジャガイモ、ニワトリ、タマゴ等が手に入る。アドバンス キンブでは動物性蛋白質源や生野菜を得るのは困難だからキャラバン中に十分利用しなければならない。生野菜はカトマンスマタマネギ、ジャガイモ、ニンジン、ニンニク、トマト、キャベツ等保存が出来るかぎり購入しあとは内地より携行する乾燥野菜にたよらなければしょうかなしとされている。

生野菜について

野 草

山に入ってから食用になる野草としてビヤトー、シシマー、パーパルの三種類があり十分野菜の代りに使えるものである。

外 米

キャラバン中は現地購入の米を使用するか外米製く調理に工夫をこらす必要がある。

紅 茶

シェルバはそれぞれも英国人によって教育されているので毎朝昼、晩と紅茶を良く飲み紅茶は多い品に携行する必要がある。

優秀なコック
を雇う

キャラバン中の食事の出来の良し悪しはコックの優秀な者を雇うことが出来るかどうかにかかっている。優秀なコックなら味付け上手だしパンを焼いたりうどんを作ったりして献立に変化を与えてくれる。

サバティ、
フリ。

主食としてサバティ、フリ等を用いるがそのままでは我々の口に合わないのだからこれに副食とトレッサーを携行する。

その他現地食利用の方法は後述する。

ベース、キャン
プ食

ベース・キャンプの食糧としては登山期間を通してのキャンプで食事をする延人数は少数であり、且高地で救れた隊員の鋭気を養うキャンプと言う性格を考えて、かなりせいたくと思われる品でも隊員の口に合った且、高所には携行出来ないようなものを中心とし出来る限り変化に富んだ徳らない献立を準備すべきである。したがって長期間を考へるに連れ携行食の四穀物の種類を豊富にし現地産の新鮮な野菜や肉類は利用出来ないが豊

変化に富ます

大限に利用すべきである。

燃 料

又、ベース、キャンプで燃料を容易に入手することが出来るかどうかと言うことは、B.C.の歌立に大いに影響してくる。

今回我々の場合は入山期間が短かく（ノ5日）人数も少ないので主食はA、C食と同様にし、副食に変化を持たせるようにした。

アドバンス

・キャンプ食

最近インスタント食品の発達により、我々もそれを積極的に取り入れた結果、食糧の軽量化が可能になりふたんの積雪期の合宿の食糧を主体としこれに若干の質的改良と変化を与えて、長期使用によるあきを防ぐようにした。

パッキングも4人2回分をノレーションとする。

高所影響に
よる食欲不振

アドバンス、キャンプの食糧として問題になるのは高所の影響による食欲不振である。マヤラハン中、B.C.では実に美味しくたべられた物もノドを通らなくなるものもしばしばある。又ちよつとしたこと、例えば缶詰類の持つ特有の臭気等が2倍、3倍に拡大され、食欲不振に拍車をかけることがある。

最も好まれるものは味の付いていない白いごはんや缶詰類でもカニカン、サワカン等でソーセージの缶詰等は味が付きすぎて食べられないようだ。

A.C.で評判
のよい食品

高所影響が顕著に現われるに従いその人の嗜好が強く現われ一番良く食べられ評判の良いのは缶詰類、ウニ、焼ノリ、タワアン、ラッキョ、紅しょうが、梅干、奈良漬等の漬物類とノリやアサリ等の佃煮類であったと言うことは注目し得る。いくら日常生活が洋風化されても5000mを越す高所にあつてはバター臭い食品よりも和風食に対する好みを強くし、又それが一番ノドを通りやすくなる。蛋白だ脂肪かたと言つても食べられなければ何にもならないわけである。

栄養面から、
糖質の効用

これ乳酸素の少ない高山では糖類の摂取が強調されて来た。それには糖質の燃焼には少量の酸素でエネルギーを供給し、運動時に優先的に利用され筋肉のエネルギー源としてもっとも能率が良いと考えたからである。

最近脂質の生化学的研究が発展するにつれて必須脂肪酸（*essential fatty acid* = E.F.A.）の持つ特殊栄養学的電

必須脂酸の効用

義が解明されて来た。これらは身体の組織細胞の構成さらにはその正常機能の遂行に大きな役割を果している。具体的にその働きをあげてみると、生体諸組織の酸素欠乏に対する抵抗力を保ち、心臓の筋肉は必須脂酸を多量に消費し、心筋活動のエネルギー源として大きな意義を持っている。水分の毛細血管あるいは細胞膜透過性を正常に保つ作用がある。ストレスに対する抵抗力に関係があり、寒冷ストレスに対し抵抗力を増す。必須脂酸の欠乏で赤血球の抵抗力が減弱する、不感蒸泄が異常に増加する。成長が遅れる。アミノ酸は十分に補給されても必須脂酸の補給が十分でなければ血となり肉となり得ない。必須脂酸は肝臓に対する負担が少なくリトン生産量も多い。と言う事である。

ヒマラヤ登山のような異常条件下では必須脂酸のように生体にも利す不可欠のものは十分積極的に取るべきである。

これらは一般に植物油である胡麻油やサフラワー油に多く含まれている。特にサラダ油に精製したものは味もあっさりとしてその上抗酸化剤として、ビタミンEが入っているため凍傷の予防に効果がある。必須脂酸は加熱すると破壊されるので出来るだけなまめ食べた方がよい。利用法としては野菜にかけたり、チヤパティにつけたり、スープに入れたり、ごはんにかかけたりしてキャラバンから最高キャンプ迄苦にもならずに食べられるものである。

凍傷予防効果

利用法

京大の例

京大のサルトロカンリ遠征の時の脂質の摂取量を例にとると1日/人20~30gサラフオイルを出来るだけ熱せずに食べる。バター1日30g使用する。スナックとして大豆レンゲンを1日5g飲み、1人1日の脂質摂取量を70gとし、成功している。

以上ヒマラヤ遠征に関して食糧計画立案するに際し原則的な事を述べたがその他気を付けなければならない点を挙げてみる。

キャラバン中に栄養を十分にとる。

- 高度も低く身体の調子の良い時に出来るだけ栄養を取っておいた方がよい。キャラバン中に消費してしまうのは馬鹿げたことであり、せむたくに買って食べると更にはたいては

金額にもならずキヤラパン中は積極的に栄養を摂取すべきである。

ブドウ糖について

- 紅茶・ジュース類は砂糖だけでなくブドウ糖を用いる。これは水分を取る時カロリーも一緒に摂るのは合理的であるしそれにブドウ糖は甘味が少ないので大量に使用することも出来る。

ハイゼックスについて

- クラッカーをハイゼックスで直接包むと変な匂いが移ってあまり食べる気がしないと言う事である。これはクラッカーの脂肪分が輸送中の高温のため変化しそれがハイゼックスの成分と微妙に作用し合って出来た匂い(カソリン臭い)と推察される。

温度差

- 携行食品は熱帯地帯を通過せねばならず高温に耐える必要があるがそれ以上に山に入ってから昼夜の温度差が激しいので温度の変化に耐える必要がある。

最後は、ヒマラヤでの食糧大問題である高所に於ける食欲不振に対する問題であるが、これに対してもレーションの種類を多くし我々の口に合った和風食を数多く組入ると言うことであると言える。

現地食品の利用法について

(1) 米

外米であって炒飯に最適である。普通は御飯に、朝食にはおかゆとして利用する。

(2) 小麦粉

上質小麦粉である。マイタは真白でパン、うどん、プリ、キャバティ、ケーキ、キョウガに使用。アタは並質の小麦粉で色が黒い。プリにすればマイタより香ばしい。

(3) 押 麦

ケユラーと言っマシエルバ隆の昼食であるが油炒したもの是我々にも非常食や昼食として十分使用できる。

(4) ムシンドム

橙色の固い豆でドロドロになる迄炊いてポタージュ状にして使用する。

(5) ギー

黄白色の少しブツブツしているラード。スープや炒めもの、揚げもの、何でも使える。カトマンズで売っているのは牛や水牛から作ったもので、興地のケベツタンは羊から作る。

(6) 鶏・卵

鶏一羽4~5ルピー。水炊きにしたリ、油で揚げたり ジャ

ガイモやカリフラワーと一緒に煮込んだりする。卵はノッケス〜3ルペー。オムレツ、白玉焼き、用途は広い。スどこでも豊富に手に入る。

(7) 香辛料 ハイキラスは唐がらし、ニンニク、ショウ油、味の素、塩を混合したもの。シエルパ達がよく使う。

(8) 塩及び砂糖 塩は岩塩である。十分役に立つ。砂糖は黒砂糖状のものを売っている。

(9) 野菜 カトマンズには豊富にある。タマネギ、ニンニク、トマト、キャベツ、カリフラワー、ニンジン、ジャガイモ、エンドウ豆、しょうが等である。総体に小粒である。

(10) その他 紅茶、酢はインドからの輸入品、川魚の干物は木衛生である。

以上

Ganesh-Himal Expedition 食糧献立原案

(担当、武田、堀路、水渡、柏、堀崎)

キャラバン食献立表

	品名	回数	
朝食	プ リ	7	タマゴ焼、フライドポテト、ハネミツ、紅茶、サラダオイル、バター
	ラーメン	3	タマゴ焼、フライドポテト、サラダオイル、バター、コンソメ、タマネギ、千切、高野豆腐、
	チャパティ	2	イリタマゴ、フライドポテト、ハネミツ、紅茶、サラダオイル、バター、ギー
	オカユ トースト	2 1	生タマゴ、花ガソ、漬物、佃煮、 タマゴ焼、野菜サラダ(OR 野菜イタメ)、紅茶
昼食	プ リ	8	サケ缶、チョコレート、サラダオイル、バター、ジャム、チーズ、ジュース (ギー)
	パ ン	2	チョコレート、チーズ、ジャム、レーズン、ジュース

	品 名	回数	
昼食	クラッカー	5	A、B、C の昼食を使用する。 ジュース
晩 食	ヤキソバ	4	中華メン、キャベツ、チキン、ビーン、タマネギ、コンビーフ、軟物、漬物、
	ヤキメシ	4	4チャーハンの素、キャベツ、タマネギ、グリーンピース、イリタマゴ、ヤク肉、米、サケ缶
	野菜イタメ	4	チキン、カリフラワー、ジャガイモ、キャベツ、コンビーフ、チキンスープ、コンソメ、タマネギ 米 サラダオイル、(牛肉大和煮)
	野菜サラダ	3	カリフラワー、キャベツ、トマト、フライドポテト、チキンとビーンの煮付、サラダオイル、カニカン、ポタージュ、米

ベースキャンプ食献立表

	品 名	回数	
	オジヤ	4	ㄨ米、ミソープ、コンビーフ、サケカン、王怒、タマゴ、カツオ節、グリーンピース
	オートミル	1	オートミル、スキムミルク、大和煮、アスパラガス、タマゴ
	中華ソバ	2	中華メン、王怒、ホウレン草、千えび、高野豆腐、バター、ヤク肉、メザシ、カニ、コンソメ、グリーンピース、
	ミソ汁	4	ㄨ米、ミソープ、サンマカンズメ、グリーンピース、ワカメ、タマゴ、王怒、
	福島ラーメン	2	福島ラーメン、王怒、ホウレン草、キャベツ、千ダラ、フレーク、千えび、高野豆腐
昼 食	ガルバルディ	7	ガルバルディ、ヨウカン、チーズ、チョコレート、氷砂糖、2回に1回の割合でカンズメ、ジャム、マヌレード、
	ソーダクラッカー	6	ソーダクラッカー、ヨウカン、チーズ、チョコレート、氷砂糖、上乾に同じ
	バタークラッカー	6	バタークラッカー、ヨウカン、チーズ、チヨ

	品 名	回数	
昼 食			コレート, 氷砂糖, 上記に同じ
	ランチクッキー	7	ランチクッキー, ヨウカン, ケーズ, ケヨ コレート, 氷砂糖, 上記に同じ
晩 食	マツタケメシ	1	マツタケメシ, サケ缶, タマゴ, 大和煮, 玉 葱, ウィンナー,
	スパゲッティ	2	スパゲニー, 玉葱, ポタージュ, ミンチボ ール, タマゴ, ホウレン草, アスパラガス, グ リンピース
	焼メシ	2	メ米, 玉葱, グリンピース, ケーハンの素, フレーク, コンソメの素, タマゴ, ラード
	グラタン	1	メ米, マカロニ, メリケン粉, バター, 干え び, 玉葱, シイタケ, サンマ, グリンピース, オイルサデー
	カレー	3	メ米, カレーカン, 玉葱, メリケン粉, ミンチボ ール, グリンピース, ジャガイモ, バター
	ハヤシライス	2	メ米, ハシカン, 玉葱, メリケン粉, ミンチボ ール, グリンピース, ジャガイモ, バター
	マッシュポテト	2	メ米, マッシュポテト, タマネギ, コンビーフ グリンピース, サンマ
なお朝晩には毎日必ず梅干, ラッキョウ, 福神漬 等漬物佃煮類がつきます。			

A.C食献立表

	品 名	回数	
朝 飯	ミソ汁	5	メ米, ミソープ, 乾煎玉葱, キタラフレーク
	ラーメン	3	中華メシ, コンソメの素, 乾煎玉葱, 干えび 高野豆腐, サンマ, バター
	オジヤ	4	メ米, ミソープ, コンビーフ, サケ缶, カツ オ節, グリンピース, アスパラガス
	福島ラーメン	2	福島ラーメン, 乾煎玉葱, 干えび, 大和煮, キタラ

	品 名	回 数	
昼食	4人/4日分		昼食はB.C昼食と同じ。
晩 食	カレー	4	キンケイカレー、ㄨ米、グリーンピース、カニカン、カタクリ、コンビーフ
	マッシュポテト	4	ㄨ米、ポタージュ、マッシュポテト、コンビーフ、乾燥玉葱、サンマ、バター、グリーンピース
	ハヤシライス	4	ㄨ米、キンケイハヤシライス、ミンチボール、グリーンピース、カタクリ、大和煮
	ラーメン	ㄨ	中華メン、コンソメ、乾燥玉葱、干えび、高野豆腐、バター、サンマ

- 飲物は適当にレーションを粗み各自好みのものを飲めるようにする。
- くダモノのカンズメも適当に配分する。
- お菓子は重量の加減で制限する。

~~~~ 8000m最後の峰 ~~~~

(The ascent of shisha pangma)

By Chow Cheng
訳 柏 敏 明

1964年5月2日、北京時間の10時20分、中国登山隊の最後の1人が、南部チベットにある未登の Shisha Pangwa (8013m) の頂に立った。

それは世界の登山史上に輝やくスツの偉業だった。その一つは世界に残された最後の8000m峰を征服した事であり、もう一つは8000m峰の頂上に1つの登山隊がかつてない多数の隊員を送ったと云うことである。今度の、shisha Pangma の隊員はすでに、若々しい中国スポーツ界の歴史に於いて、1960年5月世界最高峰である Mt. Chomo Lungma を北面より征服した光栄あるページを残している。

フランスの Maurice Herzog 隊が1950年ネパールの Annapurna (8078m) を征服して以後、10余座に及び8000m峰に対して一勢攻撃が開始された。世界の最高峰である Mt. Chomo Lungma (8848m) は1953年 Sir. John Hunt の引き率いる英国隊のニュージーランド出身 Edmund

Shillary とネパールの *Tenzing Norkag* によって初めて登られた。2人が頂上を極めたのは5月29日のことだった。その後、スイス、中国、アメリカの各遠征隊によって登られている。その内中国隊は危険な北面からの攻撃に成功した。他の隊は全て山の南面から取りついて、成功している。

世界の15座の8,000 m峰の内たゞ1つ未登で残されていた *Shisha Pangma* が中国隊によって登られた事により、15年間に渡って操り広げられた8,000 m峰への挑戦の歴史は終りを告げたのである。

Shisha Pangma は南チベットの *Nyenyang* 州に位置しており、実際にはヒマラヤ大山脈とは少し離れているが、ヒマラヤのジャイアंटズの1つとして知られている。

我々が登山計画を推進し始めた時、その資料を数多くの図書館に求めたが *Shisha Pangma* に関する物はほとんど見つからなかった。僅かに中国地理学会がこの地域の資料を提供してくれた。かってこの地域に入った探険家や登山家は非常に少ない。英国の *A. F. R. Wallaston* は1922年7月の *Geographical Journal* 誌上に彼1人で *Shisha Pangma* から20マイルの所まで接近したと述べている。又英国の登山家 *H. W. Tilman* は彼の著書である「*Nepal Himalayan*」に於いて、「*elusive*」として記述している。

遠征隊が組織される前に我々は偵察隊を派遣した。彼等はこの地域の気象や地形を調査し、又、北面より7,160 mまで試登を行なって概念図を作成し写真を取って帰った。この偵察行によって計画の基礎は固められ、夏が終る頃には速やかに準備が進められて行った。選ばれた隊員は技術の向上と体力の強化のために *Sinkiang* と *Szechuan* に派遣された。

詳細な計画が立てられ、衣類、登山靴、寝袋、ピトンその他の装備が各所に必注され、又栄養価の高い食糧が用意された。

中国の登山界の最高峰の人々を含む195名の大遠征隊は1964年早々に組織された。隊長は *Hsu Ling* (彼は *Chomo Lungma* 遠征隊の隊長でもあった。) *Wang Fu-chou* 地質学者(彼は *Chomo Lungma* の頂上に立った3人の内の1人である。) *Wang Feng-tung*, *Chang Chun-yen*, *Mimar*, *Sodman Dorje*, *Liv Ta-vi*, *Wu Tsung-yueh*, *Liu Lien-man* そして *Shih ching* 等である。彼等の全ては *Chomo Lungma* 遠征に於いて8,100 mもしくはそれ以上の高度に昇っている。それと多くの新人が参加した。その内最も若いのは19才であった。我々は *Idan*, *Tibetan*, *Manchurian* *Idan* 各民族の各部隊であり、隊

員の中には、労働者、農夫、牧夫、サービスマン、学者、科学者、新聞記者、カメラマン、写真家、無線技師、気象官、医者、重転手そしてコックが含まれていた。遠征隊と並行して中国科学アカデミー、地理学会に属している地理科学アカデミー、陸地測量局、北京大学、それに北京地理学会からなる科学班が編成され、彼等はこの地域の氷河、地質を調査し、地形を測量して地図を作り、高所生理、高所気象の研究を目的とした。

遠征隊のキャラバンは3月18日に終り、*Shisha Pangma* の北峰、高度約5000mの所にベースキャンプが設営された。そこには20人も入る大テントが18張と小テントが10張建られ、全ベマのテントには燈灯の設備がなされた。宿舎から離れたところには、講堂、酒保、診療所、そして無線局と測候所が建設された。

ベースキャンプの南には *Shisha Pangma* の荘ごんな主峰がまるで巨人の様に他の山々を圧してスカイラインに高さを誇っておりその周囲には、*Malhamangjim, North Peak* の姉妹峰が取り囲んでいた。*Shisha Pangma* の北面の5300mから6700mにかけて長さ30Kmの *Yebokar-gyel* 氷河が横たわり、*Blong Chu* 川にそそぎ込んでいる。万年雪をいたゞいた *Shisha Pangma* は無数のアイスフォール、フレバスが口をあけ、その北面、東面、西面は多くの壁、アイスステップにおゝわれ登攀を困難にしており、又南面にはまるで巨人が矛をふり上げて切り取った様にすっぱりと切れ落ちていた。この方面からの登頂は恐らく不可能であろう。

我々はベースキャンプから5300mに達するまで古代氷河にルートを取りそこから5800mまではモレーン地帯を、さらにその上6000mまでは氷の石甸を思わせる、大きく屈曲したセラックスの林をぬって登った。

ベースキャンプの北方には広大な草原地帯が広がり、そこには野鳥の住む湖が丘が点在し、又その下にはチベット族の牧場や節系を望む幸が生まれた。

Shisha Pangma 地方の気候は11月から3月まで荒天期になり、6月から9月までモンスーン期になるヒマラヤとほとんど同じである。僅か4月と5月だけが登山に適している。その時にさえも気温はマイナス30℃以下に下がり、又頂上には人々を吹き飛ばすような暴風がしばしば吹き荒れる幸がある。好天が3日も続くことはまずなく、巨大な雪崩は雷のようになりをあげ、熾烈な雪煙を伴って落ちてくる。その他登山家にとっての問題は、ベースキャンプから頂上までの想像以上の長いルートであろう。延36Kmは中国の登山家にとって初めての経験である。さらに付け加えれば常に登攀ルート 高所キャンプは強風にさらされている事である。

我々は攻撃計画に従ってCⅠは300m CⅡ(A, B, C)は5200mにおいた。しかしながらCⅢ(6300m)とCⅣ(6900m)の設置は非常に悪い地形のために隊員は苦勞を強いられた。4月6日にはテトンの装備、食糧がこれらのキャンプに配置が終った。この間3月25日にはYen Tung-LiangとLiv Llenに引きいられた36人のパーティが高所の偵察の爲出発した。ス別のえらはれた12人からなるパーティは頂上への準備と高度順応の爲に高度6600mに向かって出発した。Wang Fu-Chauは遅れてこの頂上攻撃隊に合流した。

4月21日さらに2つのキャンプが設置され、そこには頂上アタックに必要な食糧、酸素ボンベが充分に貯えられた。1つは2500mにもう1つは、2700mにである。CⅣは頂上から僅か312mの所にあり、こんな近いアタックキャンプが中国の登山家によって立てられたのは今までになかったことである。Chom Lungma隊の最終キャンプは頂上から382m下だった。我々のアタック隊は6人のIdan民族と7人のTibet民族によって構成され、その中には隊長のIdan Ching、副隊長のChang Chun-yen、そしてChomo Lungmaの英雄Wang Fu-chowが含まれていた。

測候所から1週間好天が続くだろうと報せて来た。4月25日我々はベースキャンプマドラをた、いまアタック隊の前途を祝い儀式を行なった。最後に国歌を斉唱し、国旗とMao-Tse-tung首席の胸像をShusha Pangmaの頂上に押あふるようにアタック隊に手渡された。

以下の文は、意気揚々とBⅠに帰って来たアタック隊員であったIdan Chingから5月4日に手渡された手記から抜粋する。

我々は北面の氷河を登り、迷路のようなセラッフス地帯を通過して、やつと6300mのCⅢにつしたが、ここ3日間も吹雪に閉じ込められてしまった。4月28日天候はようやく恢復した。長大な氷と雪の盾形を登ってCⅣにたどり着いたが、そこで我々はルート工作隊が建設したはずのCⅣの跡形もなく消えてゐるのを見つけて驚たがされた。雪崩がテント1つ残さず、全体的なものを押めってしまったのだ。しかしながら我々は気を取りなおし苦勞して掘りつづけた。2時間後テントと食糧を掘り出すことに成功した。次の日又も天候は我々をキャンプに釘づけにした。4月30日我々は再び登高を開始した。40度の傾斜を持った固く氷った氷の斜面に粉雪が積っており我々にはサマタ登りながら進んだ。片側はめまじけする崖山の麓まで切れ落ちた。7時過ぎ6分に反時計回りのアルパインのボク500mのCⅣに到着した。しかし我々は雪に押もれたテントを掘り出すのにさらに2時間もつ

やさなければならなかった。

メーデーの日、我々は2700mの最終キャンプに着いた。この夜ベースキャンプからラジオで翌朝は異常な程天気が晴れるだろうと知らされた。私は叫んだ「さあ戦いの準備だ」。ノブが最後のアタックに参加し、高山病にかかった3名は残り、もし必要ならアタック隊のサポートを行なうことに決定した。

5月2日北京時間の午前6時、頂上アタック隊員は3本のサイルに各々結ばれて最終キャンプを出発した。青白い月は山の彼方に沈んでしまったが、僅かばかりの残光が我々の前途を照らししてくれた。2800mに達した時夜が明けた。前には平内50度の数百フィートの氷の壁が足もとから落ち込んでいた。それは青々黒く光った固い氷であった。我々は頂上に達するためのルートを求め、このすべりやすい斜面をトラバースすることにした。全員の足場ピッケルでカッティングされ隊の安全を保つためにセトンが打ち込まれ、カラビナにナイロンガイルを通してトラバースを行なった。

アクシデントはこの時起った。地質学者の Wang Fu-chou が後向いて降り様としてステップを踏み違え20mスリップしたのである。けれど残りの隊員によってすぐ確保され、救助された。この僅か20m余りのすべりやすい斜面を通過する為に我々は30分もついやした。それから二つの大きなアイスフォールの線にそって前進し、45度の雪の斜面を連続して登った。ここは日陰の為に気温が低く雪はキューツとしまっていた。ピッケルでホールドを作り四つんばいになって前進して行った。しどろもどろの様なペースに落ちてしまった。見苦しさにあえぎ、足は鉛の様に重く感ぜられた。我々は雪の斜面で短い休息を取った後最後の50mを登り始めた。そこはヒガマで滑るがむしろゆるやかな傾斜であった。「頂上だ」 大それた叫んだ。それは丁度我々の100m上の前にあった。頂上は遠くから見えていたような針峰とは異なってみるみるゆるやかな雪をかむったトサカのようなだった。

しかし、この時我々は最後の頑張りをするには休息が必要な程疲れ果ててしまっていた。

太陽は中天に昇り、風速毎秒25mの風が吹き荒れていた。キノコ雪を象徴して我々は我々の左側のゆるやかな雪域に出た。それは徐々に下に向って下りていた。僅か数歩で我々はこの山の最も高い地点、氷と雪と一片の土の入り混ざった5平方m位の広く地平線まで見回らせる頂上に達した。風は我々に向って強烈に吹きつけて来た。見上げると太陽は雨雲の空に輝き、我々の

下にはあざやかな色の雲が浮かんでいた。5月2日北京時間10時20分、我々の最後の一人が頂上に立った。10時30分 私は灰ながら行動ノートの5月2日のページを引き出し、その裏に *Ndsu Chung* 引きいる10人の中国登山隊は1964年5月2日 *Shisha Pangma* を征服したと書き入れた。4ベットの登山家 *Sodnam Dorje* は中国の国旗と *Mao-Tse-Tung* 首席の肖像を彼のリュックサックから取り出し、私のノート共に頂上の中央に穴を掘ってこれらを押めた。

カメラマンはこの光景を彼の16mmシネカメラに納めた。我々は記念写真を取り、それから周囲の眺望にみとれた。南東には世界の最高峰 *Chomolungma* が聳え、北には遙く雄大に大草原が、まるで銀のリボンのような *Blong chu* 川によって二分されて横たわっている。そこには又つやの鏡の様な大きな湖がみとめられた。一方南には多くの雪をまとった峰々や、こげ茶色の山々が連なっていた。

11時丁度、我々は再び3本のサイルに縋られて下山を開始した。最終 *Camp* に帰ったのは午後だった。ベースキャンプでは頂上から、極超短波の無線機で発信された *Ndsu Chung* の勝利の報せにわきよがっていた。

我々はベースキャンプでこの成功に対する歡喜に各人じゆくまで酔りまわった。その間に時を失せず、北京にこの朗報が送られ世界に知らされた。

訳者 (注)

これは *Alpine Journal* 1964-2 P. 211~216 に発表されたシシャパンマ(コカインターン) 登頂の記録であります。このシシャパンマが中国隊に登られたことによって全マのお8000m峰は登られてしまった訳です。これからのヒマラヤは恐らく6,7000m級の山々に目が向けられより困難な山々が登られて行く事と思えます。云いかえればヒマラヤのバリエーション時代の幕がこのシシャパンマ征服によって落されたと言えるでしょう。今日の世界最高の未登峰はガッシャーブルム五峰となり、多くの登山家の注目を集めています。

なお、参考にお8000m峰登頂の記録をかかげておきます。

1950年	6月3日	アンナプルナI.	フランス
1953年	5月29日	エベレスト	イギリス
	7月3日	ナンガパルバット	ドイツ、オーストリア
1954年	7月31日	K2	イタリア
	10月19日	チョーオーユー	オーストリア

1955年	5月15日	マカルー	フランス
	5月25日	カンチエンジュンカ	イギリス
1956年	5月9日	マナスル	日本
	5月18日	ローツエ	スイス
	7月7日	ガッシャーブルムⅡ峰	オーストリア
1957年	6月9日	ブロードピーク	オーストリア
1958年	7月5日	ガッシャーブルムⅠ峰	アメリカ
1960年	5月13日	ドウラキリ	スイス
1964年	5月2日	シシャパンマ	中国



— 紀 行 —

カルカッタ・カトマンズ

『調査報告』

エクスペディション委員会

〔始めに〕

昨年4月エクスペディション委員会が発足して一年、その間幾度かの委員会を持ち、計画実現への努力を凝結して来たが、何分甲南として始めてのこと故、その具体化に当ってはどうしても一歩の壁にぶち当たり難行していた。吾々としては、① Himalaya 経験者、田口二郎先輩にお会いし、豊富な経験と聞く事と ② 渡欧中の田辺潤に帰国途上に Nepal に立ち寄ってもらい、種々の現地事情を調査することがその壁を打破する最良の方法と考えていた。偶々な縁が田辺と共に行動できる状態に成り、それをきっかけに上記 ① ② の事柄が急に実現されたのである。

委員会では本調査行の話が出て、わずか1ヶ月半にて計画を実行するに至ったので、会員諸君に充分意図を説明し、又御意見を聞くことが出来なかったが、先達感を今回のような規模で出すことは直ぐ将来 Himalaya に Expedition を送り出すにあたり、非常なプラスになることは明白と信じ、計画の実行に踏み切った次第である。事実行動を起すと色々な事情がわかり、未知の世界にも急に明るくなった。ネパール行きに依る成果は限りない。今迄、Himalaya Expedition と云えば雲を掴むような計画と考えていた我々であったが、今や夢の実現も間近と成ったと云えよう。無論前途は多難である。しかし、つぎの step に移るべき基礎は固められつつあると確信する。

尚、本計画につき、田口先輩には御多忙の折から種々御配慮願ひ、献上に御礼申し上げます。同時に資金カンパに対し、諸君の積極的な御協力を戴きましたことは、誠に心強く、深く御礼申し上げます。

昭和39年5月20日

甲府山岳会

田 辺 潤

広 瀬 健 三

〔報告〕

- メンバー 田辺 潤 (29才) 昭和34年経済学部卒
田辺空気機械(株)社員
クラーツ、工科大学(オーストリア)留学を
終え帰国途中カルカッタに於て広瀬と合流。
- 広瀬 健三 (25才) 昭和36年経済学部卒
三井物産(株)社員(神戸支店)
日本山岳会々員
- 行 先 カルカッタ(インド)及びカトマンズ(ネパール)
- 期 間 昭和39年4月15日～同月29日迄
- 目 的 昭和40年度、ガネッシュ、ヒマール山群のための下準備
(種々の現地事情の調査)
1. 来年の入山許可を取る。
 2. ヒマラヤン、リサエティーを通じ、最近のシェルパ事情を知る。
 3. カカニ峠からガネッシュ、ヒマール山群を偵察。
 4. その他(インド及びネパールの通関事情調査、etc.)
- 報 告 1. 行動記録
- 4月14日 広瀬、伊丹出発
- 15日 羽田 → カルカッタ
- 16日 カルカッタのダムダム空港に於いて田辺と合流。
直ちに *Visa for Nepal* を *Attend* す。
三井物産、カルカッタ支店に行き、その取引先
の *Jyoti Brothers* を紹介してもらう。
- 17日 空路ネパール入り、*Mr. Jyoti* 及び神原氏に面
会カトマンズまでの日程を組む。
- 18日 カトマンズ市を見学。
- 19日 カカニ峠まで行き、目的の山ガネッシュ、ヒマールを偵察。
- 20日 カトマンズ市調査。(食糧を主とする)

- 21日 ネパール外務省に出頭、*Section officer* ナレンドラー・ヴィクラム・シャハーに面会、来年度の登山許可を得る。(内諾) ネパール、ヒマラヤン・ソサエティーに行き、シェルパポーターの雇用に関し種々事情を知る。
- 22日 *Nepal Field Marshal Kaiser* に会い、来年度遠征に関し説明する。
- 23日 *Mr. Jyoti* に面会、ネパールの通関事情を知る。
- 24日 カルカッタに帰る。
- 25日 三井物産、カルカッタ支店、*Jyoti Brothers* カルカッタ支店を通じ、カルカッタの通関事情を知る。
- 日本領事館を訪問、その後、*Japan Seamen's Club* を訪ね、カルカッタ港を見学する。カルカッタ港の荷役状態を知る。
- 26日 カルカッタ —— ホンコン
- 27日 ホンコン
- 28日 ホンコン —— 東京
- 山岳会の東京グループに帰国報告をする。
- 29日 東京 —— 大阪

○ 詳 細

1. 入山許可申請の件

ネパール外務省に出頭、*Section Officer* ナレンドラー、ヴィクラム・シャハーに面会、*informal* な申請書を提出し口頭で内諾をとる。

正式の申請書は先ず日本外務省へ提出しなければならぬが、その旨申請書はデリーの日本大使館及びデリーのネパール大使館を経て、ネパール外務省に届けられ、許可される訳であるが、内諾を取っている関係上、日本外務省の審議にさえ通れば以後は何んら問題は起らぬと思われる。

2. *Nepal Himalayan Society* の件

A.C.T. Director Tendi Sharma に面会、シェルパポーターの雇用に関し、具体的に話合う。即ち、*Nepal*

- Himalayan Society の New Regulation を得、それに関する種々具体的な説明を受ける。又、シエルパ、ポーターの List も最新のものを作成、山岳会に送附するよう要請する。

3. *Kakani* 峠から *Ganesh Himal* 偵察の件

Kathmandu よりジープで約1時間30分の峠 *Kakani* より目標の山 *Ganesh Himal* を偵察する。スケッチ写真等の資料を持ち帰る。

4. インド、ネパールの通関事情及び運送(インド——ネパール間)の件。

通関、運送問題は *Expedition* と切り離せない重要な問題である。今迄の各日本隊はそれを任せた下請店に恵まれぬためかかなりの日数と賞用をついやしているようだ。吾々は幸い、*Jyoti Brothers* を知り、その本社(ネパール)、支店(カルカッタ)を訪問、通関、運送に関し、豊富な資料を得る。今日文通を頻繁にすることにより、出来るかぎりの資料を得少しでもその *loss* を少くする積りである。

— 追記 —

本調査中現地にて協力願った方の *list* を下記します。報告書の参考として載きたい。

カルカッタ

村形繁明氏 三井物産(株)カルカッタ支店長
十束公司氏 大阪商船 三井船艀(株) カルカッタ支店
橋本 氏 カルカッタ日本総領事代理
Mr. L. R. Joshi Jyoti Brothers Calcutta

カトマンズ

His Highness field-Marshal Kaiser-Rana
ネパール王国陸軍元帥
ナレンドラ、ヴィフラムシャハー氏、ネパール王国外務省行政課長
シャドルシャムエル、ジャンバアードルラナ氏
ネパール王国外務省行政次官
Mr. Deba. Jyoti Jyoti Brothers Kathmandu.
神原圭氏 日本国外務省研修員

(カトマンズに住み、日本登山隊の世話を一手に引きうけている。)

Tendi Sherpa Act. Director of Publicity

Nepal Himalayan Society

Mr. J. B. Bista Personnel Manager of Royal Nepal
Airlines Corporation

日誌

4月14日(晴)

一週間休暇をとるとなれば仕事の整理に全く忙しい。仕事を終え、officeを出た時は正直云って、これからネパールに行くという感激よりも、ヤレヤレといった気持ちの方が強かった。

伊丹空港では多数の山岳会諸君、会社の人々に見送られ機上の人となる。飛行機とは便利なもので、何かと書類を見ている内、もう羽田空港である。

羽田につくと香月会長がおられ激励をうける。社用で小生より一時間程前に上京されたとのこと、おそくまで空港で待っていたごき恐縮する。

大きなスーツケースを片手にタクシーを拾い、新橋第一ホテルに向う。ホテルには牧野、大関、藤安、三君が待っていてくれ、田口先輩からの紹介状、地図のcopy等を受け取り、最終打合せをする。明日から一週間外地へ行くとあれば、日本での生活は今日でしばらくおわかれだ。

4月15日(晴)

8時をぐっすり眠る。田中君がわざわざ Hotel まで来て見送くつくれる。羽田空港へは美田さんが見送りに来てくれていた。出国手続を済せ、出発が近づいたので美田さんに挨拶し、waiting-roomで flight のアナウンスを待つ。

機内に入ると、ほとんどがヨーロッパ人 ドイツ語らしきもので楽しげにしゃべっている。12:00(時)羽田をあとと云う間にまい上る。富士山を横目にジェット旅行は快適だ。ドイツ人のスケッチャーが Hong Kong へ行くのかと聞いてくる。日本人は香港へ行くのが多いのだろう。小生、"To. Cebu" とえらそうに答える。香港—バンコックはすつと雲海上の飛行で丁度山頂から雲海をながめられるような錯覚に陥り入る。

現地時間 17:00 カルカッタ、ダムダム空巻に降り立つが、合服を着ているので、まるで悉風名に入ったようである。それにしても汚ない、*Air port* だ。白壁の落ちかかった薄暗い一室で入国書類必要事項をかき、荷物を通関する。

人相のよくない役人が、カメラ、トランジスターラジオ、酒等についてうるさく聞いてくる。こゝらで1つ袖の下をと、日本よりはるばる？持ってきた1本50円なりのボールペンをすかさずつかませます。その効果有りか悪きか以外と簡単に解放される。

空港からカルカッタ市内迄航空会社のバスにのったが、このバスの汚ないこと、そして窓から外を見るとハダシの連中が日本の夜中の如きもののまわりにたわろしている。これまた、すごい所だといさゝかおどろく。

日本で *Reserve* しておいた、カルカッタ目抜き通り、チョウリンギン街にあるオベロイホテルに着く。仲々立派なホテルで、*Reserve* はまちがひなくされており、安心という所、ホーイに明朝4時に *morning call* する様伝え、ベッドに入ったのが既に夜中の1時頃

4月16日(晴)

4時起床、今日は逢はるオーストリアから来る田辺さんを、ダムダム空港へ迎えに行く日。出発前、お互いに充分連絡をとっていたので不安はない。6時過ぎ空港につくと飛行機は予定より少し早く到着したとかで、すぐ田辺さんを見つけることが出来た。二年半ぶりに元気の姿を見て思わず、*「賀茶ッ」* と大声を出して喜びの握手を交す。空港を後に、直ちにタクシーでネパール領事館へ行き、*Visa* 申請書を取り、ホテルに到着く。*Visa* は簡単にとれそうなので、翌日 *Nepal* に入ることにする。久しぶりにあう賀茶ではあるが、日本をはなれる前と全く変わっていない。*Expedition* の話、山岳会の車中の話に花が咲く。

予定通り *Nepal* への *Visa* はいたって簡単にとれた。1週間の期限でしかも *only by air* なる *Remark* が入る。期限の延長は *Nepal* で出まるとのこと *Expedition* の際の *Visa* に関しても問題なからう。

その日、日本航空の支店へ行きカトマンズの *flight* の *reserve* に関し聞くが、現在カトマンズ迄の直行便がなくすべて *Patana* で乗換しなればならぬとのことである。翌日の *culcutta* 発 7:10 の *flight* を *reserve* しておく。すべて日航が手際よく *arrange* してくれるので非常に助かる。(小生、田辺さん共日航を利用しないのに全く親切だ。)

日航の office に行く途中、ミタカリ”につきまといわれ、大いに閉口させられた。その忍耐強いこと、日本では考えも及ばぬ、これが石にかじりついても……という精神なのか？ 30分位はなれぬのでハイライト、5、6本をやるとよるこんで立去った。か、敵もさるものいつのまにか質茶のボールペンを拝借しているのだ。

Nepal 入りの手配が Smooth にいったので、タカ三井物産カルカット支店に挨拶に行く。支店長は以前 ロンドン支店に居られたとのこと。マの際テニスの藤井の世話もされたことがあり、甲南には縁がある。非常に歓迎して下さる。早速 Gyati Brothers への紹介状を書いて下さる。ホテルで荷物の仕込みをし、早々に寝る。

4月17日（曇のち晴）

5時起床、昨夜の heavy rain のため非常にさわやかだ。ダムダム空港発 7:30 の flight で一瞬 Patna に向う。道中日本人の写真家に出会う。ヒマラヤを見に行くとのことである。天気は高曇りなので今日はどうもヒマラヤを見ることが出来ぬようだ。びっくりする。9:00 Patna に着く。Patna はインドとネパールの国境近くにある小さな air port でネパールに入る。吾々はここで出国の手続きをしなければならぬわけだ。手続きはいたって形式的だが、カメラ、トランジスターラジオに関しては、インド入国の際と同様かなりうるさい。

予定より2時間遅れ、12:00 Patna を出発。14人乗れるプロプラ機は 最新型 ジェット機と違い仲々浮び上がらない。隣りのインド人が小生の 8mm カメラを見ま色々聞いてくる。昨日ボールペンをすられた経験があるので、インド人をみると何かすられはせぬかと内心おたずねでない。彼も今日 Himaraga をみるのは無理だろうという。全く残念だ。飛行機は、まじぬいに耕やされた丘をすれすれに飛ぶ。時々カクッと高度を下げるので余り気分は良くない。見渡す限りの段々田だ。やがて機はぐっと高度をさげて、いよいよカトマンズ到着。1:10 涼しい。ちょうど夏の上高地に入った時のようだ。何と長閑な所だろう。快晴なればここから Ganesh Himal が望めるだろうに ついていない。

空港から New Road と呼ばれる Kathmandu の main street 迄バスで行く、日本で云うとちょうど、信濃大町あたりの田舎バスのようなものである。風景も非常に日本的だ。New Road でバスを降りる。

Gyati Brothers の office が近くのようなので、先ず挨拶に行く事に

する。社長の *Mr. Jyoti* は仲々の好人物、*Expedition* の話をすると、全国的な協力をしてくれる。*Mr. Jyoti* を知ったことは今頃我々にとって非常に有利となる。昼食をごちそうになり、その日、神原氏宅に案内してもらい。氏はちょうど家に居られ、*Kathmandu* の現状等、色々お話を伺う。非常に多忙のご様子なので、いったん引あげ、吾々の宿舎 *Imperial Hotel* で又お会いすることにする。

Imperial Hotel は三流クラスの *Hotel* とは云え、メキシコの映画に出てくるような、仲々味のある *Hotel* だ。穴ぐらの如き一室を貸り、*Nepal* 滞在の根據とする。夕方、神原氏がこられる。きくところによると明日から3日間祭の為、休日が続くらしい。仕方ないので、休明けた、外務省 *Himalaya Society* に行くことに決定。

4月18日(晴)

今日は *Nepal* の休日というところ。

朝、*Mr. Jyoti* から *Tel* があり、*Kathmandu* の名所を案内することの。氏の好意に甘え、御願する。やがて *Mr. Jyoti* は「ベツツ」を運転し、さっそうと現われる。非常な親日家で兄さんは一度日本に来たことがあり、自分も機会があれば是非訪れたいという「ベツツ」を自家用車に持つぐらいだから、かなり金持なのであろう。ここ *Nepal* も *India* 同様、貧富の差がはげしいようだ。古い寺院を中心に、*Kathmandu Valley* を見物する。*Nepal* の強い日差しをうけての *Drive* は大変気持ちが良い。少し振りにゆっくりした気分を味わう。

4月19日(晴)

4時起床 5:30 *Hotel* 発

ガタピシヤのジープに乗り込み、待望の *Kakani* 峠に向い。車は今にも分解しそうなものであるが、早朝の *Kathmandu* 市は静まり返り、気候もさわやか快適なものだ。

現役時代の缶箱によく、トラックジープを利用したものだが、まさしくあの時と同じ気分だ。それにしてもいやに市内をぐるぐる廻ると思つていたらどうもガソリンが、不足してゐらしく、これからその補給に行く様である。ノンビリしたものだ。ガソリンスタンドを出たのが6:00 天気は晴と云えども春霞的だすっきりしない。市内をでるとやがて車は山道に入る。振りかえれば緑の *Kathmandu Valley* が美しい。

思ったより道は整備されており、時たま出会う現世人を除けば、日本の山道を走っているのと大差ない。見事に耕やされた段々畑をみながら車は快調に走る。もう時間的に峠の下につくころだと思っていると、突然、運転手が「スノーピーク」とさけぶ。ヒマラヤがみえたのだ。きょりがあまりにもあるので、残念ながら圧迫的な *scale* を感じない。道はぐっと急になり、やがて峠に出る。7:30 丘を登り切ると、*Nepal Himalaya* の巨峰が一望される。左にヒマル、チュリ、マナスル、正面に吾々が目標としている。ガーネッシュ、ヒマール山群、右にランタン、ヒマール山群、やはり神秘的な眺めだ。望遠鏡をとり出し、ガーネッシュをじっくりみる。ノース・ピークの区別がつきにくい。賞茶は登んにスケッチをしている。南面は完全な氷壁をなし、取付けようもない。それにしてももう少し近づいてみたじもめた。Kakani 峠をトリスリ・バガールの方に下れば、ガーネッシュを望めなくなるので峠より見ることにする。吾々としては南面に *Route* を求めるのではなく、サンジエ氷河側より、入る故、東南面を知りたいわけだ。残念乍ら、そこまではいる日数がない。運転手を余り長く待たせるわけにいかぬので 11:20 Kakani をあとにする。Hotel 12:10 着。思うに *Expedition* の際、この *Kathmandu* まで、*Smooth* に入ればしめたものだろう。非常に気分の良い前で山登りをしようという気持がわくところだ。

外地ににいるとは思えない。信濃大町、四ツ谷ににいるような感じだ。

Kathmandu Valley とはそんな印象を私に与えた。

4月20日

カトマンシ市調査(食糧を主とする。)

今日もお祭りで官庁は休みである。朝、早番 *Post* へ行き、たまっていた郵便物をすべて発送する。郵便局とは云っても、まるで牢獄のようなところである。鉄格子の向うは真暗で机一つ手提金庫をもった少年が一人切手だけを売っている。土産を依頼するが、この国にはそんなものはないそうである。

午後、町の概念を知るため、輪タクで主なところをまわる。大体必要な物の有り場所及び町の様子がつかめる。お祭りの山車が出るとか町の中は大変にぎわっている。輪タクを捨て、市場を詣べる。食糧品及び雑貨は広場を中心として5方に道がのび、その周囲に店が、かたまっている。万いことは戦後のやみ市以上、ひどい臭気である。しかしなれてしまつと町の

気も爽いもしなくなる。

食糧品は米(1升約100円)玉子(一コ約25円)乾エンドウ、ソラマメ、麦、メリケン粉、トンモロコシ、生蟹、ジャガイモ、玉ネギ、人参、花野菜等、雑貨は電池、石油コンロから何んで売っている。ネパール帽を買った玄瀬はしきりに乞食にたかられている。広場で藁草の関係で米であられる伊藤さんご夫妻にお会いし、出はじめた。たしの由来をお聞きする。何か両丘のだしなんだそうである。夫妻と話していると、子伏か何事かと集まってくる。我々もたしを見物するため雑沓の中に入る外国人観光客も案外いる。

4月21日 ネパール外務省に出頭 *Section officer* セレンドラーヴィクラムシャハーに面会、来年度の登山許可を得る(内諾)ヒマラヤンソサエティーに行き、シエルパ、ポーターの雇用に関し種々事情を知る。

朝10時半外務省へ同行して下さる神原氏がトヨペットコロナで迎えに来て下さる。フルカ兵の門番の立っている門を通り、タドンの様な弾丸をピラミッド形に積重ねた大砲のある前庭の向うに、どこかヨーロッパの宮殿を思わせる建物がある。先ず *visa* の延期に行くが、非常に簡単に10日間延期してくれる。次いで *Section officer* ナレンドラーヴィクラムシャハーに面会し、*inward application* を提出説明し、当方の趣旨を伝える。大体、*forward application* を出せば、ネパール外務省での問題はないらしく、一応内諾を得ることが出来る。

午後、*Royal Nepal* 航空に行き、*Gravesh - Jhimal* の航空写真撮影のための飛行機チャーターに就き、再び交渉する。明日飛行に関し、外務省の許可を取ることとし、23、24日のいずれかに飛行することを決定する。問題はヘリコプターでは高々度まで上れないのでダコタ機をチャーターする事とし、少しでも我々の負担を軽くするため、如何にして我々以外の飛行希望者10名を募集するか、*Travel Bureau* で代行してもらえるかどうか相談する。後、外務省前の *Putari Sadak* に面した、*Himalayan Society* に行く。山岳部の部室のような感じのする所で *Shepa* 達が28人座っている。我々が入って行くと、顔中親しみを表わしたほくそ笑みでありさつする。部室の中は、壁はピッケル等飾ってふざけている。 *Action Director Jendukanda* に面会し、シエルパはやはり一級のネパール人とは違って顔立も良く、非常に親しみのもて

る人達である。帰りに *Society* の前で彼等と記念撮影する。

4月22日 *His Highness Field-Marshal Kaiser-Rana* に会見

Nepal 航空の人と共に外務省に行き、飛行許可證を得る。特別な制限はないが、*Movie Camera* の携帯、及び撮影は許されない。再び *Nepal* 航空に帰って話を聞くと、先日聞いたスゴタ機の上昇高度26,000ftは誤りで、せいぜい12,000~13,000ftだという。メートルに換算しても3,600~4,000mである。これではとても *Sange* まで昇れぬ。*Operation wawages* に聞いても、はっきりしたことは *Captain* しかわからぬという。*Jyoti* 氏に相談し、*Captain* に会う際に彼が飛行場に同行してくれる。飛行場の *Captain* に話すと、やはりスゴタでは12,000~13,000ftが限度で、それ以上では酸素が必要だという。それと実際に飛ぶのは別の *Captain* でもうすぐ飛帰ってくるから待てという。しばらくして飛行機の到着の後、*Captain* に会い、上昇高度、飛行の安全性を確かめるが、彼も、*Ganesh* 方面に飛んだ事がなく、午後もう一度地図をみて相談しようと言う事になった。しかし、午後 *Nepal* 航空へ行って見ると *Captain* は来ておらず、とにかくこちらから乗ってやろうというのに彼等の商売気のないのには全く腹が立つ。

午後4時、先日神原さんを通じて、*appartment* をとっていた。 *Field Marshal KAISER-RANA* に会見する。やはり、ヨーロッパ風の邸殿に住んでおられる。2階に案内される。会見室までの廊下の両側にはいろいろな写真や、虎豹の絵が飾っており、神原さんの話では歴史的にも貴重なものなのだそう。部屋の前で元師は我々を出迎えて下さる。思っていたよりは小柄な方で、足がが悪いのか杖をついておられる。田口先輩よりの親書をお渡しし、来年の我々の計画についてお話しする。元師は日本にもこられた事がありらしく、日本の話、知己ある日本人の事など話される。帰りに御自身でいちいち先程の絵や写真の説明をして下さる。広瀬は元師の写真をとらせていただく。

4月23日 *Jyoti* 氏に面会、ネパール通関事情をきく。

今日は雲が多いので、*Ganesh* 偵察の飛行には出られない。28日に日本に帰る為、明日ネパールを発つ予定にして、カルカッタまでの飛行機の予約をする。往路は何かの間直いで取られなかったが、カルカッタ、カトマンズ間の飛行機代は4月より片道約6ドルの値上りとなっている。我々の切符は古いままの料金であるため、かなり文句をつけたが、結局拂わざるを得ない。*Jyoti* 商会に立寄りネパールの通関について話を聞く。そし

ネパールの通関はカトマンズの *jjyoti* 商会在、カルカッタのは *jjyoti* 商会のカルカッタ支店がやってくれることを承諾してくれる。大体 *application* を提出し、許可さえとれば *import licence* もすぐとれるとの事。又荷物のカルカッタからの *Transportation* も神原さんの話とは違い、トラック運送出来、カルカッタ、カトマンズ約6日ぐらいだそうである。とにかく入山許可さえとれば、通関に関しては全部 *jjyoti* 商会在がやってくれる事を確約してくれる。恐らく実際に *Expedition* が出た場合 或る程度成否のキーポイントとなるころであろう。

正午 神原さんに昼食を招待され、宅を訪問する。洋風の家で、家の中に入ると、ネパールにいるという感じがしない。カトマンズにいただけあって各国山岳会の状態 情報に詳しく、又、ネパール、インドの話等興味がある。日本式の食事を出して下さるが、生水を飲んだ故が昨夜から猛烈な下痢で、下痢止はきかず、クロロマイセチンで何とか止めているので、充分食えなかったのは残念であった。

明朝 カルカッタへ飛び前に *Ganesh* 偵察飛行できぬこともないが、*Nepal* 航空の頼りなさに腹を立て、又、明日も晴れないだろうと予想して、飛行の交渉に行く気がしない。

4月24日 カトマンズ— カルカッタ

今日は皮肉にも全くの快晴である。ホテルの庭からもガネッシュのピクが見えている。昨日 今日の飛行交渉をしなかった事が悔まれる。しかし見えているのは上部だけで、麓の方は雲海で包まれているので、飛行機の上昇できる範囲は雲の中であろう。せめてもの慰めである。

最後に *jjyoti* 氏に会い、御礼と別れの挨拶をする。*jjyoti* 氏には非常にお世話になったし、又我々がこの氏を知り得たということは、こんどの調査での最高の収穫と云えるのではないだろうか。

飛行場の屋上から眺めるカトマンズ市と郊外は、如何にも牧歌的であり、又、*Ganesh* の峰々が、すぐ目の前に見えて素晴らしい。足元の工事場では禪者の労働者が歌に合わせて地固めをやっている。ノンビリしている。*Ganesh* の麓の雲海は、だんだんのぼって、飛行機が出る時には、山はすっかり見えなくなってしまった。カルカッタへの乗換地 *Patna* で再びインドへの *immigration* を行ない、1時間程の待合せである。広瀬は支那服を着た可愛らしい二人の *Mädchen* をしきりに気にして、とうとう一緒に写真を撮らせたくれと申し込んだが、あっさり断わられている。

午後二時半カルカッタに着く。ネパールと違って非常に暑い。三井物産の車が迎えに出てくれている。再び *Grand Hotel* に入り、すぐに日本総領事館へ行くが、すでに時間外で閉っており、明日もう一度出直すことにし、明後日の日航機を予約するため日航へ行く。やはりこゝは日本語が通じて便利である。*Oxford* で *Himalayan Journal* を手に入れる。後、三井物産へ挨拶に行き、明日のカルカッタ港調査の手配をお願いする。

夜は三井物産支店長村形氏の所で御馳走になった。

4月25日 *Jyoti* 商会カルカッタ支店訪問、日本領事館、カルカッタ港見学

Russel Hotel が安いと聞いていたので、稍早速 *Grand Hotel* より *Russel Hotel* に移る。三井物産に *Jyoti* 商会カルカッタ支店を紹介していた。そこで *Joshi* 氏に会い、カルカッタの通関事情を聞く。カトマンズで聞いたように、やはり、*Jyoti* 商会を通せば、今迄の日本隊の問題点だったカルカッタの通関も、さう困難なものではないらしい。種々具体的な、又詳細点を聞く。日本総領館で総領事藤本氏に会い、もし来年度我々の *Expedition* が出た時には御世話になることをお願いし、その際の注意をうかがう。カルカッタ港見学のため、三井物産より紹介していただいた大阪商船三井船泊の方々と *Seamen's club* で昼食の後、カルカッタ港を案内していた。遠征隊荷物の荷役の際の注意をうかがう。夕刻、三井物産を菊田氏夫人の案内で、ゴルフ場の菊田氏の所へ行く。上層階級の集まる所だけに、こゝがカルカッタとは思えぬ程きれいな所である。ゴルフ場の入口近くの貧民街とは非常の差である。

(田辺)

4月26日(曇のち晴)

今日で良きにつけ悪きにつけ、強烈な印象を我々に与えた *Calcutta* とはお別れだ。早朝の日航機を利用、一路 *Hong Kong* に向う。

4月27日(曇)

一日 *Hong Kong* でゆっくりする。

4月28日(曇)

いよいよ日本へ帰りねばと思えば、少しユウウツに成る。同行の田辺さんは2年半も外地に居られたので非常に嬉しそうである。

Idang Kang 発 8:45 Tokyo 着 12:30 空港で一休み、香月会長、田口先輩、会社関係、そして出発に当って、種々御助力下さった東京山岳会の諸君に、田辺、玄願、鼎国の由、報告する。田辺さんは早く帰阪されるが小生は明日休日なので、今夜はゆっくり、東京で骨休めとする。夜、美田さん、藤安、牧野、田中君等と食事をしながら調査の結果を報告する。

皆大変喜んでくれ、自分もやっと任務が終った気になる。

五月合宿に於ける、鹿島槍荒沢奥壁

メンバー、 山、水渡、武田、柏、塩崎

今年の五月合宿に於て荒沢奥壁の概念を把握、岩稜をアタックすべく西俣B、Cより東尾根上(三ノ沢をつめた第二岩峰の下の方)にA・B・Cを設け、6日間にわたって活動した。荒沢は旧制時代に二度訪れられている。しかし最近入った者はなく我々にとってなじみの薄いところだ。

荒沢は鹿島槍の北槍から派生した東尾根、天狗尾根の二本の尾根の間にあり深く切れ込んだV字谷である。沢は、東尾根より派生した荒沢尾根により南俣と北俣に分けられている。北俣の奥は崖によってさえ切られ、崖に区切られた右側の岩稜を北稜、左側を南稜に分けられる。

我々は、好天に恵まれ、荒沢を偵察し、北稜、南稜、荒沢尾根、をアタックし、前期の目的を達してB、Cに下った。

4月29日 東尾根上にA、B、Cを出す。

4月30日 天狗尾根より南槍までの偵察、東尾根を下って帰幕

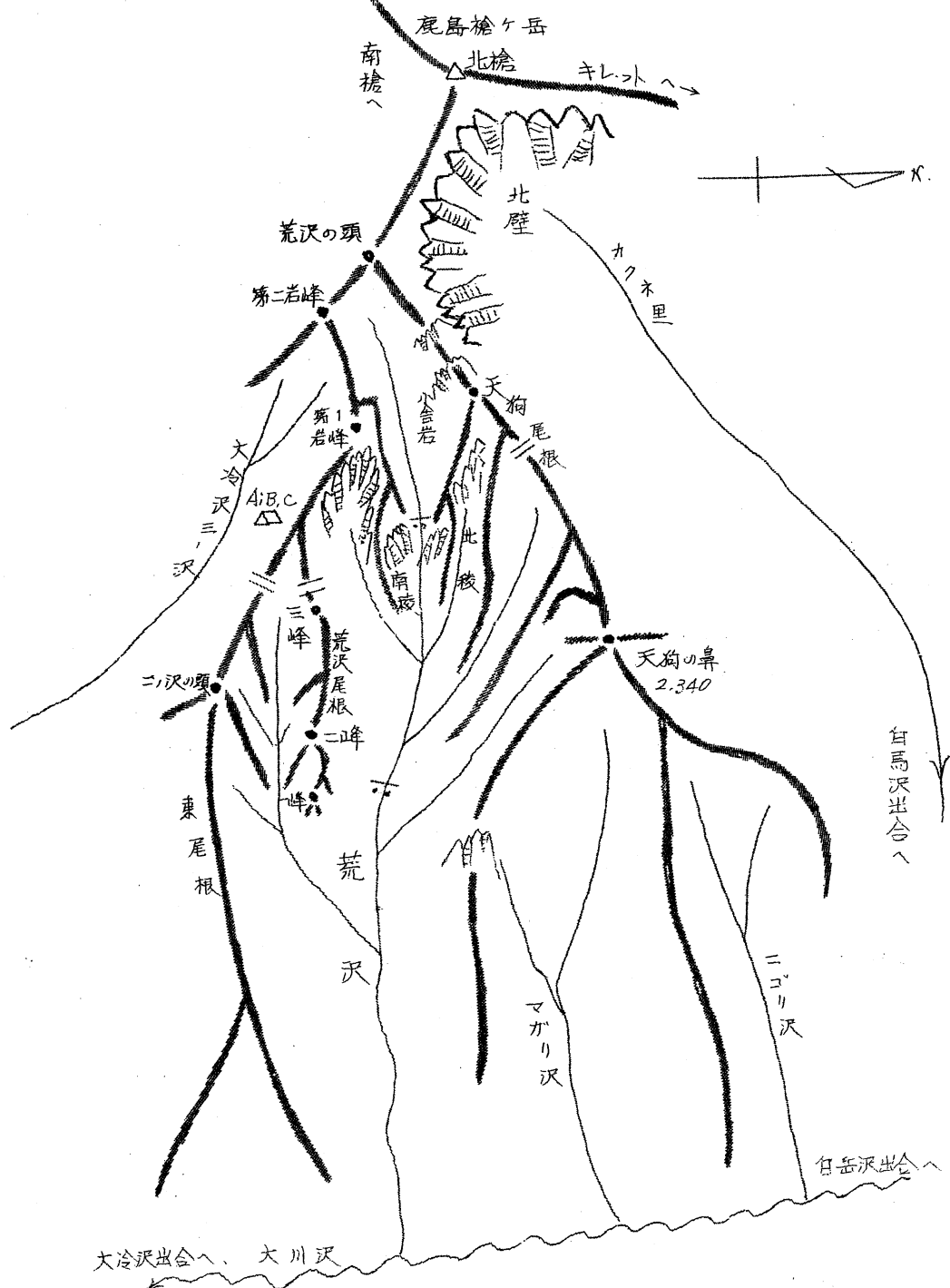
5月1日 雨、沈殿

5月2日 荒沢尾根(武田、水渡、塩崎)

5月3日 南稜(武田、塩崎)(別記) 北稜(柏、水渡)(別記)

5月4日 西俣B、Cへ下る。

鹿島槍、荒沢奥壁概念図



—◇ 荒 沢 北 稜 ◇—

メンバー、 狢、 水渡

5月3日 晴

2時30分 起床。狢好のアタック日和り。足がナンテン痛むのを我慢して4時40分、モルゲンロートの輝きをあびながら出発。荒沢尾根上部より本谷に降りる。アイゼンがキュッキュッとよくきき、気分が良い。南稜パーティーと別れて、取付に着いたのが、5時30分。最初水渡が登る。草付で厄難。その上ベルグラが張っているのが可成り嫌な所である。第一岩峰の右下を右へトラバースし、草付をどんどん高度を稼ぐ。3ピッケ目稜線に立つ。正面に南稜パーティーが頑張っている。コールを交しながらリッヂ通しに登る。別に技術的に困難な所はなく、単純な登攀である。第二岩峰を右へ廻り込み、再び稜線に戻る。この頃ベルグラが疼け出したのか、落石多し。下より登ってくる4人のパーティーより、コールがきこえる。「落石をするな。」と云ってうるしいが、自然落石なので、どうしようもない。M岩峰の基部に達する。M岩峰の左側に草付のガリーが30m位延びている。ツアックをけり込み、*Bush* をつかんで腕力で登る。下より数えて8ピッケ目でM岩峰の上に出る。このころより腹が空腹を訴え出す。面白かったのもこのワンピッチだけで後は、*Bush* の稜線をひたすら登高するだけだった。僕は荒沢というものにもっと痺れを期待していたのだが、全く裏切られた感じだった。昭和12年3月、東面大の小谷部全助氏が、悪戦苦闘されたたあの荒沢北稜がこれなのかと思うと、何か別の所を登っている感じてあった。3月と5月、2ヶ月の違いが、この様にまで、山を変化させるものなのだろうか。雪をいたぐくと悪絶無双の姿になる荒沢が、一度雪のバールを脱ぎ捨てるとこうまで痛くない山に変わってしまうとは。

東尾根に A、C を上げた目的は、少しでも伝説的になっている荒沢の厳しさに触れたいであった筈だが、これでは *Bush* さまのトレーニングである。重い心で稜線上に登る。16ピッケ目、雪面にでる。17ピッケ目で、小合岩に着く。天候の良いのがまたしもの慰めである。辺りの景色を眺めながら、ポックリポックリとジャンクション目指して登る。背に当る陽が暖かい。雪が溶けて靴がビショビショにぬれだす。北穂についたのが、12時丁度。剣に向って黙とうする。麓から眺めた剣は実に素晴らしい。大窓、小窓三ノ窓が、丁度ノコギリの目の様になって見える。ナンネが黒々した姿を向けているのも奇怪だ。1度で良いから冬の剣に立って見たいものだ。12時5分

頂上出発。第2岩峰(東尾根上の)で、南稜パーティを待つ。程なく彼等が登って来た。聞くと彼等も南稜自体は期待はずれで、B、Cフェースが楽しかったそうだ。第一、第二岩峰のコルよりグリセードで假はしA、C上に帰幕する。

何度も書くが、荒沢程、イメージと、現実の異なった山行はなかった。有すかしをくらった山行とも云えようか。しかし僕たちは幸せだ。たまたま厳しさを求めていたのか、たやすく登れたのだから。山に於ては又この反対も有り得るのだ。何時の場合に於いても慎重を期し、万全の精神、肉体の準備をしておかなければならないと云うことを山から実際として学ぶことが出来たと思う。これからは、期待はずれの山行になっても嘆くまい。それだけ僕達が、準備をしていたと云う証拠なのだから。

(柏 敏 明、記)

一◇ 荒沢奥壁南稜から南壁 B フェース ◇

メンバー、 武田、堀崎

5月3日 東尾根上 A、C を 4 時 40 分 出発。

空は今日一日の晴天を約しているかのような一面の星空である。荒沢尾根を皿峰のギャップまで下り、そこから南稜側に落ちるせまい急なクロアールをフィックスを頼りに下り、荒沢尾根と南稜の間の広いルンゼにおり立つ。

南稜の末端を右にまわりこみ、5時30分取付に着く。取付は広いルンゼである。小休止の後、アンザイレンに取付く。ルンゼは昨日降った雪と氷におろわれいやな感じ。20m位登り、左に出ると稜線上にすぐ出れるのだがルンゼの底のトラバースは氷がつかついて非常にやばく、全く手が出ない。仕方なく右上する。傾斜ゆるく、ブッシュがあるので糸に登れる。しかし時々上から自然落石がいやな音をたてて落ちてくる。40mいっぱいでブッシュにまたがりビレー。10m程直上するとコンティニアスで行ける。しかしすぐ直上出来なくなり、スタッカットに戻り左へトラバース。くるぶしまでの雪である。2ピッチで稜線上に出るが稜線の手前は完全な氷でカッティングをやらされる。

稜線上はなんという事もなく、右にまいたり、左にまいたりして1ピッチ。風曲点に出る。もう1ピッチ稜線上を行くと南稜の核中部。ここだけは全体に傾斜のゆるい南稜中で壁となっている。壁の下でビレー。気を引き締め取り付く。まず5m程左へトラバースし、そこから右上に急上昇するバンドをトラバース。ビレー点の真上でリッジに出る。リッジはすぐブッシュが現

れ、核心部もなんなく登りきり、何かあっけない。ブッシュの中をノピッチで終了点に出る。

7時45分、ガイルをとき、左上へブッシュをこいだり雪渓を割ったりして、Bフェイス下の下のテラスと呼ばれるところに出る。日が当り、気持ち良く、こゝでアタック食を食やながら、ルートを探す。取り付きは壁の中央よりやや右でルートは左上しているようだ。

9時取り付く。まず左へトラバースぎみに登る。途中3本のハーケンにカラビナをかける。左へ左へと登りすぎ、ハングにおさえられ行きずまってしまった。色々試みるがどうしても越せない。仕方なく5m程下り右上へ、浮石の多いバンドを登る。カラビナを通ったガイルは大変重くバランスかくずれて苦しい。ようやくガイルをひっぱって35m程登り、小さなグラグラ動くブッシュに登りつき、ビレー。こゝから右にまわり込むと又もやハングにおさえられ残置ハーケンがあるのでも何とかなりそう。アイスハーケンス本とロックハーケンス本打ち残してある。1本打ちたし、アブミを2回セットし越そうとするが、出口にホールドなく、ピトンも打てない。リスを必死で探すがどうしても打てない。登ったり下ったり4回繰り返しやっと左に大きく足元のばしてスタンスを見つける。大きく隔いた板の間から荒沢の底が真下に見え高度感充分。細い木をホールドにやっと乗り越す。

3m程上に大きな木がありゼレーピンとする。木は凹角になった岩の間に岩と平行に生えている。左へ出ようとするがつつるつるでハーケンも打てず引き返す。木を出来るだけ上へ登り、ようやく右の壁に出る。ここも非常なバランスをしいられる。右へ出て5m程登ると、ブッシュが現れてほっとする。ブッシュを頼りに登ると、壁につきあたる。こゝでビレー。10m位の高さで横にずっと伸びている壁の下のブッシュの中をノピッチ進むと壁が切れる。猛烈なブッシュをこいで登ると、前が開け、雪渓が現われその後Aフェイスが大きくぞびえている。こゝが上のテラスである。

ガイルを巻きAフェイスを見上げると、よそのパーティが取り付いている。ほとんどアブミに乗りっぱなしのようだ。「いつか必ず登るぞ。」とAフェイスを見ながら、壁のすそを右にまわり込み雪の上を10分程登り、東尾根の上に出る。12時30分、三の沢へグリセードで下り、A.Cへ帰った

(塩崎将美 記)

北アルプスUターン縦走

定着合宿を行った、剣岳二股のベースキャンプから、立山、後立山の稜線を白馬まで縦走、メンバーは、リーダー、3年生柏、4年生村上、2年生八島、1年生上本、浪川、以上5名である。

7月31日 晴

二股ベースキャンプを、他のメンバーに別れを告げて出発。我々以外のパーティは、1度富山まで下りて、それから縦走・縦行に出発する。村上さんだけに剣岳から、雷鳥まで行ってもらい、他の4名は、三の窓の雪渓を登り三の窓のコルのACテントを、撤収し、本峰を越えて雷鳥まで行く。雷鳥荘にあずけてあった荷物を受け取り、第一日目のキャンプを残る。

8月1日 曇り後晴

雷鳥より五色ヶ原まで、荷物、1・2年生9貫平内、特別重くない荷物である。一の越まで、1ピッチ、約1時間のペースで、3ピッチ、竜王などピークを越えて坂くと、ガラ峠に出る。こゝで昼食を取る。ガラ峠より見上げると、かなり急に見える登りも、なにと云う事はなく、峠より、40分、五色ヶ原に着く。(12時/5分) この日夕方頃より、浪川の腹の調子がおかしくなる。

8月2日 晴

五色ヶ原から間山まで、朝5時起き6時出発。前日は、30分出発が遅れたが、後は、縦走中、全て5時起き、6時出発であった。浪川、体の調子悪く、一斗カン二個と個人装備だけで出発。スゴ祭越まで、4ピッチ、浪川かなりバテながらも付いて来る。スゴ祭越で、テント地を聞くと、間山まで行かぬは無じという。間山のテント地まで1ピッチ半、浪川がいよいよバテて来たので、村上さんに付いてもらい、他の三人は、先にテント地に急ぐ。テント地は水場がなく、道の端にテント/5張り、張れる程度でかなり悪い。仕方なく、道はたのタマリ水の池を挟む。完全に煮沸しても、またかなり、においが残る。全員少しクレオソート丸を飲み、食事をする。浪川全然食欲が無く、下痢がはげしい。急性の胃腸炎らしい。ちなみに、エッセンはと云うと、朝はすべて中華メン、昼食は、ソーダクラッカーを、三回に一度つつ、夕食はメネズを主体に中華メンが縦走中に二回でありかなり軽量である。

8月3日 晴

間山より上ノ岳まで、浪川を個人装備だけにし出発する。栗駒岳、7時30

分、太郎小屋の午前で昼食。太郎小屋にて薬をもらい、上の岳の頂上付近の雪道をたよりにテント地を上の岳までのぼす。上の岳頂上より、10分程度進んだ所に、快的なテント地を見つける。テントの足とも有り、おどろいた事に、水まで流れている。14時10分、しかし指定地でない為、始末書を取りれる。

8月4日 晴

上の岳よりミツ俣蓮華まで、昨日上の岳まで、かせいだので、時間的にはずいぶん得をし、黒部五郎の下小さな小屋まで、スピッチ、黒部五郎の登りは、約1時間半、ブッシュの中を真すぐに直上するもので、かなり苦しい、ミツ俣着、1時15分。

8月5日 夜後霧雨

ミツ俣蓮華より、烏帽子岳まで、浪川はすっかり氷の調子があり、ミツ俣から、そり立っている、鷲羽を一気に登り、赤岳、野口五郎、ミツ岳を越えて、烏帽子小屋テント地へ着く。(11時30分) テントを張り、一度落ついてから、烏帽子小屋に水場を、聞きに行くと、南沢岳の下まで行くと、良いテント地があると云う、時間も早いので、1度張ったテントを倒しスピッチテントを前進させ、南沢岳下の湿地に張る。

8月6日 晴

南沢岳より船窪小屋まで。覆山の寂寥期であるのに、ほとんど人の居ない雑木林の稜線で、時に不動岳から、先に進むと、南アルプスの山中を歩いているようで、北アルプスの稜線を歩くという感じがしない。

船窪の小屋にテントを張り(12時5分) のんびりしていると、水渡、菅、井上のパーティが来る。積る話に花を咲かせ、久しぶりに8人の大所帯となる。

8月7日 晴

船窪小屋から針ノ木峠まで、小さなピークを越えて北嶺に登り、相当に低くなっているコルまで、いったん下り、又登りをしま上に来ると、風化した蓮華岳の頂上である。それより、だらだらと下ると針ノ木峠である。(11時20分) 水場は遠く、往復30分。

8月8日 晴

針ノ木より鹿島槍ヶ岳、峠よりノビッチで、針ノ木の頂上に立ち、スバリ沢沢と越えて、岩小屋沢岳までこのあたりから、縦走路は、平坦になり、いかにも俊立山の縦走といった感じがして来る。前方には剣が全望をあらわし、リターンしてまたという感が強くなる。蘆池にて昼食、これより冷池を

通過して、鹿島の上まで行く事にする。鹿島槍、17時の5分、全買コテバテである。冷地のあたりから1ピッチの距離がだんだんなくなり、冷小屋から、3ピッチかかる。テント地は北槍と南槍とのコルに張り、雪渓の雪を挟う。

8月9日 晴

鹿島から天狗小屋まで、鹿島からすんずんキレット小屋に向かって下り、小さな岩のピークばかりある。八峰のキレットをたんねんに越し、五竜のピークを越し、白紙の小屋の少し先きで、昼食を取り、唐松の小屋までのびる。12時30分、しかしまだ時間が早いので、不帰のキレットを越える事にし、唐松の小屋を後にする。不帰の工峰を越えるともう、一、二年生、昨日からの強行に、完全にバテている。不帰の工峰より、1ピッチ半、天狗の小屋まで足を延ばし、テントを張る。(18時10分)

8月10日 晴のち雨

天狗の小屋より、2ピッチで白馬山荘に到着。人の多いのと白馬の騒がているのに驚く。10時30分位まで頂上付近でのんびりし、大雪渓を下り、張倉にて解散する。

——八島 修一郎 記——

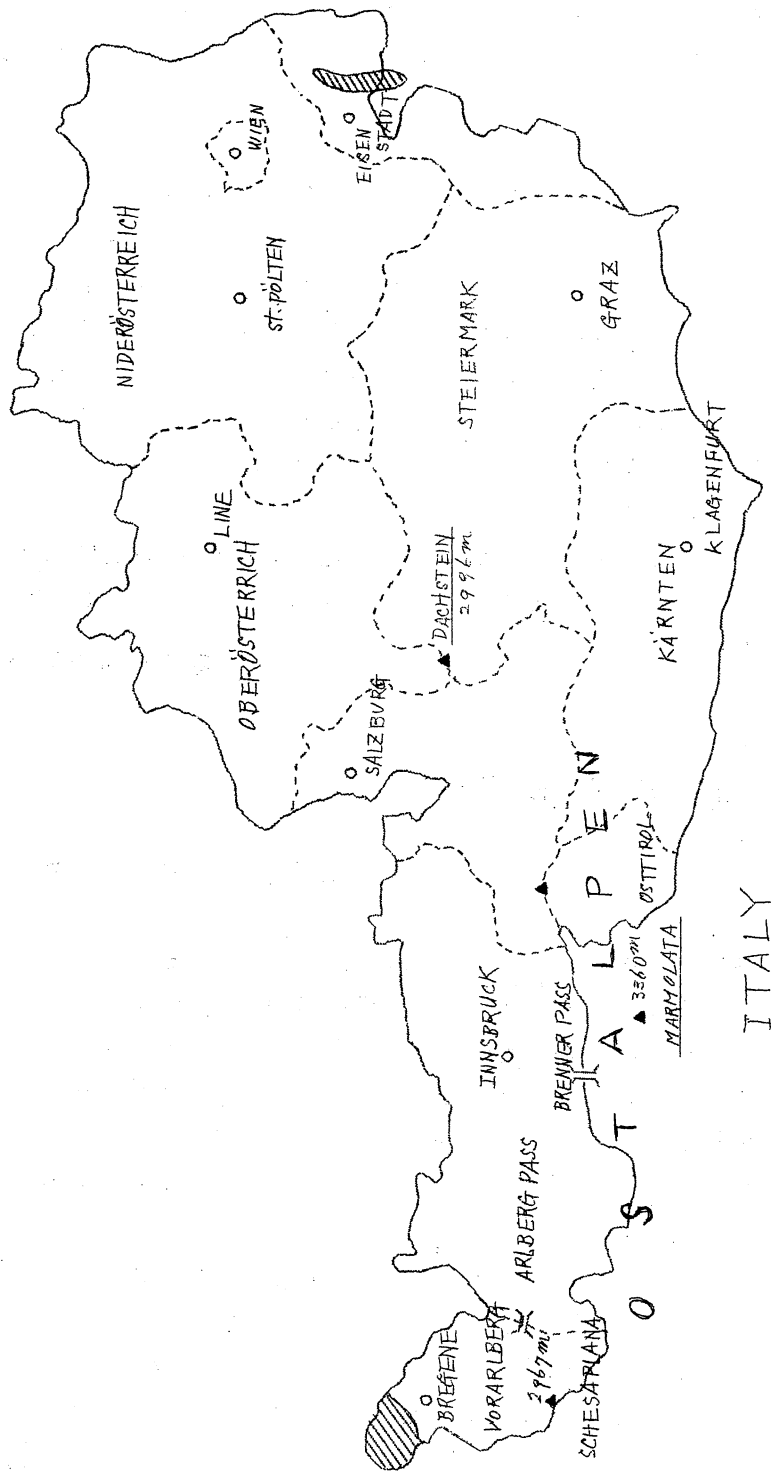
東アルプス紀行

GRAB 1963年

田 辺 潤

今年の夏休みには、新しく知り合った友人と共に、念願のアルプスの何処かへ行く約束をしていた。しかし両方の都合が旨く一致せず、一人で行かなくてはならぬ事になった。高い案内書や地図を買い込んで眺めてみると、こちらの山では西も東もわからぬ小屋にでも、行けそうな所がある。同じ行くなりやはり氷河のある所へ行きたい。しかし西アルプス（スイス）のZürcherなしの氷河歩きは、東アルプス（オーストリー）の未経験者には論外である。と、どの案内書にも書いてある。それで案内書に挿入されている写真の中から面白そうな山を又山小屋以外は車の中で寝るとして、道順に都合の良い山々を三つ選んだ。オーストリーのほぼ中心に位置するHOHER DACHSTEIN 3996m イタリアとの国境に近いチロルのGROSS VENEZIGER 3674m とドロミテの中では珍しく大きな氷河をもつMARIOLATA 3347m である。

ÖSTERRICH = AVSTRIA



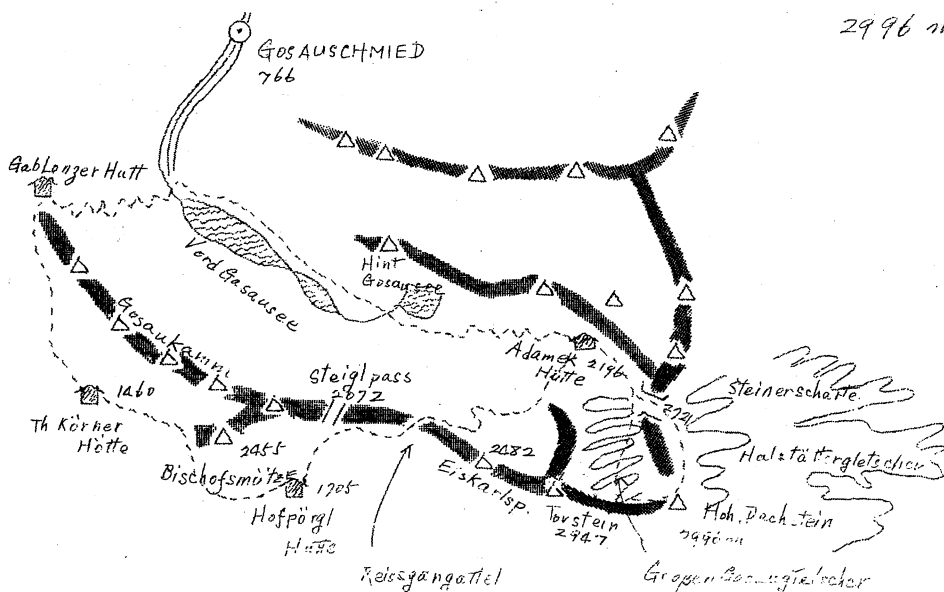
9月15日 快晴

Graz - Stainach - Badaussee - Vorder - Gosausee

今日はいずれにしても Gosausee までしか行かないつもりなのでゆっくり走る。天気は一点の雲もない快晴だ。ヨーロッパと云うところは素晴らしい。ここもきれいなんだろうか。牧草色のグリーンが何とも云えぬ程美しい。Salzburg への道を Badaussee で左へ、舗装もなく、せまくしかも急な下り坂だ。下りきった所で Lautatter 湖に出る。空も水も澄み切って神秘的なまでに美しい。再び左に折れて Gosau 湖へ道は Gosau 湖の落口までしかなく、駐車場に車を置いて湖へ上ってみる。真正面に目標の Dachstein 及び Grab Gosaugletscher の下半が見えている。氷河の下はすごく大きなモレーヌ地帯である。湖のすぐ右手には剣のハツ峰を何倍かしたような巒々が並び立ち、Gosaukamm の名がついている。望遠鏡でのぞくと明日の行程であるモレーヌ地帯にジグザグの道が Adamekhiitte へと続いていてかなりの道程だ。湖は観光客でにぎわっている。湖をぐるりと一周して車に帰り、すでに車の少なくなった駐車場でお茶をわかし、バットを作って寝るしたくをする。川も横にあって車の中で寝るには最高の場所だ。

HOHER DACHSTEIN

2996 m



9月16日 快晴

U. Gasaensee 7:00 - Adamashutte 11:00 ~ 12:30 -

Id. Dachstein 15:00 ~ 15:30 - Steinerharte 17:00 -

Adamashutte 17:30

今日もまた一点の雪もない快晴だ。いつもながらのまずい朝食を無理矢理つめこむ。一台車が早々とやって来て登山者が二人登っていった。ピッケルを有にさし小生も続いて出発する。まだ日のあたらぬ湖の際をピッチをあける。湖をすぎると道は少し上りになり、林道となる。右手にすごい岩壁が近づいて来る。少し急な坂が続いた後、Winter Gasaensee に出る。ここからは急な登りでジグザグだ。淵沢への登り口、阿曾原の登り。それらよりジグザグも多く急であろう。以前は、ここは氷河氷端のすごい Eisfall になっていたのではなかろうか。そして兩岸がせままっているため、この Id. Gasaensee が出来たんだらう。登るにつれて氷河によって削られた岩が目につくようになる。大きいのは巾20cmくらいで、20~30cm もの深い溝になっている。上より夫婦らしき登山者が下りてくる。オバサンの姿を見て驚いた。学生時代の合宿の途中、重い荷物をかついて居るときにこんなを見たら、足をふみはずして谷底に落ちてしまっていた事だらう。周囲は歴然とモレーヌ地帯であることがわかるようになる。タバコを吸って今来た道をふりかえると上から三つの湖が未だ朝日にあたらぬ深い色で、両側の岩壁を写している。はるか彼方まで見渡せる。左手に見えるのは Tennen Gebirge だらうか。Gasaunkamm もここまで来るとそう大きくは見えない。朝日の中へ入って暑く汗が出た。道は殆ど変らずのジグザグ。たんたんへばって来た。腹がへって来たんだらうか。やっとはるか上方に小屋が見える。あと充分ワンピッチはあるだらう。小休止してパン、チョコレートをかじる。黒パンは全くつまなく、水でながしこむより外はない。二人後から来た人たちが追い越して行く。そろそろシーズンも終りに近づき、殆ど人影もなく静かだ。さあ、あとワンピッチ。右側に見えていた岩壁は、はるか下になっている。Adamashutte に到着。氷河のすぐそばに、石組みの質素な小屋だ。中へ入って行くとすぐ madchen が出て来た。今夜はここに泊れるだらうか、と聞くと Ja の返事。Schwarzer を飲みながら、しばらくボンヤリ。今日はここまでの予定だが、今から頂上へ行けぬこともなさそうだ。しかし時間がどのくらいかかるのか全く見当もつかない。外に出て氷河、岩壁、頂上を眺める。二年ぶりの登山。実に気分が良い。2~3人いた登山者が今から頂上へ行くような事を話している。彼等に行けて、自分に行けぬはずはないだらう。

。時間がなく、なれば引き返して来るまでだ。といそいで腹ごしらえをする。
。ヤッケのポケットに少し食料とカメラをもつて出かける。はじめての氷河
歩きだ。見たところ雪渓とあまり変らない。アイゼンをつけねばならぬ程の
傾斜でもないが、時間をかせぐため四つ爪をつける。さすがに雪渓と違って
堅い。下はやっぱり氷だ。水が大きな溝を作つて氷河の上を流れている。帰
りに通る予定の *Steinerscharte* は左手の稜線上のいずれかの窓であるはず
だ。左手を注意しながら歩く。*Scharte* と云うからには一すした *col* 或い
は窓であるはずだ。しかも一般登山路であるはずなのだから、そんなに困難
な所であるはずがない。にもかゝらず下から見た所、ザイルを使わずに左
手の稜線に出れそうな所は見当たらない。氷河は少し傾斜をまし、フレグ
マスが現われる。一度のぞいて見まやろうと氷河の真中の方へ出て行き、フ
レグマスの縁に立つが、そのまゝではとても覗きこめぬ。腹這いになって顔
だけ出す。窓の方はせまく暗くなってどれだけ深いのか見当もつかない。眼
込まれるような感じだ。良い感じはしない。フレグマスの側面は氷の層がは
っきり見える。左手の少し切れ上った岩壁の中程に鉄梯子がかかっている。
成程これが *Steinerscharte* へ登る所だ。梯子の上はガラ場の急坂で、上
から下つてくるときは少し緊張するだろう。上師は想像に反し、窓と云うほ
どのものでもないし、*col* と云う程のものでもなく、稜線が少しへこんで
平らになっていると云う程度だ。帰りには何側より *Steinerscharte* へ登る
ため恰好を頭に入れておかねばならない。氷河上半部は緩い傾斜となり雪渓
となる。氷河を登り切ると、国境稜線に出た。南側はスツバリ 5800m は切込
んでいるだろう。はるか下方左手の *Wiese* の終る前に小屋が小さく見える
。 *Dachsteinsudwand Rütte* だろう。途端に立っているのが、こわくなって
坐りこんでしまう。腰の力が抜けてしまつて再びもう何う側をのぞきこむ気
もしない。タバコを一プク吸つて肩を落ちつける。こゝから頂上まで稜線だ
ある。なるだけ南面の落込んでいる方へ出まいかないうようにして踵蹴をたど
る。少し危険な所には鎖或はワイヤーで *Sicherung* してある。丁度池ノ谷
表畵より駒本峯への登りの様な感じだ。頂上はあまり広くなく大きな十字架
がたっている。肩籠が置いてあつて「お山を汚さぬ様」と書いてあるが肩籠
は一杯でミカンの皮や空缶等ちらばっているのは、どことも同じだ。登つて
来た道は氷河より小屋へ東に下の3つの湖へ流し、右下には *Wallsfatten* 氷
河から *Wassstatter* 湖へとゆるやかな傾斜でスキーに恰好のゲレンデだろう
。南面は約 800m の高差を持つ *Dachsteinsudwand* で、Ⅲ反至Ⅳの困
難度である。左手西方に *Tarstein* の巨大な岩壁と岩稜が国境稜線の行手を

をえでいる。頂上より *darstattergletscher* への下りは上から見れば、殆んど垂直の岩壁である。恐る恐る足をふみ出す。10m程下った所で下より鎖をがちゃつかせながら、オジサン続いて *madchen* ともう一人オジサンに登って来る。通路をよけて、こんな所でヘッピリ腰をしていたのでは駄になると、腰に両手をあてて、イイ恰好で待つ。挨拶をかわして、しばらく話していると、もう1パーティー夫婦づれに登って来る。ザイルで *Sicherung* している。こんな耳寄りや、娘さんでさえ、こんな所に登って来るんだ。と思ったら急にファイトが出て来て膝もシャンとする。鎖はついているが、もしなければ、とてもザイルなしでは一般登山者には無理だろう。鎖にぶらさがりつつ *dullstattergletscher* に下りる。すでにこちら側は陽が陰っている。左手の稜線にそってシュプールをたどり、ゆるい傾斜を走るように下る。かなり目立つ窟が左手に見える。あれが *Steinerscharte* だろうと目指して進むが、途中でシュプールが消えてしまっていて、そのすぐ左手の岩壁に赤い印がついている。しかしこの岩壁は稜線へのび、再び頂上へと続いていくのだ。窓まで行ってみるか、二の岩を登って稜線に上るべきか、迷っていると後より二人下ってくる。その人たちに *Steinerscharte* への出口を聞いてみたが、やはりわからない。窓へのシュプールがないところをみると、恐らくこの岩を登って稜線に出るべきなのだろう。やっというものの調子を取戻しているので調子良く登り切って稜線に出る。すべ10m程下に少し窪みがあって何か *レリーフ* が立っている。それを読んでここが *Steinerscharte* であることがわかる。すると先程のもう一つ下の窟は *Simonscharte* であろう。夕日に輝く *Grab Geraugletscher* のクレヴァースが素晴らしい。氷河をはさんで対岸は *Tenstein* の東壁だ。先程の二人の人たちと一緒に *Scharte* より下り出す。下から見ていた程困難ではなく、かう陽を走って下る。最後の鉄梯子も見ていたよりはずっと頑丈で大きなものだ。氷河はグリセードが出来る程の傾斜もないので走るより仕様がな。腹がぺこぺこで何度も足をとられる。小屋の前では大勢の人たちが日ナタボッコとオシャベリである。小生もその仲間入りして日ナタボッコしながら、外国でもはじめての山行に満足感を味いつつ、ついさっきその上に居た頂上や氷河、又明日行く縦走路等眺める。2年ぶりの登山で、足腰は勿論なにもかも、たまってしまうのがよくわかる。すっかり疲れてしまってもう動く気もしない。陽がしだいに陰って寒くなって来た。氷河をよ6人下って来る。日のある内に小屋につけるだろうか。しかもルートからずっとはずれてしまっている。小屋に入って昼食を注文し、ホンヤリ人々の話を聞いたり、眺めたり、こう云う時に

単独行は全くつまらない。かなりおそくなつて、先の氷河を下つて来た人達が小屋に入つて来る。頂上直下であつたオジサンのパーティだ。氷河上のルートの手で、小屋の中はひときわにぎやかになる。疲れて、もうとても我慢出来ぬ程ねむくなつて来た。早々に尾根裏の階段ベンドにもぐり込む。

9月17日 快晴

Adamekhütte 6.15 — Reisinggsattel 8.00 — Isopfürgelkhütte
10.30 — J.H. Köbnerkhütte 14.00 — Gahlonzhütte 15.30
— V. Gosaureel 16.50

突然人々の騒々しい声で目がさめる。一体何事が起つたんだらうかとも布から頭を出してみると、晴巴里の中で皆登山の用意をしているらしい。時計をみると4時である。こっちは先を急がないので、ねむいところをおこされて御機嫌斜めである。ウトウトそのまま5時まで寝る。部屋の中はもう誰もいない。急登のように一人食堂に下りて行く。こゝにも、もう誰もいない。飯も食わずに皆出発したんだらうか。外に出てみると天気はあまり良いとは云えない。氷河の上にボツボツ人に見える。早い人はもうかなり上部にいる。さあ、自分も出かけねばならない。小屋から氷河末端部へ下る。氷はモレーヌにしみこんで、土の中を流れてくるのだろうか。末端部に小さな池があるだけだ。氷河末端の沢の底から小屋とは反対側の斜面に出、Tarstein, Eiskarlspritze のカールに入る。左手上部に Klein Gosaugletscher があるのみで、上部は180度岩壁、岩稜、下部はガウ場と地獄の底にでもいるようだ。別にたいして危険なところもないのに、あちこち蘆薈碑が立っている。いずれもス〜30年も昔のものであるところをみれば、当時はこゝも危険なところだったんだらうか。しばらく行くとオーバーサンのパーティに追いつく。同行の男の人が小生の行先の道を親切に教えてくれる。カールをぐるりと一周りして Gosaureel の稜線に出るのだが、稜線に出る部分は岩壁上部にあるガウ場のバンドをトラバースせねばならない。この道は Lingerweg と云う名がついている。少し危険なところには必ず鎖がついており、岩壁中のバンドも下からみてもよりはずっと巾も広く、何の危険性もない。稜線からは西南方遠くに白く輝く山々が見える。恐らくオーストリーの最高峰 Grab Glockner と次の目標である Grab Wundiger だろう。Reisinggsattel への下りは、鎖場を混えた急坂で、昨日からの靴擦れと爪先が痛く、ブレーキをかけられず走つて下るより仕様がな。sattel から下は一段のきついガウ場の下りだ。下り切った前が牧羊地 (weide) で、とにかくにも坐り

こんでしまう。仙先と靴擦は、もう痛いところのさわぎでなく、膝はガクガクだ。左手前方の *Wiese* の上に *Daffnirglhütte* が、右手には高差500~600mで *Bischofsmittze* が、名の如く帽子の様な恰好で稜線上にそびえている。日がカンカン照り出して暑い。*Daffnirglhütte* をすぎると道は、*Gosaukamm* にやって *Wiese* の中をたいた盛りも下りもなく、延々と続いている。人ツ子一人会わない。時々牛の群に出会うだけだ。誰もう黙々と歩くのみだ。時々止まって *Gosaukamm* の岩峰、岩壁を眺める。汗は滝のように流れ、のどが渇くが、水筒はすでに空っぽになっている。しかも何一つ影とてなし *Wiese* の中である。日本で云うならばお花畑なしろろうか。こういつまでたっても *Wiese* はかりでは、そんなロマンティックな気分も出てこない。やっと *Wiese* の中の泉を見つけ、どっかり坐りこんで水を飲み、リュックサックより錫詰をとリだす。何気なく見ると "*made in Japan*" と書いてある。鮎の錫詰だ。やっぱうまい。これをサンドイッチにするとまずい黒パンも何とかのどを潤る。もう *St. Kirmserhütte* は近いはずだ。*Gosaukamm* からの大きな沢が *Wiese* を二分している。上部のカールには雪渓も氷河もなく、完全な涸沢である。沢から *Wiese* に出た所に *St. Kirmserhütte* がある。予定では今日はこゝまでなんだが、明日も又こんな *Wiese* を歩く気はしない。時間もまだ早いし今日中に山を下りよう。*Gosaukamm* の眺めただけでは相変らず素晴らしい。牧草地帯から、崖松地帯、灰色の岩壁へ、それから青い空へ、とコントラストの美しい事。しばらくしてやって *Wiese* も終り、道は林かガラ場となる。*Gablungerhütte* から足元はるか下方に、*V. Gosausee* が、森の緑の中に明るくブルーの色を見せ、ボートがあちこち小さくゆっくり動いている。何だか静かだなあー。と考えて見ると、日本の様にラウドスピーカーからの流行歌が聞こえてこないからだと思づく。こゝからの *Dachstein* は、まるで絵をみているようだ。*V. Gosausee* からジグザグの路が *Admekhütte* へ続いているのが白くひかってみえる。*Gosaukamm* の岩壁が目の前にある。灰色の堅そうなすっきりした岩壁だ。せめてこれくらいのすっきりした岩壁が一つでも日本にあったらなあ、と羨ましい。*Gablungerhütte* からの下りは、もう100m走って一息つき、靴擦の痛みがおさまったら、また走る。と云うように、ジグザグの道を半ばヤケツパケになって下る。

9月18日 曇時々晴

Gosausee - *Spittal* - *Lienz* - *Matrei*

7月19日 曇時々晴

Matrei 7.30 - Matreier Tavernhaus 8.30 - Immergrächliss 10.00
- Alte Pragerhütte 11.45 - Neue Pragerhütte 12.45 - 引返点 (3400m) 15.15 - Alte Pragerhütte 16.30 - Immergrächliss 17.45

バスは山へ中をおろしに行く百姓達の他、登山者は小生一人である。一時間程乗って狭い谷から広々した盆地へ出たところが Matreier Tavernhaus である。Gasthaus へ入って行って上の小屋がまだ開いているかたずねる。はっきりしたことはわからないが、小屋番はまだ残っている事は確かだろう。ゆるやかな自動車道を Immergrächliss 向け歩き出す。谷は再び狭くなって、道は大きく高まきしている。坂を登り切ったところで目の前に、曇空のため汚い色をした巨大な Schattentee の Eisfall が現われる。上部はガスのため見えないが、スケールは Dachstein の Gosaugetäcker など問題にならない。山そのものもスケールは一周り大きいだろうか。やはり日本のどこにもないスケールを感じる。道は平らになって Immergrächliss に入る。ひなびた白萩の伊豆那路のような感じのする。しかも山の中の一部客らしい所である。ガスが低くおりて来て、とうとう雨が降り出した。道はこいて 左へ Liebbener Thierl 右へ Alte Pragerhütte へと別れる。バスの中で決めた如く右へ道を取る。川を越えるとジグザクの急坂である。辛い事に雨はたんたん水降りになる。突然右上方の草の中からゲエーと奇妙な声がする。おどろいて見上げると、真黒もの Back (野生? の山羊) がニコリともせず、こっちをジーンと見下している。こう云う示唆に眺められると、逆にこっちが馬鹿にされているような気がして無性に腹が立つ。Trattel! と、どなりかえしてみても何の反応もない。雨が止んで雲が切れ、日がさしはじめた。一段ゆるやかになったところで Eisfall を上から見下す位置に出る。丁度切れた青空に映えて、無数のフレヴァスのライトブルーがセラックスを昇らせている。はるか上方青空の中に小さな Acte, Pragerhütte が見える。羊の一群が小生めがけて下りて来る。何事だろうと立上ると、ぐるりと小生を取り囲んでメエーメエーと見上げる。恐らく何か餌が欲しいんだろう。もうこのあたりは草も枯れて、間もなく彼等も山を下って行かねばならぬだろう。急坂が終ったところで Alte Pragerhütte に入る。中へ入って行くと母寄夫婦の小屋番がいる。今から小屋を閉じて山を下るところだと云う。この山奥で、まだ開かれていた小屋はもうどこにもないぞうた。道理で一人の登山者もいず、会わなかったはずだ。せつかくここまで

登って来たのに引返すのはどうしても残念である。Matreier Tavernhaus までの帰りの時間3時間を計算に入れて、3時まであと3時間あまり行動できる。とにかく行けるところまで行ってやろうと Neue Pragerhütte 向けて歩き出す。左下方に氷河を見下しながら、ガレの中を大した登りもなく、Neue Pragerhütte に着く。非常に立派な小屋だ。戸も窓も閉ざされ、冬期使用の注意書が目につく。小屋から急なモレーヌを氷河に向かって下る。氷河の手前に「氷河歩きは Führer とのみ」と Alpen Verein の札が立っている。如何にすべきか。単独行と云うものは、行動を慎重にさせるばかり並にその反対にもさせるわけだ。しかも他に誰一人登山者はいないのだ。そして3時までと云う時間の制約である。見た所氷河上にはまだシュプールが残っている。もし危険な所に来れば、潔きよく引返すまでだ。氷河の表面は新雪がとけてザクザクである。しばらく登った所ではじめて、クレヴァースにぶつかる。シュプールは、たくみにクレヴァースをよけながら登っている。しかし所によっては俄截さねなならぬ所もあってあまり良い気持ではない。もしシュプールがなければ、やはりここで引返していた事だろうか。クレヴァース地帯を二えると雪の斜面となる。恐らく頂上までこの雪の斜面が続いているのではなかろうか。ガスはあまり濃くないが、風が強く、吹雪が頻に降り。頂上が一瞬ケラリと見える。左手に Schwarzwand 1406er Zann, Krustall Wand が氷と岩のミックスでキレイな三つのピラミッドを見せている。ちょっと後を振り返ってみると、風のためシュプールが半ば見えかかっている。この広い斜面でガスにまかれ、シュプールがなくなるともうどうにもならない。右手に Klein Venediger が、うっすらと、ガスと吹雪の中に殆んど自分と同じ高さに見えている。およそ 3400~5000m の位置だろうか。時計もすでに3時をすこしまわっている。頂上は相変わらず、ガスと風の中である。残念ながら引返すより他はない。寒々とした曇空の下に、雲も薄茶化して、Jannergschliss の村が Gschlüss Bach をはさんで見えている。Neue Pragerhütte には立ち寄りず、じかに Alte Pragerhütte へガレの中を走る。Alte Pragerhütte にはもう番人もいない。小屋の下のジグザグ道を背に荷をつけた馬を追って小屋番が下って行く。最後の荷を頼んでおりて行くんだらう。薄暗くなって、Jannergschliss に着く。一軒ある Gasthaus に入って行く。客は小生一人だけらしい。部屋の間から見ると、ガスがずいぶん下まで下りて来て、氷河も見えなくなっている。遠くを小屋番に引かれて荷馬も、こっちへ帰って来るのが見える。

9月20日 曇後雨

Inneregschlüss - Matrei - Tieng - Toblack - Cortina d'Ampezzo -
Kilagenfurt - Graz

Inneregschlüss を朝早く後にして、Matrei へ下って来る。昨夜は雨だったらしく、どこもしっとりと濡れている。時々晴れたりするので、南は意外良い天気かも知れぬと、期待してイタリアへ国境をこえる。Toblack (Dobbiaco) をすぎてもなく、Cortina に近くなって見える。

M. Cristallo 3216m は何度見ても素晴らしい岩峰である。やはり天気は悪くガスが岩峰を取りまいている。Cortina d'Ampezzo は夏も過ぎ、もう殆んど、避暑客の姿も見えず、ホテルの立並ぶ静かな通りを走っていると、やはり秋である事を感じる。ついで 潤問ばかり前、アメリカから来た畠田とこゝを逢った時は、新雪のあとの好天に恵まれ、人と車であれ程賑わっていたのに、Passo Pordoi へ行くため、町を通り抜け登りにかゝった所で、猛烈な雨となる。雪はしだいに下って来て、Cortina を取巻いているドロミテの峰々も全く見えなくなってしまった。Marmalata の麓までいって、天気になるまで待つてなくなるが、いつ晴れるともわからぬし、車の中で一人で何日もすごすのは、あまりにも退屈すぎる。せつかくここまで来て借しければ、又来年という日もある。再び Cortina へ引返し、土砂降りの中を Graz へ帰る。



山岳寮

甲南大学について思う事

戸川 啓 義 弘

今後の大学山岳部のビジョンという課題を与えられました。この課題は私にとって範囲が広すぎますので、範囲を甲南大学山岳部にとって、思いっくまを書きことをお話し下さい。

マネージメントシステムについて

マネージャーは専門的にそれをやってくれる人を探し、その人にこのポストの経済的権限と権威を与える事が重要だと思います。現在、合宿の主カメラマンである人が、マネージャーのすべき事の一部をやってみたり、マネージャー自体のポストがなんとなくあやふやで、色々と役割が分散される傾向があるようです。そういう事は色々な面から考えて、マネージャー自身にも負担になると共に、クラブ全体にもロスが生じて来るのではないかと思います。

マネージャーのポストを上のように明確にする事は、それだけマネージャーに負担を多く掛ける事になりますから、人数が出来るだけ多くの方が良いと思います。しかし人数を集めるにも、じみ名称のマネージャーをそう多くの方が引き受けられるとも思いません。だから専門的にマネージメントを引き受けられる人にはそれだけの特点が与えられる様にしたいものです。特点を明らかにし、その後に山岳部というものをよく理解してくれるマネージメントに長じた人を常に探しておれば、それだけたやすくマネージャーを見つけ得ると思います。

大切な事は、マネージャーの役目、持点、その他をマネージャー自体はもち論、クラブ員全体に理解される事だと思っています。アクティブメンバー又はフレッシュメンバーにしても、マネージャーの役割、持点、その他のことを理解していなかったら、いくら立派なマネージメントは取れないと思います。

良きマネージャが生れるという事はクラブ全体にロスが少くなり、良きリーダー、良きメンバーが生れ、良き計画が生れ、ひいては遭難の防止になるとまで言えるかも知れません。

学校とクラブの関係について

私は甲南大学山岳は甲南大学の学生の中の存在で有りたいと思っています。そうなれば、どれだけ楽しい事かとも思います。

私たちは甲南大学山岳部員であり又山入たる誇りと責任を持っていると思います。しかし、それがエリート意識と受けとられたり又、いわゆるお山の大将で人よがりになるのは良くないと思います。あらゆる機会を見つけて私たち自身理解されるようにしたいものですが、案外授業やゼミナールへ行ったら、クラブのことを理解している人は少ない事に気がつきます。

「甲南」といえば、「山岳部」とピンと来るようになれば、こんなに良い事は有りません。こういう状態になれば、例えば遠征計画を出すにしても学校が許さなくとも、学生がどんどん協力して学校も許さざるを得なくなると思います。

私たちの山岳部が長く発展するためにも、まず私たちの学校内での理解者を多くして行きたいものです。その手近な例としては、親しく教授や学生と話すことの出来るゼミナール等があると思います。

監督団について

私達現役は、私たちの責任の下に自由にクラブ運営をやって行くべきですが、どうしてもそれに対して客観的な目と言うものが必要になって来ると思っています。この目の役割を現在熱心な若手のOBの方達がやっておられますがその時間的な負担やその他色々な面でお掛けする御迷惑は大変なものだと思います。又何年も同じ人にお世話になるのは、あまりにも無理が多いと思います。だから任期を何年かに区切り、何名かで構成されるはっきりした型の監督団の様なものが欲しいものです。この監督団は最高の権威を有し且つ厳正中立で、そして何らかの方法で選出されるという型になれば全く理想的だと思います。

このようにして、はっきりした型の余裕の有る監督団が出来れば、現役も余裕有る気持ちで相談を持って行くことが出来、又計画にも余裕が出来、クラブを運営して行くリーダー会、それにメンバーにも余裕が出て来ると思います。又、クラブ内に非常事態が起きたときにも、この監督団は確固たる態度でそれを裁断出来ると思います。

部員同志のつながりについて

人間であれば自然を嫌う人はほとんどないと思います。そこから出発すれば、山岳部へ入ってくるんで自然を相手の山を嫌う人はないと思います。私は少くとも大学の山岳部へ入ったら、山に対する心を通じて、私たちはつながらなければならない。むしろ自然につながるものだと思うんですが。ところが私たちは時として心が通じなくなる時があります。むしろ敵のように見えるときがあるかも知れません。しかし、そんな時、私達同志、山であった出来事の数々、自然の美しさなどを思いおこせば、おのずと心がとけあうのではないのでしょうか。

登山家の道は.....

14. 神前正博

山岳部の4年間は、丁度人生を小さくしたようなものだ。しかし誰もが歩める道であり、又そうでないと云える。新人として入部すると、赤ん坊のように山の魅力、楽しさを教えられる。云いかえれば人生をいかに歩むべきかを教えられるが如くに。山に対し高度な技術、部室生活を教えられる、自分なりのアルピニズムを育んで行く。新人は常に前進しなければならず、心身共に向上に努め、部の方針について行かねはならない。部生活は短い。3年になるとリーダーシップをとり、自ら学び、教えられるべきもの、これ以上のものを新人に与え、教育しなければならぬと云う義務、責任を持つことになる。教えられる、教える4年間は、余りにも短い4年間で、と云ったところで大学制度が4年なのだからこれを肯定しなければならぬまい。だがこの4年間は自然に挑んだ4年間のものだ。それは「死」と云うものが常に我々の上にのしかかっている。運命であろうが、不可抗力であつても-----。我々にとって死と云う問題はかなりな比重をしめている。部としては、どのようなことがあつても肯定してはならないことなのだが、個人的には、果してすべからず否定せねばならないのだろうか。死—遺難。それは一つの社会問題として、

社会に迷惑をかける。その社会、個人の集合体が社会であって、社会あつての個人でないはずなのに-----。利己的であると云われるかも知れないが、死と云う問題は難しい。

このように難しい条件の上に大学山岳部が存在している。各地のクラブに比べて特異な存在であることを認めざるを得ないだろう。この難しい条件を克服する一つの手段として、OBと親密な交流が必要であり、OBに色々と指導して頂かねばならないと思う。OBの現役の会として、「甲南山岳会」があり、その点について后で述べたいと思う。我々大学山岳部である以上、学生の誰れもが入れ、拒否すべきでない。我々は山を求め、そこから、何かを引き出そうとする。山を愛し、自然を愛する誰れもが入部することが出来る。我々は長期の合宿を行い、負荷でシゴかれ、岩登りでしぼられるのは何故。山を愛するのに何故安易な方法をとらないのか。どうして負荷や岩登りで死ぬ思いをしなくてはならないのか。我々は山を愛すると同時に、スポーツアルピニズムを目指し、より困難な、より高度な山行を通じて、本質的な喜びを求めている。山に登るのが山岳部。山岳部にかぎらないが特に山岳部は人間関係と云うものに注目し、我々の行動の基礎だと云っても過言ではあるまい。個人プレーは許されない。山を愛すると云う共通の目的を持って、先輩、後輩が一丸となってより困難なものにあたる。そう云う山岳部が好きだ。「良き岳人の育成」と云うビジョンをあげてきた。良き岳人とは何にか、良き山屋であり、良き学生であり、又社会人でもあろう。この4年間、一向にビジョンに到達する道さえ、思い出すことがなかった。良き学生になろうとは余り考えなかった。良き山屋であること。そういうものになれば満足したようだし、この事に関して後悔はない。だが、いつの日にか、そこに到達したいものだ。我々が求めようとする登山家への道は、果しなく長い。大学山岳部に於て、その基礎たるもの学び、それへの道へ導いて行かねばならない。先輩と我々現役とは、こう云う意味に於て、同じ道を歩もうとしている筈だと思う。甲南山岳会は山に登る会だと思えます。現役だけが登る会ではありません。山岳部の延長であり、現役の山行に対して、指導し、保護して下さるのが、甲南山岳会であり、又我々現役と一緒に山を登って下さるのが先輩じゃないのですか。先輩と一緒にテントの中でアルピニズムであるとか、山の哲学？を説いて下さいました。つらいシゴキにも我々はついに行きました。暑い時も、バテた時もあり、先輩にガミガミ云われたこともありました。その先輩が卒業と同時に山を離れてしまいます。無責任ではありませんが、現役時代には良き岳人の育成を説いておられました。現役が常に

六甲でキャンプしていますが、果して年一度、あるいは二度来て下さる先輩が何人居て下さるのですか。我々は4年間、人生の一途上に於て山を通じて、他の人間よりはスケールの大きな人間に育成したと思います。4年間は終りました。が先輩はまだ居るのです。現役と一緒に歩き、話をきかせて下さい。

確かに社会に出ると多忙でしょう。学生のように山一本にやれないことは解っています。貴重な休日を六甲などで疲労しては明日に影響があるかも知れません。あるいは俺の山への満足が六甲ぐらいで得られないと云われるかも知れません。しかし、先輩は六甲で待っています。又広義な意味に於て同じビジョン「良き友人」を目標している同じ仲間です。山岳部生活は社会に出て立派に通ずるとも云われて来ました。

本当に山は素晴らしい。4年間一生懸命登ってきた山、穂高は、剣は、先輩を待っています。我々現役がお共をします。一緒に登りましょう。登山家の道は果しく長く長いのです。

山登りについて思う事

4年 柏 敏 明

私たちは何故山に登るのだろう。今までにも色々な考え方が発表されて来たが、現在に至っても全まの人々が満足出来るような人定款的な理念は、まだ私たちに与えられていない。この事は登山と云う行爲の複雑さ、多面性を物語っているのであろう。或いはマロリーの云った「*Because it is there*」の言葉のように登山と云う行爲は理論づけの不可能なものかも知れない。こゝで私は登山の本質は何かと云った大それた考えを述べる気は毛頭ないし、又資格もない。たゞ私も山岳部の部員である以上、私なりに山に何故登るのだろうと考えて来たつもりである。勿論予備、欠点だらけでこれから大きく変化して行くこととは思うが、四年部員の時にはこんな考え方をしていたと云う一つの過程として述べてみたい。断っておくがこれは私自身の考えであって何も他の人にも通ずるとは思っていない。

先ず山岳部に入った動機を考えると、私は山がどうのこうのと云った理由で入ったのではなく、たまたま近親者に山が好きなものが居り、その話を聞いて好奇心から入部しただけである。だから山については全くの白紙の状態だった。それがあのホッカのつらさ、雪山での寒気、落石の恐怖、様々な苦しみを味あわされながらも山登りを続けてこれたのは何故だろうか。岩登り

が面白い。頂上に立つ事がうれしい。テント生活が楽しい。様々な山が好きになった要素が浮ぶ。しかしこれ等の要素は表面的な理由であって、その底には人間の本能を涵してくれる何かが共通して流れているのではないかと思う。

私はそれを、未知への憧れ、困難を乗り越え己を試したい意欲、それに自然、原始への郷愁の3つではないかと思っている。先ず未知への憧れであるが、未知なるもの新しいものを追い求める行状は、人間の本能である探求心から発していると思う。それが私たちを未開の地蔵、怨女峰、未踏ルートへとかり立てるのである。第二の障害を乗り越えようとする意欲、これは闘争本能とも云えよう。人間、特に男性は困難に立ち向いたい、全力をふりしぼって何ものかにぶち当たりたいと云う気持ちを少なからず持っている。私の場合その目標を今の所山に置いているのです。こゝで山での遭難について少し述べてみたい。山に対する無知、自己能力の過信から来る遭難は問題外である。私の云う遭難とは、自然の不可抗力とも云える要因によって死に至る時の事である。私も山での死は絶対にいけないと云う立場を取っている。それは社会に対する責任と云う巨大なものかみかえているからであって、全く社会との関係を無視出来るならば、私は困難に立ち向かって、全力をつくした後、万一敗れ去っても、私はある程度許されると思っている。く山に於ける危険と困難は別であると一般に云われているが、私は同一視している。しかし現実には人間は社会と隔離して生きて行けるだろうか。不可能である。だからこそ私は周囲に与える影さの大きさからして、その理由だけで私は山では死んではいけないと思っている。

話が少しそれたが、今の私たちが取っている合宿形式の最も大きな悩みは自分達の實力をしっかりと把握し、安全圏内で最も私達の闘争意欲を涵してくれる所を探し求める事であろう。

最後は自然、原始への郷愁である。現代に於ける社会は全く人間性を無視したものであると云えよう。今のメカニックな共同社会に於いては人間のあらゆる能力だけが要求され、一個人としての人間性は忘れられている。自然の巨威の前にたゞ一人だけの能力だけで立ち向った動物的とも云える本能そのものの原始時代の姿を今の社会には求めることが出来なくなってしまう。私の場合山に登った事によって眠らされていた原始本能を呼び起されたのである。その結果失なわれていたものを取り返そう。味わおうと山にそれを探求めて登りついで行つたのだと思う。悲しむべきことだが、私たちは長い歴史によって社会に従属するように慣れ込められてしまい、社会から脱

け出して生きて行く程の勇氣はもつなくなりました。そこでせめて年に何回か山に登って、少しでも原始の息吹きにふれようと努力するのである。以上の三つがお互いに作用して私を山に登らせるのだらうと思っいるし、又山によって満足させられている。当り前の筈だが、私は何も、未知への憧れとか、厚害を乗り越えたい、又原始に帰りたいと思いながら山に登っているのでは決してない。返ってこんなことを考えながら山に登ると息苦しくてたまらないだらう。これ等は全て意識外のことであり、様々な山に登る楽しさ、面白さ、苦しさ analysed 結果としてこの三つが大きく浮んできただけのことである。やはり私は山の美しさ、楽しさにひかれて登っているのである。私は山が好きである。たゞそれだけであるが、若気の至りであるその好きということ进行分析しようと試みた訳である。色々一人合点な事をかいてきたが考えも足らず、文才がないため思う事の半分も書き表わすことが出来なかったが、諸先輩又現役の方々の御批判、御指導を頂いて私の考え方が又一步前進させていただければ、幸せに在じます。どうか良ろしくお願いします。



◆ 高校山岳部合宿報告

高校山岳部リーダーとして

— 雨 里 章 —

思えば昭和35年の6月の始め、今は懐かしき旧岡本校舎の甲友会館山岳部の部室にひよっこりと顔を出してから知らぬ間に4年立ってしまった。この4年間で、本当に楽しい時もあった。またつらく苦しい時もあった。部員不足に嘆いた事もあった。しかしこれまで凝りこまれたのはひとえに山岳部という特殊な部の雰囲気の魅力を感じつつ、暖かい先輩諸兄の指導の下に、一生懸命打ち込めたからだと思う。またこれがたるみがちな僕の生活を充実させ、夏の縦走、冬のスキー、そして春山、すべてが忘れ難い楽しい思い出と作らしめてくれたのである。僕がリーダーになったのは去年の夏山合宿からであるが、その頃は上級部員がおらず、僕にとって精神的負担が実に大きかった。しかし先輩の援助や、部員全員が山に対する情熱と部を再建してこうという熱意、そして顧問の高橋先生を始めとする諸先生方の影ながら大きい力に助けられ、去年一年間を終えることができた。特に去年の初め、2週間、先生と7名の部員が一体となって比叡五竜山に取り組み、果たされた夙願で春山合宿を無事終えることができたのが印象深く残っている。そしてあの時の結果された力が今年の中高山岳部を支える柱となっている事を信じている。これからの僕達中高山岳部の在り方であるが、単に山に対する憧れだけで山に登るのではなく、自分たちの力量を客観視して計画を立て、山に対する科学的な探索も同時に行なっていき、山登りに対する心構えを作っていくという考え方から部活動を行っていくつもりである。また僕たち中高山岳部にもう一つ大切であると思うのは、上級生と下級生の顔ひつきである。それは日々のトレーニングや種々の研究会、キャンプ等を通して、公的にも私的にも親密さを醸成して貰いたいと思っている。家族的な部の雰囲気、山でのチームワークの発揮はこのような前から形成されていくのである。ひいてはそれが山岳部に属する個人の人間形成となるのであると思う。山岳部にはけしきトレーニングなど身につけた根性、部員全員が1つの目的に向かってそれを成し得た時に得たもの、それが何らかの形で私生活に生かす事が出来れば、何もいうことはない。以上述べて来たようなことを根本におし

で、僕はリーダーとして今年一年間をやって行くつもりであるが、来年度には現在の高一にバトンタッチするつもりである。

もちろん引退するつもりではない。今から中堅部員にリーダーとしての力量をつけてもらいたいのである。終りに、去年同様、部員全員が部を発展させる意欲をもって活動し、さらに暖かき一本の太い絆で結ばれた家族的な明るい部になることを願うと同時に、先輩諸兄先生方の良き御援助をお願い致します。

僕にとって何か故郷のような感じさえいだかせる山岳部生活を僕はこれからも充実させて行きたいと思う。

夏山合宿 (1963年)

佐野方則

裏銀座コース縦走

高松山岳部

<期間> 8月1日～8月7日

<メンバー> 高1、3名、中3、3名、中2、1名、O.B(乾隆也)

先生2名(高橋先生、桑原先生) 計10名

C.L. 南里章二(S.I.) 佐野方則(S.I.) 大村謙近(S.I.)

山本千秋(J3) 山本俊作(J3) 坂田茂樹(J3)

善野 誠(J2)

8月1日 ①

大阪 → 松本 → 信濃大町 → 七倉

朝早く大阪を発った。松本まで超満員で皆別々に乗り込む。そのため変な失敗を起した。後の車両に乗っていたのんきな3人の部員がリックの上につきわり、ねてしまい松本を発ってしまった。仕方なしに大糸線に乗りかえ、大町で彼等を待つ。かわいそうに彼等は飲まず食わずで藤井からトンゴで引き返して来た。駅からマイクロバスで七倉まで行きそこで宿営

8月2日 ①

七倉 → 濁小屋 → 三郎 → 烏帽子小屋

4時30分起床、6時出発。早朝の高瀬川を軌道にそってさか上る。すがすがしい気分だ。やがて濁小屋につきると休み。ここから烏帽子の急坂に取付く。2ヶ所か3ヶ所休みのピッチ。皆歯をくいしばってがんばる。16時頃やっと小屋につく。水を導るのに1時間ほど歩かねはならなかった。夜食に牛キンラーメンを食べた。

8月3日 ①→③ 晴々雨

鳥喰子小屋 → 野口五郎

今日からは尾根道なのでいくぶん楽になる。しかし昨日の肩の痛みがまだとれていないのでちょっとつらい。野口五郎岳の雪渓で昼食をとっていた時雨がパラリ、雷が鳴り出したのでそこでテントを張る。

8月4日 ③→●

野口五郎 → 雪ノ平

途中槍ヶ岳が姿を表わしてきた。立山、箕師も見えてきた。雪の平への道標のある所で昼食。荷物をそこにおき鷲羽岳へ向う。頂上からは槍ヶ岳がよく見えた。雪の平へつくときすぐ雨が降りだし急いでテントを張り中へ飛び込む。雪の平は雨のせいかジュワジュワの湿地帯のようで、美しい草原を考えていた僕たちをがっかりさせた。

8月5日 ③→③

雪ノ平 → 双六小屋

寒さと眠さのため仕事はかどらず、7:30出発。いやな泥道を歩き、黒部川を渡り三俣小屋を通り双六小屋につく。

小屋で水を使わしてくれた。小屋へおやつを仕入れに行く。人は多いが快適なテント場だ。

8月6日 ③→③

双六小屋 → 笠ヶ岳

人気がないガスのかゝった尾根道を、笠ヶ岳へともくもく歩いた。ガスのため何も見えない。ホームシックにかゝる者もたまくる。13時ごろテント場につく。たれもテントを張っていない。こゝではじめてマライナヨウの親子づれを見る。夜合宿最後の夜を楽しくすごした。

8月7日 ①

笠ヶ岳 → 槍見温泉

尾根上のテント場なので陽がさすのが早い。7時すぎに頂上につく。展望まさに圧巻。笠ヶ岳に別れを告げ槍見温泉へと降る。下るに従って人だん暑くなる。ありったけのファイトを出し下り麓げる。正午ごろつき、さっそく川のそばの露天風呂へ入る。久しぶりの風呂で実に気持ちが良い。死生方はこゝで1泊されるので僕たちはお礼をいって別れた。とうとう合宿も終った。美しい北アルプスの山々、つらかったが楽しい思い出となった合宿をふりかえりながらバスに乗った。

冬山合宿（兼スキー合宿）

山本千秋

〈期間〉 1963. 12.22. ~ 12.30

〈メンバー〉 CL. 南里、佐野、大村、平井、（高1）

山本（俊作）、山本（千秋）（中3）

12月22日 大阪出発（ちくま）

12月23日 ①

すずらん（9:30）→三木滝（11:00）→磨利支天（11:30）

冷泉小屋（12:55）→位ヶ原山荘（13:40）

すずらんて朝食をとった後、森本、樫崎、沢田さんが、むかえに来てくれた。兼賀岳は広い森林のすそ野を構えて、青空の中にうかんでした。風もなく、雪もふらなじ良い天気だったのですがすがしい。磨利支天で昼食。位ヶ原に着いたとき、大学の人々スキー練習をしていた。甲南ルームでゆっくりした。ストーヴはなつかしい。

12月24日 スキー練習（クリスマスパーティをやる。）

12月25日 “（我々だけテントで寝る。）

12月26日 “（大学の女の人下山。河野氏入山。）

12月27日 “（森本セミヌ勉強。平井さんが寝ている。）

12月28日 “ 井カンさんの上へおちる。カンサンはビクとしなかった。）

12月29日 ②

山荘→肩の小屋→山荘→すずらん→松本

まどをあけると、何日ぶりか、太陽が輝いていた。朝食後シールをつけて出発。登る程風が強くなる。肩の小屋付近では、アイスバーンで、しかも、氷がヒューヒューと顔に当たる。シールははすしたいが手が凍って動かない。スキーはとこへすべるか分からない。しかし肩の下の大雪原に出ると、これは全くすばらしい。スキーはよくすべるし、今までの苦しみなんか、とんでしまったようだ。比には鹿高の、いかめしい、男性的な岩もさびえ、この興奮は、山荘についてもおさまらなかつた。昼過ぎ、上赤、浪川、沢田サンと下山。山荘での雄サン、カンサン達の声も、山荘も小さくなり、ついに雪に消えていった。すずらんへはる時間つき、よく日大阪で解散。

（この合宿は、大学生のおかげで、楽しく過せ、又スキーも上達し、すばらしいツアーもできたことを感謝致します。

春山台宿

山本千秋

〈期間〉 1964. 3. 26 ~ 4. 4

〈メンバー〉 C.L. 南里、佐野、大村、平井、
山本(俊作) 坂田 山本(千秋)
高橋、木下先生

(高1)

(中3)

(先生)

3月26日 大阪出発(ちくま)

松本 ~~■~~ 神城 神城(10:15) → テント(16:00)

3月27日 ⊗

雪のちらつく松本で朝食をとり、神城に着いたときは、雪もふらなく、山は雲にひたれていて、下川伏尾へ連絡をすませた後出発。

神城スキー場までは、風もなく、良い直であったが、平井サンのバテヤ、スキー場を登った前で、アイゼンのつけ方を知らない有もいた為、多くの時間を費した。昼食後は、風も強くなり、坂もきつく、みんなバテ気味なので5ピッチ目の遠見小屋と神城とのほぼ中間地点と思われるところにテントを設営。

3月28日 ①

テント(10:05) → 遠見小屋(13:30) → テント(16:45)

朝、神城の町々や、電車がおもちゃのようにみえた。ワカンをつけて出発。踏跡があるので割合衆だが、太陽がギラギラ輝りつけるので暑つくままらない。遠見小屋にて昼食。五竜、鹿松、不帰、杓子、白馬 etc は、白の中に様々のコントラストな岩を形作り、けはけはしく、又八方尾根は、白だけのなだらかな山容をみせていた。じぞうの頭をこした時より、風、雪が吹出し、恐しさを加えた。テントは、鹿島槍、五竜の見える、中遠見付近で以後3日間のため、大分につくった。明朝はどうか晴れてくれますように。

3月29日 ①

テント(7:10) → 西遠見(8:20) → 五竜小屋(9:33) →
頂上(10:45) → 五竜小屋(12:05) → テント(13:55)

テントを出ると、眼前には、鹿島槍がゼラニッド型の偉容な姿をみせ、それと負けじと五竜も、カメの甲をニュッと天に突きさしているかのようなであった。アタックには、南里、佐野サン、山本(千秋)、高橋先生の4名が行く。踏跡もあり、雪がしっかりしていただとではせる事ができた。白岳の登りはきつい。五竜岳より固くまし、又、剣の方はカスのため何も見えない。風は不気味な音をたて、カスはあたりのものをかくし、たゞアイゼンがカシッカシ

と低い音をたてる。1度頂上をまちがえたが、10時45分無事五竜岳頂上についた。視界はゼロ。テルモスの紅茶が、緊張をやわらげてくれる。下山は途中まで確保をした。五竜小屋で昼食。頂上での風がこゝではうそのよう。白岳を下るあたりから、緊張も解け又雷鳥も見つけて楽しい山旅となった。そしてテントで紅茶を飲み、カスっている五竜を見た時やっと登ちよりの感激がわいて来た。又残留部員はキジ場や雪洞をつくって来てくれた。

3月30日 ○

テント(8:25) → 遠見小屋(8:50)(11:30) → 前のテント地(11:50) → 遠見小屋(13:00)(14:00) → テント(16:00)
南里サン、山本(千秋) 高橋先生の3人で、水戸先生を迎えに前のテント地まで降りた。

3月31日 ① → ②

テント(8:52) → 白岳(11:05)(11:20) → テント(13:00)
山本(千)の外全貫白岳へ行った。昼より急に五竜のあたりから雪が始め、又、あたゝかくなったため、ブロックが全部こわれた。つみなおす時みんな張り切って $1m \times 0.5m \times 0.5m$ のブロックをつくる努力。

4月1日 ② → ● 氷渡

風が強く、きのうの大きいブロックも又全部こわれた。夜からは風に雨も加わり、キジを打つのは非難なり。支柱をもつてねむる。

4月2日 ○

テント(11:50) → 遠見小屋(12:50)

きのうの嵐も、うそのような良い天気。今日でここもおサラバと寂しくなにか去りがたい。鹿島陰のカクネ望は今日も雄大でためいきが出る。そして眼下はわたのような雲海。富士山、雨戸も見え、360°すばらしい展望である。のんびりと徹収して、遠見小屋へ下り、夕方頃テントをたてた。スキーを持ってこなかったのが残念だ。

4月3日 ① → ②

テント(10:20) → 神威(11:20)

すばやく徹収して下山。下りはみんなよくすべった。神威からは、遠見小屋が、ちょこんと見えただ。

我々の力をすべて精算した。実にすばらしい合宿であった。

女子部経過報告

理4 沢田 立子

私が1年生のとき、先輩諸氏にいろいろと御無理申しまして、作っていた女子部も私達の卒業をもちまして一応解散することになってしまいました。その間、4年間私は私なりに努力もしてみたのですが、努力がたらなかったものと思います。1年目は1年生ばかりが五人、2年目にハイキングに行ったり、スキーに行ったりしてすごし、2年目は2年生が五人、1年生が二人となり、夏、冬と春には合宿をし、秋には六甲でキャンプをしてみたりして、何とか軌道に乗せようといっていました。翌年には、新入部員は得られませんでした。とどこおりながらも週一度の部会と月一度の山行を続け、また、夏合宿前にはトレーニングに初めました。月一度の山行には飯倉炊さんをもっとーとしていたのですが、男子の山行やトレーニングと一致したり、また、他の障害により、これもとどこおりがちでしたので、まず最初にコップエールや危丁等を購入して女子専用の物を準備しました。この際、費用がたらくまでラジウスまで購入できませんでした。購入せぬまゝ今日に至ってしまいました。夏、冬等の長期合宿時に於てもたゝテント生活はできないとしましてもせめて自炊でと云うのが我々女子の望みだったのですが、此の年の夏合宿にはできませんでした。しかし、春の遠見では男子部員の多大なる協力をお願いしてなんとか自炊生活をやれるようにまできました。4年目に入りまして、4年生が3人になってしまいましたが、3年生が2人、2年、1年が各1人となりました。そして、5月の連休を利用して比良山で5月合宿を行いました。この山行は女子部として初めてのテント生活でした。食糧やテントを担いで遠くへ出かけましたのは、これが最初で、そして最後になってしまいました。5月合宿から帰ってまいりました時、我々は「男の方々に大変な迷惑をかけるが、私たちでも何とかテントを持って2、3日なら行けようだ。」と大いに喜び、また、将来に期待をかけたのでした。でも日がたつにつれ、4年生は就職試験や卒論で忙しくなって部活動がおこたりがちになりますし、1年生の者が体をこわして休部すると云った具合で、夏合宿に参加できたものは3年生が2人といった事態になってしまいました。そして今の4年生が卒業してしまった後は部員が3人となり、その内2人が4年生ではとても部活動はできないと云う事で解散することになりました。

この後、何年かたって女子が山岳部に入ってきた時は、私たちと同様

にあたゝかく迎えてほしいと思います。4年間、いろいろとありがとうございました。

＝ 女子部合宿報告 ＝

夏合宿 東銀座

〈人 員〉 武田 (E4) 金上 (L3) 鹿子木 (L3)
沢田 (S3) 湯前 (L2) 三井 (S3)
〈期 間〉 7月19日 ～ 7月24日

7月19日 21時35分大阪出発。

7月20日 晴

大町 → 瀧小屋 → 烏帽子岳

七倉から瀧小屋までの軌道はどうも歩幅とあいにくい。広くしたり、狭くしたりでけっこり神経を使う。瀧小屋で上着を着込んだり、ザックや靴のヒモをしめなおしたりして準備オーケー。サア、元気に出発だ。小屋の横から瀧沢に出る。水なんて全然ない砂の河を横切って登山道へ。ほんのわずか登った所の水場でもはやお昼。昼食後いよいよ本格的な登りとなる。御飯は食べたし、みんな元気いっぱいしょいしょ登って行った。餓鬼岳の頂がブナの本の間が見えるころにはフウフウ云って、武田さんから「歩くという事は止るのが少ないと書くんや。止まらんと歩け歩け!」とおこぼとちようだいした。こんなことではいつになったら小屋に着けるんだろう。心強い事だと思ってもみたが歩かなければしかたがない。とにかく歩け歩けと思ったりひよいと小屋の横に出た。

7月21日 晴

烏帽子 → 雲の平

6時起床。7時に武田さんを迎へに行く。同じようなテントがいくつもあつたどれやらわからない。大声で呼んでみようか等と5人でワイワイ云つたら、そばのテントから雄さんが飛び出して来てあつと云う間にザックをかついて「ソウラ、デッパダ!」と云われたのにはびっくり。御飯も食べずに大丈夫かしら?。素晴らしい好天気だった。北アルプスの山々380°の展望の眺められた。我々は北アルプスへの高山植物と雪渓を楽しみながら

表土のであるが、高山植物の方は尾根に出るすぐ、あちこちに咲いているこまきさを見つけた。沢山あるだろうと思ってまた雪溪がほとんどなくてがっかりした。水晶小屋のあたりで昼食にするつもりであったが小屋は台風でこわれたまゝで、土台だけが残っていた。少し行った所に雪溪があったから空腹をかゝえてそこまで行く。やっと雪溪らしい雪溪に立てた。

陽は容赦なく照りつけるし、水影はないし、のどはカラカラ。灰には水筒がカラカラ。しまいにはお腹もカラカラ。されど水場も、又雪溪もなし。よって昼食も出せず。と云ったような苦しい「午前」ともこれで列ねられた。雪ドケ水をカラになった水筒につめて出発。祖父岳の所で武田さんと列れて我々五人は雲の平へ。吉松の間を迷路のように輝いている道をたどって小屋についた。

7月22日 曇のち雨

雲の平 → 三俣蓮華岳

今日は休息日。ゆっくり雲の平を散歩しようという計画で8時ごろから身で小屋を出発。空は今にも降りそうに雲が低い。奥日本庭園や、アルプス庭園等で1時間ばかり写真を撮ったりして遊んでいたが、早く三俣小屋に行っただけ良かったらと云うことになり、さっさと出発する。雲の平を出はざれた湿地で早い昼食にする。三俣山荘に着いたのが2時頃だったか、荷物を置いてその辺りでも見に行こうかと云っていたら夕立になった。各々家や友達の家へと帰る。書きをす。

7月23日 晴

三俣蓮華岳 → 槍岳

今日は定刻に武田さんが小屋に入ってきた。三俣から双六へは快道だった。陽はそれほどはげしく照りつけず、水々は昨日の雨で流れて青さを一層増したようだった。それに空はよく晴れていた。午前から少し風が吹いて来たようだ。陽のあたる場所をよって昼食をとったのだが、時々風が吹いて寒くさえて来た。西嶺尾根に行く頃には少しガスも出て来た。そして谷をかくした。我々にとってはこの方が良かったと思う。

7月24日 晴

槍岳 → 上高地

槍の穂先で日の出を見た。今日も元気の良いことをたしかめてから槍沢を下った。槍まで来るとさすがに人が多い銀座だと思ふ。

梓川のほとりで名残の槍と列ねをおしんで、昼食とる。

乗鞍スキー合宿

〈期間〉 12月20日～12月26日

12月20日 21:35大阪出発。

武田、堀崎、上本、沢田(男)浪川、三井、丸山、金上

12月21日

スキーや荷物をかついで雪の山を8Kmも歩くのは私たち女子にとって初めて。それに飛入り、理学部3年の丸山嬢が加わり歩けるかと心配であった。だが30分も歩いたかと思われる頃、沢田さん胃の調子が悪いとかでダウン。一番弱いのは私たちでないことを知り幾分気が楽。上に行くに従い段々雪が激しく顔に吹きつけ手が痛くてやりきれない。磨利支天で昼食。エネルギーをつけようと懸命に食べるがあまり入らない。昼食後1時間程歩いた頃、堀崎さん膝がえりして痛そう。冬山で遭難したらいかばかりと身震い。冷たさ一段と加わり手は自由がきかない。冷泉小屋まであと二息位と思われる所で上から森本さんが迎えに来て下さる。そこでやつ元気回復。だが冷泉までもう一息の辺りから男性群、荷物の重さに耐えかねてドンドンピッチが落ちる。歡迎りまでのラッセルをしなければならぬので森本さんが先にたって下さる。冷泉での熱いお茶とお漬物、嬉しい食物はかっぴ味わったことがない。冷泉からシールをつける。これ又初めてのシールで変な所でエッジをたて思うにまかせない。位ヶ原までもうわずかの所に角付けして登らねばならない急な坂がある。こゝまーもめ。浪川さんは咽まで、三井さんも道の脇の深みに、そして私は木の間に引っ込みウーンともスンとも動かない。4時頃ようやく位ヶ原着で生き返った心世。

12月22日 晴

風に積雪が吹きとばされて曇ったような晴。だが雪はこゝんでもパタパタはたけなオーケーのとびきり上等。まずは小屋の近くでウォーミングアップそして、森本さん武田さんの御指導で直滑降を練習。午後から男性群はテントの準備。かくて無事に一日終る。

12月23日 快晴

朝、窓から顔を出すと山々がスミレ色からピンク色に変わっていくのを望む。伽の国の様な美しさにウットリ。「乗鞍に来て良かったね。」と三井さんたちと感嘆の溜息をもらす。午後はまさしくコバルト色という色の空。藍く名前が解らないが、とに角視界は広く覽曲の山は悉く見えたと思う。今日は中高生の入山とて森本さん以下二人は飯綱までお出迎え。同じ位ヶ原山

荘に宿泊中の東京女子医大の面々及びこの雪積の中で勇ましくもテント生活を競ける日本女子大の方、数人はチャンスを逆すなかれとツアーに出る。残るは数人の医大生と私達のみ、広い斜面を思い切り使えて「ゴメレー」といって突進しなくてもすむことを意味する。） 杖道。だがじゃまのないことは却スキーの練習がよくできるにつながらないようである。張り合いがなく。夜の我、甲南ルームは中高生で一段とにぎやか。

ノ2月24日 雪

寂しい風の音で目を覚すと外は雪。だが音程寂しい天候でもなさそう。今日は中高生も混って、又医大生の皆さん3の名許りもお揃いで相当混雑。小屋のトシさんに山回りのコースを受ける。トシさんの妙技たるや溜息かであるばかり。夜はクリスマス・イヴでトシさんの安眠節を聞かせて頂く。素朴で日本版クリスマス・イヴのムードにぴったり。

ノ2月25日 曇時々雪

最後の日だから少し(大部)未熟の様だがツアーに連れて行って頂く。天候は良好とは云えない。途中どうも私は角付けの段になるとズルズルと滑ってもとの位置。とまもみなさんに時間をロスさせ申し訳なかった。雪が吹きつけるし、毎の小屋までは無理の様と途中で断念。斜滑降、キックターンの連続で少し下り、そこで二時間程テール流し等の練習。再びキックターンをおり混ぜて山スキーの醍醐味を味あわせて頂き無事位ヶ原に着く。素晴らしいかった。

ノ2月26日 曇時々雪

朝食後、スキーをはいま雪窪窪になりながら帰途に着く。武田さんとノ耳生の方2人が鈴蘭まで送って下さった。冷泉を少し超ぎてスキーをかつぐ。壺足の方が予程スムーズに行くことが解った。鈴蘭近くで入山する河野さんと出会って別れる。お昼頃無事鈴蘭に到着。

以上が冬の乗鞍のコトです。ゲレンデスキーはした事があっても雪の山がこんなに美しく、こんなにキレイな事を初めて知り、山に対する魅力が増加しました。そして行く前はついて行けるかとそればかりが心配でしたが私たちにも雪の山を歩けるという自信が付き本当に良い経験をさせて頂けたと思っています。

(記. 金上優佐子)

春山合宿 遠見尾根

〈人 員〉 井本(S 3) 瀧路(B 3) 金上(L 3)
沢田(S 3) 徳永(L 2) 三井(S 3)
井上(L 3)

〈期 間〉 3月/4日 ~ 3月20日

3月/4日 2/ 将3ヶ分大阪出発。

男子井本・国分の2名と女子4名とで出発する。

3月/5日 曇

女子にとって始めて自炊で長期間の合宿である。少し不安を抱きながらも元気一杯。神城に着くと雪が敷しく降っていた。無理をするまいと思い/日がレンデマスキーをつけた。1年のブランクは、やはり感を失わせるらしく皆実によくころぶ。昼頂上から瀧路さんと竹中さんが降りて来た。彼等のあまりの変わりように目をみはるだけ。

3月/6日 雪

神城 → 遠見小屋

瀧路さんをメンバーの1人としてク人でのぼる。女子にとっては、荷を背おし、長時間雪の上を歩くのは初めて。スリッパが多く、悪天候と重なってずい分苦しい/日の行程であった。荷物が多いため少しデボする。小屋にたどりついた時皆なまいってしまった。

3月/7日 曇

あまり天気も良くないが雪がやんでいるので小遠見まで行く。途中までスキーをもってゆき、帰りはそれで降りてきた。ころぶと全身雪まみれになるがそれでも楽しかった。今までがレンデマやっていたから、こんなに雪が多いと全くお手上げである。

3月/8日 曇

下におりるもの、小屋の周りでスキーをやるものに列れた。下におりる時スキーをはいてであったので、ずい分と手間どった。こゝでまた、私達女子部員は、コートにつきしっかりとしたスキー技術をつける事の方が先決問題と思った。帰りはデボした荷物も持って、いさにて帰った。上の人たちは適当にスキーをやり、始めてスキーをはいた人がどうにかすべれたことはうれしいニュースであった。

3月/9日 晴

何という素晴らしい天気であったろうか。皆しばしその美しい景色に我を

忘れた程である。今日は全然荷がないので、男子の方が困った程、私達女子部員のピッチが上がった。これもやはり、雪の上を歩くことになれたからではなかろうか。帰ってまで日が高いので、もう一度スキーをつけた。明日は山をおりる日だが晴れてくれればよいと思う。

3月20日 ふぶき

すごい吹雪。小屋の人の話では、上だけで谷間に入れば後は泉だということで、おりることにした。本当に一歩小屋の外に出ると、息も出兼ね程、雪が吹きつける。でもみんな元気に山をおりれたことは喜ばしい事である。

この1週間をふりかえると、まずスキー技術の不足。食糧計画のまずさ、耐寒に対する忍耐の不足等が上げられる。食糧計画のまずさというのは、途中で少し買いたさねばならない事は、とて人にもえた事ではない。今後食料係はたゞ他人のいうわがまに押し流されない事である。最後に男子部員に迷惑をかけたことを多に申し訳けなく思っている。これからは出来るだけ女子部員だけに行けるよう、努力をしつめきたい。

—— 沢 田 立 子 ——



<5月合宿行動表> (鹿島槍岳東面)

4月26日 先発管・井上出発
 4月27日 本隊井本以下23名、0
 B1名(裁田)出発
 4月28日 松本→大町→鹿島郡落
 →西俣
 管・井上偵察
 午後1年生雪上訓練
 4月29日 縦走隊出発(管 伊丹
 横山)サポート隊神前 鈴木・八
 倉 鎌尾根より
 ABC隊出発(行動記録、別記)
 (武田・永渡・柏 堀崎)サポー
 ト隊堀崎
 井本以下4名新人訓練
 4月30日 午前中泥 午後全員で
 雪上訓練
 5月1日 泥
 5月2日 長谷川・鈴木・河野・裁
 田・ダイレクト尾根
 福田・八倉東尾根
 井本・森本・井上/年生5名、赤
 岩尾根
 裁田伏下山
 5月3日 井本・森本・福田・神前
 井上・八倉 ダイレクト尾根
 鈴木・河野・布列糸東尾根
 5月4日 井本・森本/年生5名、
 東尾根
 鈴木・井上・八倉・堀崎 冷尾根

5月5日 マッしゅう

以上 BCのみ

縦走隊

4月29日

西俣BCーハッ峰キレット

4月30日

泥

5月1日

泥 ハッ峰

5月2日

ハッ峰キレットー唐松小屋

5月3日

唐松小屋ー不帰キレットー天
 狗小屋

5月4日

天狗小屋ー鎮温泉ー細野ー
 大町



夏山合宿アタック一覧表

月 日	二 股 (B.C)	三 の 窓 (A.C)	東 大 谷 (A.C)
7 月 16 日	ハツ峰 (L. 柏、堀崎、 林、浪川) 源治郎尾根 (L. 井本、 森本、井上、上本)	剣尾根 (L. 長谷川、鈴木) テンネ 中央チムニーGチムニー cdクラック 左方ルンセaバンドと クラック (L. 水渡、堀路) テンネ 中央チムニーGチムニー cdクラック	西尾根 (L. 菅、伊丹、横山)
7 月 18 日	ハシゴ段より内蔵助平 (L. 井本、森本、柏、 堀崎、井上、上本、 浪川、林)	ハツ峰6峰A.C. 各フェース	G1アタック出来ず引 返えす (L. 菅、伊丹、 横山)
7 月 19 日	ハツ峰 (L. 井本、森本、 上本) 源治郎尾根 (L. 柏、堀 崎、浪川、林)	ハツ峰6峰A.C. (L. 水渡、堀路) 剣尾根 (L. 神前、八島)	G1 G2 G3 連続登攀 (L. 菅、伊丹、横山)
7 月 20 日	マイナピーク (L. 井本、柏、堀路 林、上本)	ハツ峰6峰Aフェース 中大ルート (L. 神前、八島) 剣尾根 (水渡、堀路、井上)	
7 月 21 日	ジャンタルムAチムニー(井上、上本) " " (L. 柏、林) " Cクラック(L. 堀崎、上本)	テンネ 左枝線 (L. 水渡、八島) 本峯比窪 (L. 神前、堀路、井上)	右俣 ~ 左俣 (L. 菅、伊丹、横山)
7 月 22 日		中央ルンセ (L. 井本、柏) ハツ峰5峰ニードル三の窓 側々壁 (L. 長谷川、堀路) ハツ峰5峰Bフェース (L. 森本、井上)	
7 月 23 日	前剣東尾根 (L. 水渡、堀 路、神前、鈴木、上本、林)		

7月24日	三の窓尾根 (L. 神前、水渡、塩路、林) クオパトラニードル (L. 鈴木、林)	中史壁頂家 (L. 井本、柏) 右俣 壁右岩稜 (L. 長谷川、塩崎)	
7月25日			前剱西壁 (L. 菅、横山)
7月26日	大窓 ~ 小窓 (L. 神前、村上、塩路、鈴木、上本、林)	ナンネ 左下カテ左稜線 (長谷川、ハ島) 剱尾根ドム壁 (L. 柏、塩崎) 池の谷右岩稜 (L. 井本、井上)	駒草ルンゼ再偵察 (L. 菅、伊丹、横山)
7月27日	本峯南壁 (L. 村上、林) 本峯北壁 (L. 村上、上本) (L. 塩路、林) クオパトラニードル (L. 塩路、上本) ナンネ 日嶺ルート 左稜線 (L. 神前、鈴木)	ナンネ 左フェース左方カ ンテ (L. 井本、柏) ハツ峰6峰Dフェース・ベルニナルート (L. 塩崎、井上)	駒草ルンゼ (L. 菅、横山)
	ナンネ 中史壁Aバンド (L. 水渡、浪川) " " (L. 稲田、林) 左方ルンゼバンド (L. 神前、上本) ジャンタルムC (L. 鈴木、浪川) クオパトラニードル (L. 水渡、浪川)	小窓王西壁 (L. 井本、ハ島) クオパトラニードル三の窓側フェース (L. 長谷川、柏)	

秋山台宿 (穂高岳、涸沢、北鎌尾根)

穂高岳 (BC 涸沢) 行動表

10月12日

井本以下15名出発

10月13日

菅以下8名、上喜也 → 明神小屋

10月14日

明神小屋 → 涸沢

10月15日

泥

10月16日

○北穂高岳東稜 (菅、伊丹、塩路、上本、浪川、松井)

○滝谷第二尾根 (森本、神前)

10月17日 泥、伊丹、塩路、横山偵察、上本下山

10月18日 ○北尾根 (菅、伊丹、塩路、浪川、松井)

○第四尾根 (神前、森本)

六甲近辺山行記録(1963年度)

月 日	場 所	参 加 者
4月20日 ～21日	ロックガーデン	武田、長谷川、福田、村上、井本、伊丹、神前、柏 庵路、菅、水渡、塩崎、河野、鈴木、八島、横山、 林(英) 林(政) 浪川、酒井、稲岡、松井、岸里
5月18日 ～19日	風本公会堂	(山祭り) O.B. 香月、柏(兄) 阿部(公) 広瀬 誠田、伊藤、柏木、飲田、岡田、現役全員
5月25日 ～26日	蓬 萊 峽	森本、井本、伊丹、柏、神前、庵路、菅、水渡、井 上、塩崎、鈴木、横山、林、浪川、酒井
6月1日 ～2日	塩屋一六甲 一部屋	井本、伊丹、柏、水渡、本田、井上、塩崎、河野、 鈴木、横山、林、浪川、上本
6月8日 ～9日	風本バトルス	長谷川、井本、伊丹、神前、柏、庵路、菅、水渡、 井上、鈴木、塩崎、横山、八島、坪田、浪川、酒井 林
6月15日 ～16日	保 壘	森本、長谷川、井本、庵路、柏、神前、松井
6月29日 ～30日	風本バトルス	森本、長谷川、井本、神前、水渡、井上、塩崎、鈴 木、横山、浪川、上本
6月22日 ～23日	ロックガーデン	森本、長谷川、井本、伊丹、柏、神前、庵路、菅、 水渡、井上、塩崎、鈴木、八島、横山、林、上本 酒井、浪川、松井
6月30日	風本バトルス	森本、長谷川、井本、柏、神前、菅、水渡、井上、 塩崎、鈴木、横山、上本、浪川
9月22日	ロックガーデン	(慰霊祭) O.B. 香月、佐野、福田、水全、麻呂 町中、伊丹(兄)、福井、伊藤、誠田、広瀬、二谷 現役全員
11月2日 ～3日	ロックガーデン	伊丹、柏、庵路、菅、水渡、鈴木、横山、八島、沢 田、林、浪川
11月11日	仁 川	井本、伊丹、柏、神前、菅、水渡、井上、塩崎、鈴 木、横山、八島、上本、浪川
11月16日 ～17日	道場・百杖岩	(O.B.) 誠田、伊藤 (現役) 武田、長谷川 井本、伊丹、柏、菅、水渡、塩崎、鈴木、八島、上 本、浪川

11月23日 24日	岡本バトレス	伊丹、菅、柏、神前、鈴木、八倉、横山、上本、浪川
11月30日 12月1日	修法ヶ原	関西学生山岳連盟、神戸ブロック合同Comp（当番校、甲南大学山岳部）武田、村上、井本、伊丹、柏、神前、菅、堀路、水渡、竹中、本田、安井、井上、堀崎、鈴木、河野、八倉、横山、上本、浪川

編集後記

時報五号がおくれたことに関し弁解の余地はない。編集井本の急務にほかならない。この種の発行物がいつもおくれるものである事を十分認識しておきながらこのようにおくれたことに関し自分自身に腹を立てている。

時報は合宿報告が中心になるものであると考える。今までの時報を見るに報告と紀行文の区別がほとんどなかった。報告とは写真であり、客観描写である。そして紀行文はそれ以外のものである。報告と紀行文を区別することを念頭に原稿を依頼した。はたしてどうであろう。

各学年の人に各自のビジョンを書いてもらうことになっていたが4年生3名のみになり中途半端なものになったのは残念である。

この時報は甲南大学山岳部々員の思考度合いを表わすものである。もし程度が低いと判断するなら鑑証して下さい。

井本、水渡、菅の3名が編集しました。校正その他種々の仕事を水渡、堀西君がつつがなくやってくれた。この時報発行に関し両君に負うところが多い。

最後に甲南大学山岳部の発展をいのり

Berg Heil

（井本 洋記）

昭和40年8月25日 印刷

昭和40年9月1日 発行

—(非売品)—

編集者 井 本 洋

印刷所 神戸市灘区永手町1-10
野田謄写印刷所

発行人 神戸市東灘区本山町岡本
甲南山会・甲南学園山岳部



